毛輸出禁止に關して痛切に感ぜられる。日本が羊毛生產國で無いといふことは英吉利人は充分承知の筈であつて、濠洲から羊毛の輸入が無ければ日本の羊毛工業は全く消滅に歸して了ふ外は無いと言つても宜い。又印度の棉の貿易も、直接に棉の輸出を禁止した譯では無いが、棉の禁止と同一の作用を有するやうなカウンシルビルの事件の如きは、英吉利は印度の外に亞米利加から棉の供給が有るからと言ふかも知れぬが、印度の棉無くして、日本の木棉工業が成立つて行けないといふことは明かな事實である。是は些細な品物であれば宜いが、木棉といふものは多額の消費が有り、又國民の生活に於て殆ど日用品とも言はる可き、食料品に次で肝要な物である、其を供給する側の都合で以て直ぐ杜絕すると云ふが如きは、之を人道の上から言つても、之を商業の通理の上から言つても恕す可からざることである。況や我國が自國の利益といふものを殆ど眼中に置かないで、經濟協商の決議に加はつて着々として之を實行しやうといふ位地にすらも進めて居る處であり、又た公然英吉利を助け露西亞に軍需品を供給したり、有らゆることを日本は力の及ぶ丈は先以てして居る積りである。斯う云ふ國民は殆ど他國に見られない位、日本國民は英吉利に忠義な人間である。日本の國家の次に英吉利の國家を殆ど祖國と考へる如く、動もすると日本の國旗に添て英吉利の國旗を閃かして喜んで居る位人の好い國民である。此國民に對して英吉利が假令自己の必要上萬已むを得ざるとゝしても、よく〳〵で無ければ必要品の供給を困難ならしめ或は之を杜絕するといふとは愼まなければならない筈であるに、さう云ふ樣な斟酌なしに、思付き次第でポン〳〵禁令を發する、事實さうで無かも知れないが、直に取消す處を以て見るとさう云ふ風に見える。

三

一體商業國としての日本の立場から言つても、工業國としての日本の立場から言つても、獨逸と戰をすると云ふとは甚だ不利益である。成程獨逸の軍國主義憎む可しだが、其軍國主義の爲に我日本は今日まで何等の害を被つて居らない、歐羅巴に於てこそ普魯西の軍國主義といふものが害をなして居つたかも知れないが、我々日本は普魯西の軍國

主義の爲に何も損を被らぬ、否、日本が露西亞に勝ち、支那に勝ち得た處の陸軍は獨逸の眞似をしたから出來た。是が英吉利の眞似をして居つたり佛蘭西の眞似をして居つたならば、果して日露戰役、日清戰役のやうな成績を擧げ得たか否かは分らぬ、寧ろ我々は普魯西軍國主義の餘澤を被つて居るとも害を受けて居る點は少しも無い。反對に商業國として日本の利益と動もすれば衝突し動もすれば是から危險を恐れなければならないのは英吉利の商國主義である。英吉利の海軍主義である。一々具體的の事實を擧げる迄も無く、一番多く日本の商業的利益が劫かされて居る反對の相手方はといふと、英吉利の海軍である、英吉利の商賣である。極端に言へば歐羅巴の地圖から獨逸といふものを省いて了ふとしても此は日本に取つて殆ど意味を持つて居ないが、若し世界地圖から英吉利が省かれて英吉利の商賣が世界に無くなり英吉利の海軍が無くなれば、其部分丈けは世界各國に頒つ、其大部分は亞米利加なり獨逸なりが取つて了ふかも知れないが、日本と雖も多少の分前は取られる。英吉利が占めて居る大きな利益の何分か英吉利海軍の何分かは取れる。無論我々はそんな事を希望するといふ事は無いが、若し何方かの國を潰さねばならぬと云へば、日本の利益丈けから言へば寧ろ世界の大部分、全世界の利權の大部分を獨占して居る英吉利を無くして呉る方が日本の爲めには結構と思ふ。但し我々はそんな事をば冀ふのではない。各國各々立つ所以は其經濟上の利權を尊重し、獨立國たる體面を尊重して行つて、我も利すれば彼も利しつゝ充分並び立つて行けることを知つて居るからである。成程英吉利人から言へば獨逸の勃興といふことは當面の敵であつて、之を滅すなり其力を殺ぐことは大變必要であらうが、我々から言へば毫も其必要を感じて居らないのである。

四

我々が澤山の軍費を使つて獨逸と交戰をしたのは、決して日本の利益本位から之をしたものでは無い。日本の利益本位と云ふ點から言へば、此戰爭は初から嚴正中立した方が宜しいかも知れない。併し我々は英吉利を中心とした世界の今日の狀態を以て、打破す

べきものとは考へて居らない。矢張り現狀を維持して日本の富强を圖つて行く事が充分出來るといふ事を信じて居るからである、又向後も正さにさう信じて居る。日英同盟といふものは畢竟日本と英吉利との利益が或點に於て衝突するものと認めても、戰爭にまで行くべき筈のもので無い、之を我々忠實に守つて居るといふものは我が彼を重んずるが如く彼も我を重んじて居る、其誠意と信用とが有るからである。然るに英吉利の爲す所を見るに自國の持つて居る特別な地位を無用に利用して、其所謂經濟權を振廻すかの如くに考へられる。例へば敵國との通信を禁止する如き日本に取つては殆ど意味をなさぬ、甚だ愚な事と言はねばならぬ。今まで既に戰爭が始つてから二年有餘の間も敵國臣民と通信禁止といふことは少しも無くても、別に獨探の爲に日本が惱まされたとか、日本の秘密が利用されたといふことは無い。向後日本と獨逸と交戰行爲を交ゆべき機會は斷じて無い。然らば青島攻圍中にさへ必要で無かつた通信禁止といふとは、モウ疾くに青島が我國に歸して了つた今日に於て之をやる必要は寸毫も無い。否、之に依つて多少

我々は敵國の樣子を知らうと云ふ僅かな途さへも杜絶せられて了つて、我々は全く英吉利人の許可した材料を以て、英吉利人の知らして宜いといふ事柄丈けしか知ることが出來なくなつたのである、甚だ迷惑千萬な次第である。所謂鎖國の狀態に陷つて居る、是は決して日本の利益からやつたもので無い、誰が見ても分つて居る、英吉利の爲めの御奉公で、主としては英吉利の爲めにして居る。我々個人としては敵國人との通信禁止といふやうな馬鹿々々しいことは止めて貰ひたいと思ふが、併し是れは英吉利の苦しい地位を思つて居るから我慢をして居る。それといふものは畢竟英吉利が我國の經濟上の利權に對して相當なる尊敬を拂つて呉るといふことを待望んで居るからである。然るに巴里會議が開かれて、未だ間も無い今日までに頻繁に起つた處の事實は動もすると却つて經濟協商の無い時よりも、日本の經濟權は、英吉利の一擧手一投足の爲に容易く危險に曝されるといふやうな有樣で、危險の念を餘計深からしむる外ない。決して之に依つて安心の出來ると云ふ狀態に達して居ない。

五

又是は他日必ず問題になることゝ思ふけれ共、過般亞米利加から聯合國に對して講和に關する意志を尋ねた時に聯合國から答へた條件中には我日本に關することが、一つも擧げて無かつた。其條件中に到底出來ない相談みたやうな事も書いてある。例へば土耳其帝國を全然亞細亞に驅逐し去て了ふといふ樣な事は、到底出來るものでも無し、世界平和の爲に何も必要で無い。白耳義や塞耳維の虐げられた人民を充分に慰めるとか、損害を賠償せしむるとか、獨逸の軍國主義の跋扈を防ぐとかいふ事は必要であるが、土耳其帝國を亞細亞へ追拂つて了ふ、そんな出來ない相談の緣も所由も無い事さへ謳つて居る彼條項中に、東洋の方面に於ける獨逸の跋扈を制限し、若くは、東洋貿易の侵害を防ぐといふやうな事は些とも無い。要するにあの戰爭は矢張り歐羅巴の戰爭で歐羅巴人の都合に依つて、其條件なるものも歐羅巴丈けに限られて居つて、歐羅巴以外のことは何も言つて無い。是はどう云ふ都合でアヽ云ふやうな回答をなして、其回答に日本が加はつて居るか、無論日本も承知の事であらうけれ共、例へば青島は無論の事として、日本が今一時的に占領して居る南洋諸島はどうする。未だ占領して居ないアルサス・ローレンは佛蘭西へ取るといふ事を言つて置き乍ら、現に占領して居る獨領南洋諸島は果して今の占領者たる日本の有に歸着せしむるとか、それとも是は只だ返して了ふか譯が分らぬ。南洋諸島は經濟上の價値も餘り大で無いだらう、けれ共日本が之を占領した以上は他日之を土臺として南方に於ける經營の基礎としやうといふ望があるからである。單純の感情を離れ、行掛りを別にして日本の經濟的利權といふ立場に於て、青島は支那に返して了つても、南洋諸島を日本の領土となすか、或は領土としないまでも之を日本の經濟的利權の根據とするといふことは確定して貰はなければ困るので、講和談判の時にムザ〳〵之を取れるとなると、其時になつて日比谷の公園で燒討をしたつて追付かない。其機會は過日の亞米利加が發した回答の時が機會であつたらうと考へる。然るにそれが謳つて無いといふ如きはどう云ふ消息であるか、分らぬけれ共、兎に角日本の經濟的利

權の尊重といふことは、聯合國の眼中に殆ど無いといふ事を證明して居やしないかと思ふ。我輩は決して對外硬論者、或は帝國主義論者の如く無暗に領土を擴張するとか、人の隙に乘じて日本の領土を擴張するとかいふ火事場泥棒主義を考へて居る物で無い。正々堂々として取る可き物は取り、取る可らざる物は斷じて取らぬといふ主義で有つて欲しい。領土擴張主義なんといふものは御免を被りたいと考へて居るものである。併ながら既に南洋諸島は日本が占有して居る、之が爲めに若干なりと日本は現に犧牲を拂ひつゝある、其犧牲を悉く無駄にして了ふといふことは是は如何にも日本を無視したものと言はなければならぬ。無論國の名譽國の體面といふものは重んず可きものであるから、英吉利と同盟國たる爲めに經濟上の利權を捨てゝ迄も協商に加はつて居るが、日本の爲には何の利益の無い通信禁止、其他の義務ばかり課せられて當さに得べき經濟上の權利は何も得て居ないといふことは甚だ殘念な事である。

歐洲戰の終結が何時になるかといふことは、神ならぬ身の豫言することは出來ないけれ共、併ながら既に講和に向つての一つの石は投ぜられて、一波萬波を生ぜんとしつゝある有樣であつて、今日に於て既に講和の時に向つての用意はして置かねばならぬのである。扨此講和の際に方つて今日聯合國の英吉利などの政治家が公言して居るとは所謂驅引であつて、商賣國なる英吉利は戰爭にも商賣根性を忘れない、講和に於ても商賣根性を忘れない、餘程懸直があると見ねばならぬ。實際となるとナカ〳〵土耳其帝國を亞細亞へ放逐することは出來ない相談で、餘程讓歩しなければならぬ。さて讓歩する時になると人事の通則として一番抵抗力の少い處が一番先きに犧牲に供せられる事は分つて居る。例へば露西亞のリスアニヤは獨逸に取つて死命を制する處であるから、讓歩が出來ない。それも或は讓歩するかも知れぬが是は餘程爭ふに相違ない。又反對に獨逸の方からアルサス・ローレンを聯合國にやることは、獨逸に取て國の存亡に關する大問題で餘程の事があるにあらざれば、讓られないに相違ない。其で御互にどう讓歩するか、歐

羅巴以外の天地に於て讓られるものが有れば讓るといふことが先きになる。即ち歐羅巴に於ける領土の讓歩に對する代價として或は白耳義のコンゴーを獨逸へやるとか、獨逸は亞弗利加の領地を讓るとかいふやうに、歐羅巴以外の天地に於て成る可く決濟の出來る丈け、決濟しやうとするに相違ないと思ふ。さうなると歐羅巴に於て何等の利權を持つて居ない處の日本、歐羅巴以外の天地に在る我國は、一番容易く犧牲に供せられる。而も日本は戰爭の爲に大した犧牲を拂つて居ないのみならず、經濟上非常な利益を得て居るといふことは敵味方共に知つて居るから、談判の上に於て一番抵抗力が少い當事者と看做されるに相違ない。其時に至つて或は青島と云ひ南洋と云ひ茲に植付けた日本の經濟的利權は餘程强く之を固守しても犧牲に供され易い。況や之を固守する事が弱ければ容易く犧牲に供され得る。其ならば之に對して償金を貰ふ或は聯合國の仲間から金錢的報酬を貰ふことは、財政上此の如く非常な打擊を被つて居る間柄で到底出來ない相談、我國民は兎角鼻元思案で眼の前へブラ下がつて來ぬと何とも言はぬ。やれポーツマス談判の結果が惡いといふ時に燒討をする、其時に到らぬ内は考へもせぬ。直きと又忘れて了ふ、南洋諸島問題の如きも殆ど忘れたかの如き有樣である。併し愈〻講和談判の時に不可いとなつてから地駄太踏んで騷いでも駄目だ。

七

之を要するに我々局外者から見ると巴里の會議に於て出來上つた聯合國際經濟協商といふものは或は英吉利或は佛蘭西或は露西亞に取つてはそれ〴〵實績を擧げて居るかとも思ふけれ共、獨り我國に取つては殆ど其實が無くして偶々我國へ無用なる義務を背負つて歸つて來たものと言はねばならぬ。此意味に於て我輩は阪谷男爵は意味の違ふ小村侯爵であると評したい。ポーツマス談判の時に全力を盡して出來る丈けやつて仕方が無くて歸つて來たけれ共、國民は甚だ喜ばなかつた。今度は別に國民は何とも思つて居ない。併し我々のやうに考へて居る者から言ふと、阪谷男爵は行かなければ宜かつた。行つた爲に通信禁止といふやうな無用な鎖國的主張に盲從されねばならぬやうになつた。

さりとて互に取るべき利權は其秘密事項として何が有るか知れぬが、公然現はれた處では何も取れて居ない。さうして巴里會議の終らぬ内に莫大小禁止、銅の輸入禁止、濠洲羊毛輸出禁止、今度は印度のカウンシルビルの問題等と云ふ風に續々起つて來て居る。必ずしも我輩が考へる程では無いかも知れないが、我々何も利害關係を持つて居ない者から見ると、實に馬鹿々々しくて、若し自分の事なら到底我慢して居られない。自ら賢明なる政治家が居つて、我輩が考へるやうな馬鹿な事にはなつて居らぬと思へば安心されるやうなものゝ、現にカウンシルビルの問題で農商務大臣と大藏大臣とは丸るで違つたことを言つて、どつちを信用して宜いか分らぬ位な出鱈目な有樣になつて居ると云ふ事は、果して我國が賢明なりしか、當局者が我々の見る如く賢明であるか、どうか疑はざるを得ない。民間の實業家などはどう云ふ事を言うて居るか、矢張りどうも御座なりの事ばかり言つて日露協約が成立つてソラ提燈行列だと騒ぐ、却つて之が爲にペトログラードでは惡感情を惹起したとさへ言はれて居る。我々から見ると極めてオッチョコチョイな鼻元思案の事しかやつて居ないやうに考へる。

他方亞米利加に對する關係は、或一派の論者が考へる程とは思はれないけれ共、餘程戒心を加へなければならぬと思ふ。日本が歐洲の戰爭の御蔭で大變な利益を得たといふことは、何れも他國から羨まれる的になつたことであるが、其羨んで居る中で以て一番深き猜疑の眼を以て見て居るものは、恐らく亞米利加であらうと思はれる。其亞米利加と日本とが衝突する如きことは經濟上から言つたら斷然有る可らざることであつて、此意味に於て我々は極端な平和論者である。亞米利加とは餘程な堪へられない事が有る迄は敵對關係に立つべきで無い。出來る丈けの讓歩をしなければならぬのであるが、讓歩しないで日米の感情をモット和らげて行くことを大に努めなければならぬと思ふ、殊に移民問題の解決が未だ懸案となつて居ることを忘れてはならぬ。表面上親善の關係は少しも侵されて居ないやうだが、事實は國民と國民との間に經濟的疏通が進んで居るかといふと我輩は却つて反對になつて居やしないかと考へて居る。聯合國へ深く加擔する事

は妨げなしとしても、亞米利加との關係を拙くする事になつたならば是は非常に損な取引をしたものと言はなければならぬ。日本は經濟上の立場から考へれば他の總てを敵として戰つても獨り亞米利加を敵として戰つてはならぬと云ふ事を深く我國民は覺悟しなければならぬ。獨逸は無論の話其他どの國とても已むを得ざる時には干戈の間に見えても仕方が無いが、獨り米國と敵對狀態に陷る事は日本に取つて經濟上殆ど死を意味するといふ事を戒告したいと思ふのである。

以上我輩の述べた處は無論一片の杞憂に過ぎないと思ふし又さうであることを希望するけれ共、少しでも其嫌ひが有りとするならば、やれ政黨政治の超然內閣のと言つて國內限りの小さい問題にのみ沒頭して居ないで、少しは眼を放つて世界に於ける日本の地位殊に日本の經濟上の地位に付て、識者は考へて呉れて欲しいものと思ふのである。

二　愚に重ぬるに愚

——大正六年三月十五日『國民評論』掲載——

一

英國の道具に使はれて我邦が段々戰敗國のお附合ひをするの愚なるは、公平なる識者の一樣に認むる所であつて、我々如き世外の人間に至るまで憂慮を禁じ能はず折に觸れて論じた所である。然るに近日に至つて此の愚を更に重ぬる愚が演ぜられんとするを聞く實に慨嘆に堪へない次第である。其は他事でない、支那を聯合國に誘ひ入れる代價として其關稅引上げの提議に我國が同意すべしとの一事是れである。

二

英國は自國の都合さへ宜ければ、他の聯合國は勿論中立國の全部をも、飽迄利用せんと決心して居るものと見える。希臘に對する壓迫の如き『小國の保護保全』を金看板とす

る國としては到底許す可からざる曲事であるのに、今やお芋の煮えたも御存じなき體の支那をまで引ずり込まんとし、而も其代價は專ら同盟國たる我日本の懷から立替へて支拂はしめやうとして居る。蟲の善さ加減、傍若無人の振舞實に言語に絶して居る。

支那自らの爲めに考へて、聯合國に加擔することが果して何程の利益ある可きやは容易に決定し得られない問題である。我邦の國是は支那をして出來る丈け自力を以て自國を整理せしめ、獨立國の實を充實せしむるに力を藉す外はない。此支那にして雜魚の魚交り的に聯合國に加入することは果して支那自らの爲めになるか否か、大に疑ふ可きである。支那は左樣な餘計な眞似をする餘裕を有する國ではない。一切の力を盡くして自國の內政の整理に從事す可き狀態に於てある。外國とは何の國に對しても事を構へず、眞に嚴正中立を守つて國際間の紛爭に加入せず、退いて自力の充實を圖ることが支那の急務たることは、我日本は十分に諒解し又た同情して居る可き筈と思ふ。但し支那は獨立國であるから、支那自ら發意して聯合國に加はるとなれば我邦として敢て之を妨ぐ可き權能も義務も有して居らぬことは勿論である。其政治家の爲す儘に任す可きである。寺內內閣が支那內政不干涉を聲言したに對し我々心ある者が衷心から贊服したのは全く此道理を認めるからである。內政干涉の非なるが如く我邦に關係なき支那の外政に干涉することも亦非たる可き譯である。內政には干涉せぬ、外交には干涉すると云ふのでは一向徹底した方針とは云へぬ。

直接間接に我邦の利益に影響を及ぼす可き事に就ては其の內政たると外政たるとを問はず、我邦は友邦として誠實なる忠言を支那に呈することを怠つてはならぬと共に、我邦の利益と交涉なき事は一に全く支那の自治自裁を尊重することを一貫の方針とし、之によつて我邦に毫も野心なく、誠心誠意に支那の誘掖のみを以て我念とすることを支那の官民に十分知悉して貰ふ樣に勉めること、是れ寺內內閣の對支方針と我々は解釋したのである。其れでないならば支那內政不干涉とは例の高遠なる理想家一流の瞞着辭と同一視する外はない。

三

我邦は政治上に於て飽く迄獨立國たる支那の『プレスチッヂ』を尊重して、些かにても之を傷くる嫌あることは一切之を捨つると共に、日支親善は紙上の空言でないことを示す爲めには經濟上に於て愈々益々支那に接近せねばならぬ。支那になきもの我之を供し、我に缺くもの支那之を與ふることを經濟上に於て勉めねばならぬ。我々は此目的の爲めには支那と關稅上の協商を進めて、支那の產物を極めて低き關稅を以て我邦に引取ると共に、我工業品にして支那に缺く所のものに對しては、更に關稅の輕減若くは全廢を實現せねばならぬと思ふものである。極端に云へば滿洲を支那に返へしても日支關稅同盟の實現せられ、更に進んで日支幣制同盟の實現せられ得ることならば、其は我邦の利にして同時に支那の利たる可きを思ふものである。

四

然るに其方針には一歩をも進むこと能はずして、今や却て聯合國加入と云ふ我邦に取つて何等の重要なき事の爲めに、支那關稅の引上げに同意せんとの說ありと聞くは實に〳〵意外千萬である。聯合國加入が支那の爲めに利益ある可きや否や甚だ疑はしきのみならず、我邦に取りては殆んど何等の重要を有せざることは多言を須たざる所である。我邦すら聯合國加入の利益を享くること殆んどなきに、後れ馳せに而も何等の軍事上の意味なき支那の加入は支那自身に何の利益を齎らす可きか。支那の當局者は之を知る、故に別に其代價を求めて關稅引上げ、償金帳消しを要求したので、此點は一も二もなく英國の提灯持を甘受した我邦の賢明なる政治家よりも、支那の政治家の方が國に忠なるものと言はねばならぬ。

然るに英國は自ら其代價を支拂ふことなく我日本をして之を支拂はしめ、我紡績業の大打擊を以て其代價たらしめんとするのである。若しも支那引入れが我邦に利益あることならば、紡績業の犧牲或は已むを得ざるかも知れぬが、我邦は支那の加入に依つて何等得る所はないのである。たとひ多少得る所ありとしても我が紡績業の利益を代價とし

て支拂ふことは、到底勘定にならぬ大損である。世の中に馬鹿々々しいとて此くの如き馬鹿々々しき事があらうか。況んや戰後の講和に方つて、支那の加入は我邦の迷惑となる可きは、今より豫見し得る所たるに於てをや。我々世外の人間と雖も到底之を默視するに忍びぬ。

莫小大の禁輸、羊毛の禁出、銅の禁入、加ふるに印度カウンシルビルの制限と云ふ如く我邦が英國の爲めに支拂ひ、又た現に支拂ひつゝある代價は實に僅少ならざるものである。然るに今や我邦のヴアイタル・インテレストたる紡績業迄も代價として提出せんとするに至つては、勘忍も程度があると絶叫せざるを得ないのである。愚に重ぬる愚とは正に此くの如きを云ふのである。醒めよ、醒めよ、拜英事大の夢。

三　歐洲出兵論を排す

――大正六年十月稿同年十一月一日『日本及日本人』掲載――

一

日本が歐洲に出兵す可きや否やの決定は、日本の問題としてのみ爲す可きである。何故となれば、我軍隊の戰ふ戰ひは世界の何れの邊に於て爲さるゝとも、其は日本の戰ひであらねばならぬからである。如何なる理由で如何なる國と戰ふとも其れが日本軍隊の為する所の戰ひである以上は、日本の爲めに日本が戰ふことであらねばならぬ。外國の爲めにする傭戰であつてはならぬ。日本の爲めにと云ふは、日本の現實的物質利益の爲めにと云ふことでは斷じてない。日本が歐洲に出兵するとも、何等の物質的利益が得られないから不可なりと云ふ論も、若し出兵によりて多大の物質的利益が得られるならば、出兵敢て差支なしと云ふ論も、共に日本の戰ひの眞義を沒却した愚論である、俗論であ

る。國の戰なるものは、講和の際の分配を目當てに爲す可きものでは斷じてない。左樣なる淺薄な考慮は軍隊存在の貴き意義を蹂躙するものである。戰其ものは甚だ悲しむ可きことであるけれども、國の存在てふ重大事の爲めには悲しむ可き事は變じて甚だ善き事となるものである。惡を化して善とし、悲しむ可きを化して喜ぶべき事とする、其一切の最高の標準は、國の爲め、國の存在の爲めと云ふ一事である。此を取除くときは、戰爭は飽迄悲しむ可き事、避く可きことたるを免れないのである。されば、今日本が歐洲に出兵して獨墺軍と戰ふのは、其は日本の爲めの日本の戰であるときのみに限る可きである。英國の爲めでも、露國の爲めでも、米國の爲めでもない。否左樣あつてはならぬ。

元より我邦は聯合國の一員としての重大なる義務を負ふて居る、而して我邦は力の及ぶ限り國情の許す限り此義務を盡しつゝあることは、聯合與國の十分認めて居る所と信ずる。乍併日本が歐洲に出兵して獨墺と戰ふと云ふことは、軍需品の供給とか、證券の引受とか云ふことゝは、丸で別の事で、如何に與國たるの義務あるからとて、戰丈けは外國の戰を引受ける譯にはいかぬ。日本の軍隊は日本の戰をする爲めに設けてあるもので、其れ以外の事には、一兵を動かす事も爲す可きではない。之が雇兵で一週間イクラやるから兵士になれとて募つたものなら、苦力同樣何處の國の戰をやらせても善いかも知れぬが、我兵士は雇はれたものではない、我等の血管を流るゝ貴き膏血は國民の義務として流すを要するときにのみ流す可きものである。苦力同樣に使はれる爲めに、我等は我等の子弟を喜んで國家に捧げて居るものではない。外國では、日本兵の强いことを知つてゐるから、今歐洲に出兵して呉れたら、日露役當時又は其以上の働きをするものと思ふかも知れぬが、日清、日露役に我兵の强かつたのは、其は日本の爲めに日本の兵士として戰つたからである。國の爲めと云ふ一念は、懦夫をも化して勇士としたのである。其反對に國の爲めでない、人の爲めに戰ふときは、勇士も化して怯夫となるであらう。英國の兵士の如く塹壕の中に居乍ら白粉を塗つたり、舞踏をやつたりしつゝ戰

ふことは、日本兵の最も不得手とする所である。生命に大事ない樣にと庇ひつゝ戰をすることに於ては、世界中日本兵ほど不適當な兵はないと斷言して差支ないと思ふ。日本兵は妄りには戰はない、其代り戰ふときは命はないものと覺悟してかゝる。だから强いのである。命の無いものと覺悟することの出來るのは、國の爲めに戰ふと云ふ安心、滿足、自信があるからである。其條件を缺いて居乍ら、其の如き覺悟をせよと要求しても、駄目である。歐洲に出征しても同樣である。出征が日本の爲めであつて、其戰が日本の戰爭であるならば、我兵はあらゆる艱苦に堪へて健鬪奮戰するだらうが、國の爲めでなければ、風土、氣候、食物の異る歐洲に於ては其困難の爲めに非常な苦みを感ずるに相違ない。而して之を堪へ忍ばしむべき國の爲めてふ自覺が缺けて居ては、强い日本兵も或は案外な成績しかあげず、却つて世界の迷惑を釀すかも知れぬ。否成績は之をあげ得ても、日本の勝利でなければ少しも之を譽とするに足らぬ。勳章や賜金は決して十分に酬いをなす所以でない。將校達には十分に酬があるとしても、兵士には其れは出來ぬ。日本の兵士は勳章なく賜金なくとも、我は國の爲めに戰へり、我は國の爲めに負傷したり、我は國の爲めに死したりとの自覺を以て最大の報酬と考へるのである。人の爲めにする戰爭では此の報酬は全くない。

二

然らば、我邦の出兵は我邦の爲めに必要であり、歐洲の野に戰ふ戰は、凡ての意味に於て日本の戰たる可きや否や、此の解答は即ち出兵の可否を決する唯一の鎖鑰であると信ずる。

論者或は曰く、此度の戰爭は聯合國側にあつては、實に遠大高尙な理想から起つたものである。我邦が此理想の實現の爲めに歐洲に出兵することは、即ち我日本の爲めに戰ふ所以である。日本國の高き使命が之を必要とする戰爭であると。試みに問はん、其の遠大高尙なる理想とは何であるか、聯合國が獨墺を打破するのは、世界をより善く、世界をして人間の住むにより善き所たらしめる所以であるか、或はウヰルソン大統領の宣

言にあるやうに、獨逸の國民をして獨逸の主權者から脫離せしむることが、遠大至高の理想を實現する所以であるか。予輩は斷じて否と答へる。獨墺を亡ぼしたとて、軍國主義、オートクラシー、專制政治が世界の表から消滅するものではない。更に第二の獨逸が起る外はない。否現に今世界中最大のオートクラットはカイゼルではなく、却つてロイド・ヂョーヂである、ウキルソンである。民主々義の假面を被つて居る軍國主義は英米に於て全勝を占めて居る。今の戰局は一面に於て、軍國主義と軍國主義の衝突である。獨逸の陸軍國主義に對する英國の海軍國主義、更に近頃は其れに加へて更により惡き米國の Plutocratic militarism の爭ひである。加之獨逸國民をして其皇室に叛逆せしめんとするは、我々日本人として毫も與す可き所以を見ない、否我日本に之を應用されると きは、國をあげて反對せねばならぬ所以である。他國の政體變更を目的とする戰爭は、如何なる意味に於ても、日本の戰爭たることを許さぬ、日本の一兵をも其に藉すことを許さぬ。我邦が聯合國に加はつたのは、右等の爲めではない。無論專制政治、オートクラシーは獨逸に行はれて居て其が我邦に害を及ぼすときは、之と戰はねばならぬ。此意味に於ては、日本もオートクラシー征伐の戰爭に加入して出來る丈けの力を致して居ると云つても少しも差支はない。併し此れは人々の解釋であつて、我邦が獨逸に宣戰した目的として誰人も皆認めて居る所とは云へぬ。少くとも我邦の當局者は寸毫も左樣なことは言明して居らぬ。又其れ丈けの目的なれば、我邦は既に與國に對して爲す可き助力を十分にやつて居る。其れ丈けで澤山である。出兵と云ふ重大事を要する事ではない。況んやウキルソンの宣言の如きをや、日本人は左樣なる他國々體の變更を少しも希望しては居らぬのである。オートクラシーは惡む可きである。乍併ニコラスに代ふるにケレンスキーなる新しきオートクラットを以てすることは遠大至高なる理想を實現する所以では斷じて無い。

然らば獨逸が此儘にして存在する時は日本の存在は脅され、其利益は害せるゝか。斷じて左樣なことは無い。却つて日本の利益を害することを最も多く行つたのは、右の

如く立派な事を宣言しつゝある米國ではないか。鐵の禁輸と石井特使への御馳走とを交換したものは、實に米國ではないか。獨逸は今日まで、此に類する迷惑を日本にかけた事は一もない。三國干渉は三國干渉である。獨逸のみの干渉ではない。近き將來に於て獨逸のみが日本を脅し聯合國は必ず日本の利益のみを圖るなどゝ云ふことは到底あり得ない。獨逸が此以上打敗かされぬか、又は獨逸が勝つのは、其れは聯合國の一員として迷惑とは感ずるが、日本の存在を危うするが如き憂は斷じて無い。日本の戰をやらなければならぬほどの切迫した事情は一もない。否萬一日本が英米其他の與國の爲めに强請せられて、心にもなき出兵を斷行するが如きあらば、其れこそ國を危殆に導く所以である。左樣なる强要を爲す國ありとせば其國こそ眞に日本の敵である。獨逸の如きは、之に比すれば遙かに小なる敵である。

歐洲出兵に就て他の點は暫く置き、其が決して日本の爲めの日本の戰爭たり得ぬことは、誰人も皆認める所と信ずる。與國と雖も此點は之を拒むことは出來まい。然らば、出兵の擧は、日本の軍隊をして日本の爲めならざる外國の戰爭に從はしむる所以である。此れは日本の國體の到底許さぬ所である。況んや獨逸國民をして其主權者に叛逆せしめんとするが如きは、斷乎として我等日本人の一人の取除なく反對すべき所である。萬一我當局者にして他國の强要に屈して此くの如く我國體と相容れぬ出兵を斷行するが如きことあらば、其れこそ國を誤る所の一大曲事として、我々は何事を措いても極力此に反對せねばならぬ。

此く云ふは、決して歐洲戰爭を他人の事視するからではない。日本あるを知つて世界を顧みぬからではない。況んや區々たる物質的利益の打算からではない。軍隊の存立の根本義から立論する所以である。外の與國は他國の戰を辭せぬとするも、我が日本の軍隊は日本の爲めに已むを得ずしてする日本の戰爭の外は、決して戰爭に從ふ可きものでないからである。

四　ウヰルソンの教書と日本の國是

――大正六年十二月談話同七年一月『大日本』掲載――

一　米統領の宣言と日本

北亞米利加合衆國大統領ウヰルソン氏は、最近第六十五回國會の開會に當り、長文の教書を議會に送つた。その全文は我が國の新聞紙にも譯載されて居るが、該教書の趣旨は、要するに曩日米國參戰の際發せられた教書及び羅馬法王の講和提議に對する答書等に於て論ぜられた所と同樣で、米國の參戰は全く正義人道の高尚なる理想に立脚してゐる、即ち米國の參戰は、神の正義仁澤の崇高なる峰に登る所以なることを反覆力說したのに外ならない。

我が國識者の中には、ウ氏のこれ等の宣言文字に對し、衷心よりの敬服を捧げてゐるものが少くないようで、現に姉崎博士の如きは、ウ氏の參戰宣言を以て『人類獨立の宣言』であると激賞し、この宣言に含まれたる思想は戰後の世界を指導すべき一大福音なるが故に、我が日本國民はこの宣言について去就を決し、ウ氏の宣言を以て我が精神國是としなければ、國の存在する意義は無であるとまで極論して居られる。吾輩は、斯る意見に對して斷然反對せざるを得ないものである。

假りにウ氏の三回に亘る教書宣言が、徹頭徹尾、非難すべからざる立派なものとするも、そは要するに米國の大統領が米國民に向つて發した教書に外ならずして、我が日本國民はそれに由つて教へられ、又は指導せられねばならぬ何等の義務を有しない。否獨立の國民として、外國の大統領に教へられて、始めてその適從する所を見出すが如きは、不面目の極である。日本は何ぞウ氏の宣言に對して去就を決するの要あらん。我國は對獨宣戰の當時に於て、既に確乎たる主義の上に立つて居た。よし小細の點では多少の異論があるにもせよ、大體に於て、我が國是が奈邊にあるかについては、國民が一致して認むる所あるべき筈で、何も今更外國人の宣言を讀んで遽かに發奮するの恥辱を味ふ必

要あらんや。況んや吾輩を以て言はしむれば、ウ氏の教書答書の中に述べてある所は必ずしも、終始一貫して正義人道のみの上に立つた宣言とは言はれないので、この宣言について去就を決せねばならない必要などは毛頭ない。

二　此の言論壓迫を見よ

試みに最近の教書につき一二の箇條を批評せんか、先づ第一にウ氏は『米國民は現戰爭が何の動機より起れるか、又如何なる結果を收むれば我國の目的を貫徹したりと言ふべきかを熟知することは、予之を疑はず。國民として吾輩は精神に於て將た意圖に於て一致せり』といつてゐるが、又次の如くにも曰つて居る『予は國民の或者が此處彼處に力ある不忠實なる行動に依りて、我國民の確固不拔なる勢力に反抗するあるを見る』或は『吾人が平和を贏ち得べき方法を解せざるものにして傲然冷眼に平和を喋々するあるを聞く、然れども予は彼等の言は一として國民の聲にあらざるを知る』と。

即ちウ氏は一方に於ては、此度の戰について國論悉く一致せりと言ひながら、他方にこれに反對するものあることをも認めてゐる。若し米國が專制政治の國ならば、何が眞に國民の意思なるか分明でない場合、賢明なる爲政者が國民に代つてその主義とする所を定めるのは寧ろ當然であるが、米國は自ら民主々義のチャムピョンを以て任じ、殊に言論の自由を最も尊重してゐる國である。斯る國柄の國家に於て、若し有力なる參戰反對論者がありとすれば、米國の參戰を以て精神及意圖に於て擧國一致せりとは云ひ難い。而してウ氏はその教書に於て異論を唱ふるものは『一も問題の根本に觸れず』といひて反對論者はいかにもつまらない者の如くいひ、又『暫く其横行濶歩徐々自滅を取るに放任し、全然意に介せずして可なり』と云つて、異論者に對し別に壓迫的手段を用ひないと宣してゐるが、實際はこの二つとも著るしく事實に遠ざかつてゐる。

米國に於ける參戰反對論者は決してしかく無價値なものではない、又非愛國的動機から反對するのでもない、眞面目に人類及米國の爲めに考へ、衷心よりの確信を以て異論を唱へ、その勢力も亦必ずしもしかく微弱ではない。從つて米國は之等反對論者の横行

濶歩を放任せず、着々彼等に壓迫を加へて居るのは事實である。左に最近起つた一二の事實を述べよう。

言論の自由を以て根本の精神として居る米國、殊に學問の自由研究を生命として居る米國の大學に於て、近來奇怪なる事件が持ち上つた。それは紐育コロムビア大學總長ニコラス・バットラー氏が、何等審問を經ることなくして教授キャテル及助教授ダナ（有名なる詩人ロングフエローの孫）兩氏を突然馘つた事件である。兩氏馘首の理由として非公式に傳へられたる所によれば、兩氏が自己の平和論を主張するに當り、その意見をコロムビア大學の校名の刷り込まれた用紙に書いて、これを或る國會議員に送つたことが非行と認められたといふにあるが、兩氏罷免の眞因は決して用紙の問題にあらず、兩氏の主張する平和論を不可なりとして、大學總長が教授の言論に壓迫を加へたものなることは、兩氏の同僚たるチャーレス・ベーアド氏（政治科教授）が本年十月八日附を以て、同總長に宛て、言論の自由壓迫に對し異議を申立てたる長文の辭表を呈出し、斷然其の教職を拋つたのに徴しても明かである。ベーアド教授は熱心なる參戰論者にして、其の主張の上よりいへば、極力罷免兩氏に反對であるが、問題は其處になくして、言論の自由、殊に研究の自由を以て生命とする大學教授の言論を壓迫したのを憤慨し敢て此の擧に出でたのである。今米紙に載せられたベ氏辭表の大意を次に譯出する。氏曰く

『數年間當大學内に於ける内部の生活を愼重に觀察したる結果、當大學は教育界に於て何等の地位を有せず、政治上に於ては復舊的にして無見識、宗教上に於ては狹隘固陋にして、中世的なる少數の理事の支配の下に立つものなりとの結論を下すの止むべからざるを見る。彼等の行動たる我が一分科が昨春決議したる文中の言葉を借りていへば、學問の進歩の上に於て大學の有する眞正なる職分について、深き謬想に陷れるものなることを曝露するものなり。この信念が如何に深く且つ廣く當大學の教授の間に存するかは、少しく事情を知れるものゝ直ちに首肯する所なり。然れども若し尋常の時なりせば、當大學の理事會に於ける幹部が、其教職員を陷れたる地位の如きは、

これを看過することを得べしとするも、今や決して尋常の時にあらず、吾人は一大戰爭の中にあり、吾人は米國が有するあらゆる解放せられたる思想を痛切に要すべき時期に立つものなり。

總長閣下が熟知せらるゝ如く、予は開戰の始めより、獨逸帝國が勝利を得ることあらば、そは吾人總てを驅つて軍國主義的野蠻の暗夜に投ずるものなりと確信しつゝあり。予は我が米國が獨逸に向つて戰を宣すべきことを主張したる急先鋒の一人なりき。而して一度開戰したる今日に於ては正義の解決に達するまで、吾人の力の一切を捧げざるべからずと信ずるものなり。然りと雖も我同胞中この見解に同ぜざるもの數千を以て數ふべし、而して彼等の說は呪詛又は暴力を以て變更する能はず、吾人は只彼等の理性と了解とに訴へて議論を交換することによりその贊同を得んことを最善の希望とすべきのみ。而して斯の如き議論は誰人も其公平なることを疑はず、その獨立に對して何等の疑念なく、その人が或階級若くは團體を本位とするものならずして、眞に全國の利益を以て念とするものなること明白なる人に依て唱へられざる可らず。

然るに予をして上に云ふ如き當大學の理事者の手より俸給を受くる間は、獨逸帝國に對する我米國の正義戰を維持するに於て米國の輿論を喚起し、又は戰後に於ける改造の時期に於て獨立の地位をとる爲めに予の微力を國に捧ぐることは到底不可能なりと確信せざるを得ず。この理由により予は一九一七年十月九日火曜日の朝を限り、當大學政治學教授の職を辭す。

予は今數年間の關係を斷絕するに當り如何なる感想を抱くかを筆紙に盡し能はざるを遺憾とす、殊に予が深く悲む所は、予の同僚と袖を分つことは是れなり。予は諸君の學殖と世界に普ねき令名とを思ひ、これと比較するに、今我が當大學を支配し、殊に若き教職員を恐怖せしめつゝある少數の暗黑にして我意强き理事者を以てする時は、予は我が米國が世界の何國にも勝りて大學教授の地位を下し、手先き勞働者の地位よりも低きものたらしめたることに對して驚異の念を禁ずる能はず。手先き勞働者は少

くとも同業組合の手段によりて、其雇用の條件につき多少の容喙權を有せり。然るに米國に於ける大學教授は誠に只一日の地位を保つに過ぎず、其罷免せらるゝや何等の査問を受くることなく、彼れの同僚の判斷によることなく、突如として其職を奪はるるものなり。

予は確信す、我國民にして我が諸大學に於ける眞狀を知るに至らば、我國民は大學の精神生活に關して專制權を有する理事會の特權を剝奪すべき法律を制定せざるべからずとなすに至らんことを、(以下畧)』と。

然るに最近の報道によればこの事件後間もなき十一月二日、イリノイス大學の教授八名が又々言論の爲めに懲罰せられたといふことである、其詳報は知るを得ないが、自由を誇る米國に於て言論の壓迫斯くも頻々と行はれつゝあることは、大統領の教書に現はれたる所と何等の矛盾なしと言ひ得るか。

三　大軍國化しつゝある米國

吾輩は米國の現狀を觀て、米國は今や急激なる勢を以て、その標榜する自由民主の主義を棄て、金權政治の最惡所を遺憾なく發揮し、更に是れに加ふるに大規模なる軍國主義に走りつゝあるものと認めざるを得ない。二百萬の出兵計畫といひ百十億弗の戰費要求といひ、事實は明かに米國の大々的軍國化を語るものではないか。

開戰後三年間の各國戰費支出總額は九百七十四億五千萬弗に達するとのことにて、今や米國が參戰したる爲め一箇年に五百八十一億五千萬弗の戰費を要し、開戰四年の末には實に一千五百五十六億弗即約三千三百億圓といふ驚くべき巨額に達する計算なりといふが、米國の參戰は人類全體にとつての失費を夥しく增加するものである。斯る參戰に對し米國の學者が反對意見を有するは必ずしも非愛國的と斷ずることは可能ならず。

然るに獨逸に對してその專制政治、そのオートクラシーを極力非難しつゝあるウ氏は、自國に於てしかも自由研究を以てその存立の根本條件とする大學に於て上述の如き言論壓迫が行はれつゝあることを御存じないのか。否、パットラー總長が、その處分を斷行

したのはウキルソンの主義に同ずる所以なりと公言しつゝあるではないか。即ちウキルソン氏と總長の間には、兩教授馘首については充分の諒解ありしことは種々の事情より容易に歸納し得られるのである。

斯る智識階級、殊に米國大學中に在りても第一流たるコロムビア大學教授の意見は單にこれを以て『傲然冷眼に平和を喋々するものにして一として國民の聲にあらず』と斷じ去り得るか。政治學擔任のベーアド教授が、米國大學教授の地位は勞働者の地位よりも尙低しと云つたことは全然意に介せずして可なるものなりや否や。斷乎として戰勝の目的を貫徹するは結構なりとしても、戰勝の目的のために、あらゆる壓迫を加へることは、ウ氏が極力排擊する獨逸式政治なりといはねばならぬ。見よ、ウ氏は教書の中に『國民は我輩の意圖が即ち國民の意圖なるかを問ふの權利を有す』と言明して居るではないか、しかも吾輩はその言ふ所と行ふところには大なる矛盾あるを否定し能はずと信ずる。

四　他國民に反逆を强ふる教書

第二にウ氏は、一面墺國について『吾人は如何なる場合にもこれを破壞し或はその組織を改めんことを希望するものにあらず』といひ、又『吾人は獨逸に對しその內政に干涉する意思を有せず』と云つてゐながら、他面『專制主義者に對し吾人の執るべき最初の手段は、彼等が現代の世界に於て、一國一社會を率ゐるの資格なきを明かならしむるに在り、獨逸今日の治者の如き輩が地球上より排除されざる限り、人類生活に正義的規準を適用するは全く不可能の事と稱せざる可らず』といひ、又『獨逸國民にして戰後も尙現在の治者を頂かざるべからずとせんか、獨逸國民は今後世界平和の保障として成立せしめざる可らざる國際團體中に伍する能はざるに至るべし』といひ、『獨逸人民が適法の委任を受けたる代表者を通じて、其治者が犯したる罪惡の保障と正義の上に基礎を置く講和云々』と云つて、獨逸國民が現在の治者に背叛しその廢立をはからなければ、これと講和することなかるべき意味を明言して居る。これ吾輩の甚だ了解に苦しむ所である。

成程、所謂正義人道主義の眼から見れば、獨逸現在の治者に責むべき所あるは勿論で

ある。然し少くとも他日はイザ知らず現在に於て獨逸國民は其の治者に背き、これを廢そうとは少しも思つて居ない。然るにウ氏は獨逸國民に向つて、彼等の希はざることを强要し、是を實行せざれば講和せず、又國際團體中に加へざるべしと威嚇してゐる。斯の如きは啻に他國の内政に對する大々的干渉たるのみならず、其國家を破壞し、其組織を改めんとするものである。觀方によれば、墺匈國に關して特にその國家を破壞し、又はその組織を改むることを希望せずといつてゐるのは、獨逸帝國に對してはこれを希望するといふ意味にもとれる。これ果して公正神聖なる動機に出づると云ひ得るか。吾輩は斷じてその然らざるを主張せざるを得ない。少くとも、他國の國民を强制して其の君主に逆かしめんとするが如きは、日本の國民性がこれを許さない。

苟くも戰ふ以上、その敵を絶滅することを目的とするのは寧ろ當然であるが、獨逸の人民を强いて其治者に對する謀叛者たらしめんとするが如きは全く別箇の人道問題である。獨逸は白耳義を亡した、又塞國を倒した、然し乍ら獨逸は未だその人民をして彼等の治者に反逆せしむるほどの罪惡は犯してゐない。

斯くの如くウ氏の教書には、これを米國々民として考ふるも尚幾多の首肯し難き點と、批評の餘地がある、然るに我々外國人たる日本人が、斯る教書を仰いで人類獨立の宣言と見做し、隨喜渴仰して立國の指針とせねばならぬなどとは迷惑千萬である。我國開戰の理由は炳乎として宣戰の詔勅中に瞭かであつて、今に於てこれを改訂しなければならぬ必要は寸毫も存在しない、

五　果して高尚なる主義戰乎

ウキルソン大統領は又「吾人は現戰爭は吾人に取ては高尚なる主義の戰にして、征服掠奪等の私念に基けるものに非ざるを熟知す」といひ、又「吾輩が曩に世界の國民は啻に公海自由航路を無拘束に航行するの權利ありと謂る時、吾輩は單に吾人の認容と援助とを要する小弱國のみに就て考慮せるに非ずして、優秀なる列强並に吾人現在の敵國、吾人現在の聯合國に就ても同じく考慮したるものなるが、吾輩は今も此態度を改めず」

と云つて居るが、これ果して米國乃至その聯合國が着々實行しつゝある所であらうか。

全體の戰局を決定する上に何等の關係なき阿弗利加に於いて、英國がその領土を貪慾に擴張しつゝあるのは、高尚なる主義の戰といへるであらうか。希臘を壓迫しその國王を放逐してまでこれを參戰せしめたのは小弱國の自由維持と名くることを得るか。而して公海自由航行といふことは、聯合國の巨頭たる英國が從來實行し來りたる所なるや否や。殊に我國に對し鐵を始め金其他の禁輸を斷行し、我國が最善の誠意を披瀝してその一部解禁を求めたるに對し、代償として百萬噸の船腹を要求したのは、果して神の正義仁澤の崇高なる峰に登る所以なるか、高尚なる主義の戰たる實を現はしたる仕方なるか、人類生活に正義的規準を適用する所以なるか。是等はすべて獨逸の罪惡的行爲を責むること急なる手前に對し、毫も恥づることなき公正神聖なる態度及主張なるか、吾輩は不幸にして姉崎博士と共に隨喜の涙をウ氏の教書に濺ぎかける勇氣を持たない。

姉崎博士が歐洲に於ける正義人道の一開祖なりといはれたグローシアスが終生熱心に主張した公海の自由は、何處の國によりて最も多く實際上無視せられて來たか、それは英國だつたのではないか。諸國民の自由及國際間にも尙個人道德の標準を採用せんといふウ氏の主張と、彼の日本學童問題や又近くは在米日本兒童の爲めに、わざ〳〵渡航した日本小學教師を勞働者と見做して、その入國を拒絕したるが如きことは、果して何の對照をなすか。

吾輩は加州に於ける日本勞働者排斥に就いては、豫てより米國の主張にも充分の道理あることを承認しつゝあるもので、この點については曾つて社會政策學會に於て卑見を陳述した時に「君は米探ではないか」といふ冗談の批評をうけたこともあるほどで、決して日米關係に於て遮二無二、日本の主張を何時でも正しいと斷ずるものではないが、この學童問題、小學教師排斥問題、殊に鐵禁輸の如き問題に至つては、日本がその當事者にあらずして、或他國がその當事者なりとするも、米國の爲す所は斷じて非なりと主張せざるを得ない。

六　現實の上に立て

然り而して、米國の參戰の事は米國の勝手に決める所で深く論ずる必要はないが、その大袈裟な軍備擴張や、金融動員、食料調節、其他あらゆる戰爭關係の施設は、單に獨逸と戰ふ目的及必要から來たものであらうか否かは大に疑問とせねばならぬ。現に米國が參戰以來、軍事上に於て聯合軍に寄與したところと、その大規模の參戰準備とを對照して、これを經濟上から考へて見るに甚だ奇異の感を惹き起さざるを得ないものが多々ある。否、却つて米國は參戰を口實機會として、豫てより企て居たる大軍國化を斷行するものではないか。平時に於ては到底米國の輿論の許さないことが、獨逸に對する反抗心、敵愾心を極度まで緊張せしむることによりて可能となつたのである。而も一度鞘を脱した刃は容易に元に納まるものではない、たとひ今日の米國には正義人道以外何等特別なる意圖なしと善解しても、一度大擴張せられた軍備は他日事ある時には用を爲すべき兇器となる。

吾輩は戰爭により獲得したるウ氏の絶大なるオートクラット的權力は着々として、米國を軍國主義の深味に導かずしては止むまいと思ふ。況んや現に對獨の必要に數倍する大軍備を準備しつゝあるは、その間何等特別の意圖なしと解することは甚だ困難なことである。若し獨の暴行を杜絶し現戰局を公正神聖に解決することが必要なりとするならば、米國は何故我が日本と同時に獨逸に對して宣戰しなかつたか。若し米國にして日本と同時に宣戰したらんには、少くとも海上に於ける幾多の悲慘事は著しくこれを輕減し得たるべき筈である。又獨逸に對する物資の供給を杜絶することが、戰勝の目的を貫徹するに必要なりとするならば、何故に米國は間接に巨多の物資が自國より獨逸に輸入せらるゝことを防がなかつたのであるか。米國にして日本と同時に參戰したらんには、此重大なる任務を單り英國にのみ負擔せしめずして濟んだに相違ない、然るに開戰後三年間も傍觀者としての利益を享樂し、今となりて遽に公正神聖神の正義仁澤を列擧した大獅子吼をなすのは、適時といへようか、若し人類獨立の宣言が必要なりとするならば其時期

は日本が參戰した時であつて、三年後の今日では斷じてない。

以上述べたやうな次第であるから、我々はウヰル・ソン大統領の教書の中にある立派な言葉に感服するは自由であるが、直ちに是れを以て我國是を定むる金科玉條なりとして奉ずべしなどゝ考ふるは大間違ひで、其は空想を以て現實に代へんとするものである。吾人は今の時に於ては空想に耽る自由を有さない。戰後の世界はどうするにしても、先づその前提としては、世界各國がどうなつて居るかの現實、戰後各國の狀態がどうなるかの現實を充分熟考しなければならぬ。然らざればそれこそ却て國を危きに導く所以である。

同盟國として露西亞を賴みにしてゐた佛蘭西が、戰爭以來嘗めた苦い經驗は、佛國民の聯合國中にありて殆んど類例なきけなげなる奮鬪、殉國的努力を以てしても、尙痛切な苦難を國民に與へつゝあるではないか。若し佛蘭西の政治家にして賴むべからざる露西亞を賴むことなく、現實の上に立脚して國家の運命を指導して居たならば、彼れの如き健氣なる國民を以つてすれば、今日の如く悲慘な境遇を現出するを免かれ得たであらう。我日本國民はその健氣さに於て、その殉國的精神に於て佛蘭西に優るとも劣るものでないことは吾輩の確信して疑はない所であるが、斯る健氣な國民を指導する人々が現實を無視して、賴むべからざるを賴み、單に言葉の上の正義人道に隨喜の涙を流して居るならば、國步は甚だしき難境に進み行くを免れ得ない。これ吾輩が米國と其文明とに對し常に深厚なる敬意を有するにも拘らず、以上の如き苦言を敢てする所以である。

五　何の爲めに戰ふ

――大正七年二月談話同三月『太陽』掲載――

一

近來英米に於て戰爭の目的に關し、ロイド・ヂョーヂやウヰルソンが屢々聲明をして

居る、（參照　War speeches by British ministers 1914—1916. London 1917— W. Wilson Why we fight the Germans. 1917）是に關聯して我國に於ても尾崎行雄氏は近く帝國議會に於て戰爭の目的に關する政府の所見を質問したる等、識者の此問題に注意するもの多いやうであるが、我輩の信ずる所では、我國としては此の問題は戰爭の始めより既に定まつて居る所であつて、開戰後四年の今日に至つて事新しく戰爭の目的に關して論議する必要は寸毫もないと思ふ。是れを道理の上より言へば、英米に於て今日戰爭の目的に就いて屢々聲明し、論議を闘はすと云ふことは、實に不思議と謂はねばならぬ。何故なれば國を擧げて人命を損し、財産を拋つて戰爭に從事するに當つては、初めから確固たる目的が存在しなければならぬ筈である。然るに戰爭の最中に至つて、其の目的に就いて議論を闘はすとか、其の聲明の始終變更さるゝとか言ふに至りては、是れ畢竟戰はんが爲めに戰ふものであつて、その目的なるものは單に後から附け加へた理窟に外ならぬことを證明するものではないか。恰かも一生懸命に走りつゝある人が傍人に向つて一體我輩が馳せて行く所は何處であるかと尋ねたと云ふ落語にでもありさうな滑稽事である。

二

目下歐米に於ける戰爭に關する聲明の中心問題は、無賠償無併合と云ふことであるが、是れは聯合國にとりては、其戰敗の場合には、必ず主張す可き事項となるであらうが、其勝利を得る場合には、必ず誤魔化し去ることゝ思ふ。換言すれば、英米が常に口にして居る正義人道と、戰爭の目的とは一致して居らぬ。苟も正義人道を口にする以上は、無併合無賠償を有力に主張するものあれば、當然是れを承認しなければならぬ筈で、斯くて渠等は自縄自縛に陷いつた形である。而して他方に於てアルサス・ローレンは佛蘭西に奪ひ取らなければならぬ。是れは決して無賠償無併合の原則に反くものでないと言つて居るけれども、是れはコジツケの議論である。若しアルサス・ローレンは一八七〇年までは佛國に屬して居つたのであるから、今日是れを奪ひ返へすも、夫れは併合でな

いと言ふならば、其の以後に起つた併合に對し、例へば米國が併合した比律賓を若し西班牙が返へして呉れと言つたならば、米國は何と答へるか。又米國は獨立王國であつた布哇を併合したが、布哇が獨立王國の舊狀態に引返へして呉れと言ふならば、何うするか。比律賓も布哇もアルサス・ローレンよりは新らしく併合された領土ではないか。ウキルソンは獨墺の領地の臣民に主權を取捨す可き自主權を與へよと云ふが、米國は布哇や比律賓の人民が主權者を取り替へたいと申出でたら、其の自主權なるものを果して承認するであらうか否か。更に同一の論法を廣く當て嵌めると、關係國は尙ほ多くの吐き出さねばならぬ領土を持つて居るではないか。此の筆法を極端に押し弘めて行くと、日本の臺灣朝鮮の如きも、同樣の範圍内に算へらるゝであらうと思ふ。苟も無併合無賠償を原則とするからには、誠心誠意併合や賠償を排し、今度の戰爭の結果として何物をも受けないと云ふことにしなければならぬ。然るに或る國の或る併合に對しては除外例を認むると云ふことでは、其の無併合無賠償主義も何か爲めにする口實に過ぎないと謂はねばならぬ。而して我國としては此の無併合無賠償問題に對しては、極めて簡單な解決を下し得ると思ふ。

三

元來我國は世界の正義人道とか、獨逸を全滅するとか、其の軍國主義的政府を倒すとか、普魯西の政體を變更するとか云ふことの爲めに、對獨宣戰をなしたのでは斷じてない。併しながら國際間に現はるゝ善美なる問題に對し、日本は日本の立場よりして一致し得ることには飽までも一致して行く。是れは今度の戰爭に限つたことではなく、文明國存在の根本義である。乍併此の根本義と戰爭に從事した目的とは同一ではない。彼の平和の爲めに戰爭すると云ふことは甚だしき矛盾であると謂はなければならぬ。是れを個人の間に就いて言ふも、相互間の親密を增進し、意思の疏通を計るが爲めに、先づ人を毆打すると云ふことのある可き道理は決してない。國際間に於ても干戈を以て立つと云ふことは、既に平和の破壞であつて、正義人道とは全く矛盾した行動である。夫れ

故如何なる口實の下に於ても戰爭たる以上は正義人道の上から見ると、變則であると謂はねばならぬ。米國大統領ウヰルソンの宣言の如きは、政治家の言論としては立派であるけれども、是れを正義人道の上より見れば、大なる瞞着の辭と謂はなければならぬ。

四

若し夫れ其の高唱する所の正義人道の內容を見ると、毫も一定せずして教書の內容は時々大に伸縮して居る。而して米國が戰爭に加はつた爲めに止むを得ずして取る所の手段、及び止むを得ざるにあらざるにも不拘取る所の手段（其は甚だ多い）。直接戰鬪行爲にあらざる通商貿易に關して取る所の手段は、實に參戰以來米國が歩一歩正義人道に反しつゝあることを立證するものである。

一月十九日發で本日接手した米國の某友人からの手紙に左の一節があつた。

「米國政府の思切りたる軍國政策は御承知の如く愈々出でて愈々驚歎の外なく、一昨日（一月十七日）發布の「ショット・ダウン・オーダー」Shot down order の如きは何人も豫想だもせざりし處にして、今日まで如何なる專制的命令にも反對の聲を擧げざりし新聞紙すらも始めて不平を訴ふるに至り申候。紐育タイムスの記事によれば、十五日間の工場閉鎖によりて「ミ」河以東二十八州に於て其間失職す可き職工の數無慮五百六十萬人、此勞銀一億六千萬弗、製品の減額七億六千弗に及ぶ可しとのことに御座候。議會、商業會議所等にても反對の氣勢見受られ候へ共幾分の除外を認める位の處にて結局泣き寢入と相成る可くと推測せられ候。紐育邊の新聞紙は右はマカドウー氏の仕業にて同氏が鐵道總監となりたる以來貨物運送の遣繰全くつかず、さりとて自分の名義にて右の如き法律を發布するときは、次回大統領選擧に影響す可きを恐れ（同氏は財政策の成功以來次期大統領たらんとの野心を起したりとは屢々聞く所に有之候）ガーフヰールド氏をして此擧に出でしめたるなりなど揣摩致居候。今日軍事關係者間には軍事的には聯合側にも敵側にも決勝の見込なきと明瞭なるに、米國が斯くも銳意努力戰爭準備に盡す其の眞意は、我々には何故か頓と了解致兼ねる所に御

座候。兎に角向後米國の國勢一變の兆正さに瞭然たりと可申と存候』(下略)

殊に我日本は、其れが爲めに甚だ迷惑を被つて居る。將來又た或は愈々然る可しと思ふ。是れは恰かも惡人を懲しめる爲めに鞭打つと稱して拳を上げた人が、後足で他の傍觀人を蹴倒すと同じやうなことで、日本は何等の咎なくして喧嘩の側杖を大に喰ひつゝある次第である。

五

縱令今回の戰爭に於て、獨逸を滅ぼすことが出來たにしても、戰爭は決して世界の表面から跡を絕つものではない。然るにウキルソンの聲明する所によると、米國が大に動員して戰爭に參加した所以のものは、向後世界の表より戰爭を根絕せしむる爲めであると言つて居るが、是れは瞞着の甚だしきものである。此事に就いては英國の識者も大に論難して居る。夫れはアスキスがウキルソンと同じ意味の演說をバーミンガムに於てなした時に、英國の識者は今回の戰爭に於て獨逸を倒せば、將來戰爭を根絕することが出來ると思ふは空想である。此くの如き空想を以て國民を欺き、斯く欺くことによつて國民を無理に奮發せしむるは大に不都合であると論じて居る。米國人がウキルソンに欺むかれ、英國人がロイド・ヂョーヂやアスキスによつて欺むかるゝ事は詮方ないとしても、我々日本人は是れに欺むかれねばならぬ義務は毛頭も持つて居らぬのである。

六

既に一度戰爭を開始したと云へば、其の事だけで正義人道を完全に實行して居らないことを意味するのである。唯だ我々文明國民は一歩正義人道を踏み外して戰爭を始めても、戰爭に當つて戰爭を遂行する必要以外に正義人道から外れないやうにし、出來得る限り戰爭の害毒を限局することに努力す可きである。實に戰爭其の者が正義人道を實現するものでないことは多言するまでもない。乍去悲しい事には今日現在の國際關係に於いては、正義人道の一點張りで行けないことは、屢々戰爭の起ることによりて、有力に證せられて居ると思ふ。米國が今日まで大陸軍國でなかつたのは、其近隣に有力な國

かなかつたからであつて、若しも米國にして三つも有力な國と境を接すること獨逸の如くであつたらば、疾の昔に大陸軍國となつて居たであらうとは、米國コロムビア大學教授スローン(Sloane)氏が公言して居る所である。而して既に戰爭を始めた以上は、戰爭の結果として現はれた狀態を飽まで維持するに努むると云ふことは、各國家存在の根本要求であると謂はねばならぬ。是れを具體的に言へば、戰敗國としては可成償金を支拂はぬやうにし、又奪はれたる領土なり其の他の利權なりを恢復することに努めなければならぬ。反對に戰勝國としては占領したる領土を還附せぬやうにし、償金は出來る丈け支拂はしめ、利權も出來得るだけ獲得するに努むべきであつて、是れが國家の生存權より起る當然の要求であると思ふ。此の意味より云ふと、無併合無賠償と云ふことは、抑も戰爭を開始した當初の趣旨と兩立せざる空論であると謂はねばならぬ。

七

抑も獨逸は戰爭を開始するに當りて、無併合無賠償など云ふ考へを持つて居なかつたことは言ふ迄もなく、聯合國としても戰勝の場合に於て無併合無賠償主義を採るなど云ふことは、開戰當時毫も期待して居つた處ではない。唯戰敗の場合に主張するか否かの問題である。或る論者は戰勝の場合に於ける所謂國家の生存權に基因する當然の要求を目して、國際間に於ける侵略主義であると言ふも、我々は斷じてさうは思はぬ。日清戰爭の際日本が遼東半島を還附し、日露戰爭の結果露國より償金が取れぬと云ふ場合に於て、我國民は殆んど除外なく國を擧げて不滿不足を訴へたではないか。勿論新聞雜誌の指導力も與て大なるものがあつたでもあらうが、山間僻邑の新聞も雜誌も見ることの出來ないものまでが、戰ひに勝つて償金も取れぬ又占領したる領土を還附することを、決して喜んで迎へた所ではなく、唯だ止むを得ずして沈默を守つたと云ふに過ぎないではないか。戰爭を開始する以上は、苟も一の國家の臣民であるからには、其の獲得したる所の利權を維持したいと欲求するのが當然であつて、是れ畢竟國家の根本要求を具體的に言ひ現はしたものと謂はなければならぬ。己れの欲せざる處是れを人に施す勿れと

云ふことがあるが、獨逸が其の占領したる地域を還附し、尙ほ其の上にも英佛聯合軍が未だ一兵をも止めず獨逸が完全に保留して居るアルサス・ローレンを還附せよとは、是れ實に難きを人に强ゆるものでないか。事例は大いに違ふも、若し日露戰爭後に於て、我國が支那大陸に於ける一切の權利を放棄し、加ふるに臺灣を露國に讓與することを要求されたりとせば、是れに對して何と答ふるであらうか。又此の條件の下に於てのみ講和をしてやる、然らざれば講和をせぬと言はれたならば、我國民は必ずや最後の一人となるまで戰爭の繼續を絕叫したであらう。我輩はさう感ぜずには居られぬ。然るに更に是に加へてウキルソンの言ふ如く、現在の獨逸の主權者とは講和の談判を開始しない。夫れ故政體を變更し、主權者を取換へて來れと獨逸國民に强要するのは無法千萬な出來ない相談と謂はねばならぬ。

八

戰敗者より言ふと、無併合無賠償主義は極めて都合好きことであるけれど、夫れだけ戰勝國にとりては容易に容れ難い主義である。恰かも債務者は平均德政を歡迎するに相違ないが、債權者は是れに反し必ず是れを拒むに相違ない如くである。現に無併合無賠償を高唱して居る國は、戰爭の上に於いては敗者である。敗者として無併合無賠償の主義を承認することを勝者に强ゆるは潛越である。是れは日本としても誠に迷惑千萬の事である。均しく聯合國であるが、今日の處では他の與國は戰敗者の地位に立ち、日本は獨り戰勝者の地位に在るではないか。無併合無賠償主義は戰勝者たる日本としては甚だ迷惑なことであつて、此の點に於ては日本も獨逸も均しく迷惑を感ずる當事國であると謂はなければならぬ。即ち若し無併合無賠償主義を勵行せば、我國は靑島なり南洋諸島なりに於て獲得したる權利を放棄しなければならぬ。勿論是れは決して我國が對獨宣戰をなすに際し、當初より豫期したる所でないばかりか、我國も可成正義人道の行はるゝことには力を藉すべきであるから、若しも過去にまで無併合無賠償の原則を溯及するのであり、殊に世界の大半を獨占して居る英國が、進んで夫れ等の權利を拋棄すると云ふ

ならば、是れは寧ろ甚だ結構な事であつて、我國も今回の戰爭に於て獲得したる權利を固執するにも及ばないのみならず、或は朝鮮臺灣を還元しても宜しいのであるが、過去の戰爭に於て獲得したる領土や權利は、是れを維持して毫も讓らうとはせずして、英國が戰敗國たる地位に立つ現下の戰爭に限つて、急に無併合無賠償主義を力說高唱し、口に正義人道を叫んで他人の獲得したものは是れを吐き出すやうにし、自分は少しも吐き出さぬと云ふことは、甚だ蟲のよきことである。若し佛國のアルサス・ローレンの恢復と牴觸しないと稱する無併合無賠償の主義を今回の戰爭に當て欽めようとするならば、各當事國が過去を通じて既得の權利を放棄するのでなくてはならぬ。例へば米國は比律賓を西班牙に還附し、布哇を獨立王國の舊態に復し、英國は印度の獨立を許し、加奈陀を放棄し、露國は西比利亞を放棄するとでも云ふのならば、そは始めて意味をなすのであつて、此の場合になれば正義人道より講究すべきであると思ふ。然るに事此處に出でずして單に獨逸に迫りて無併合無賠償主義を强ひて承諾せしめんとし、又强ひて日本をして同じく此の主義を承認せしめんとするが如き、却つて正義人道を遠ざかる所以ではないか。

九

其處で、我々は我國としては、今更戰爭の目的を詮議するは無意義であると思ふ。我國は無論侵略主義を目的として對獨宣戰をなしたのでなく、當初より東洋の平和を維持するにあつたが、唯だ當面の問題として東洋に於ける獨逸の唯一の策源地たる青島を奪取し、是れを支那に還附すると云ふのであつて、然らざれば東洋の平和は得られないと考へたのであるが、私一個人としては必ずしも東洋の平和維持の爲めに對獨宣戰が必要であつたとは考へて居らぬ。否東洋の平和の最も多く脅かさるゝは過去に於ては露と英と、將來に於ては米と英とより來ると信ずるものである。然し國論が一度決定したる以上は、既往に溯りて論議しようとは思はぬ。即ち對獨宣戰をなしたる以上、終局まで宣戰の目的を貫徹するに努力すべきであつて、別段是に附加ふる必要はないと思ふ。

而して我國は來るべき講和談判に際し、其の獲得したる領土を斷じて獨逸に返還しないと云ふ一事があるのみである。併し是れが爲めに再び世界の大變亂を誘起し、聯合與國に多大なる迷惑を及ぼすと云ふ場合には、事の輕重大小を比較考量し、其の重きに從つて處決すると云ふ問題が起るが、是れは當局者が仔細に考覈し、能く國論の歸着する所を考へて、誤まりなき樣努めなければならぬ。世界の平和を害する嫌ひない限りは、單なる正義人道の口實の爲めに、既得の權利を輕々しく拋棄してはならぬ。斯の如きは畢竟國家の存在を無視する所以である。乍併、我國のみが獨り獨逸に對して開戰して居るならば、極力占領地の割讓を主張すべきであるけれども、數多の國家と聯合して戰爭に從事して居ると故、飽までも自國の都合のみを勝手に主張する譯にも行かぬ。聯合與國の利益をも尊重しなければならぬ。若し聯合與國に於て速かに講和する必要を生じ、其爲めに各與國とも多少の犧牲を拂ふことを甘んずる場合に於ては、日本のみ獨り一歩をも讓歩すること能はずなど主張するは、世界交際の通義に反する所以であるが、若し夫れ聯合與國にして自己が犧牲を拂はずして、單に日本にのみ犧牲を拂はす場合には、飽までも爭はなくてはならぬ。縱令日本が既得の權利を放棄しないとしても來るべき不和は必ず來らねばならぬから、講和に際しては日本は十分に其の權利を主張すべきである。而して是れ以外に於ては、我國の取るべき戰爭の目的はないと思ふ。即ち我邦としては、宣戰の目的は既に十二分に達し終つたので、何時講和となつても少しも差支ないし、此以上餘計な事をして人命と國費とを徒費するは愚な話である、我邦に取つては、戰爭は一切終局して居るのである。況んや交戰兩當事者が疲弊し切つた時を待つて、歐洲に出兵して一獲奇利を博す可しとする津村秀松氏一派の主張の如き、奇怪千萬な俗論であると信ずる。此こそ最醜劣なる侵略主義である。獨逸の政體を變更するとか、軍國主義を未來永久に絕滅するとか云ふ如きことは、我國にとりては戰爭の目的に少しも這入つて居らぬ所である。日本には日本の立場があり、英國には英國の立場があり、米國にも佛國にも夫々自國の立場があつて、各國は何れも其の國の立場よりして戰爭に從事

して居るのである、各國は必ずしも單一なる目的の爲めに戰つて居るのではない。

一〇

近來英米の識者が主張する所によると、今回の戰爭の目的はオートクラシーを絶滅してデモクラシーを立つるにあると言つて居るが、なる程戰爭の結果に徵して見ると、左樣な傾向の顯著なるものあるを認める。是れは甚だ結構なることにして歡迎するに躊躇しないが、併し是れを以て直ちに各國が協同して戰つて居る共通の目的であるとは言はれぬ。何となれば縱令聯合國が十分の勝利を得て戰爭を終結するものとしても、オートクラシーが滅びてデモクラシーになるとは言へぬ。又獨逸を滅ぼしても世界に於けるオートクラシーが絶滅する筈はない。オートクラシーは必ずしも獨逸に限らない。英米が勝つたとするも是等の國はデモクラシーの名實共に備ふる國でない。却つて獨逸よりも今日に於ては英米の方がオートクラチックである。目下最大のオートクラートは英國の宰相ロイド・ヂョーヂではないか。近時ウキルソンもオートクラートになつて絶大の權力を奮ひつゝあるが、是れに比較すると、獨逸皇帝はより小なるオートクラートであつて、開戰以來漸次に其の權力は狹められ、同時に獨逸も亦非オートクラチックになつたことは疑ひを容れぬ。實に戰爭の間接の結果として獨逸のオートクラシーは減退し、又露國に於けるオートクラシーの源であるロマノフ家は滅亡し、斯く敵味方ともに減じたにも不拘、却つて英米兩國は少なくとも現在に於ては、戰前に比して甚しく非デモクラチックになつて居る。されば獨逸を滅ぼすと云ふことは、結局オートクラシーが減じつゝある國が滅ぶる譯であつて、却つて英米に於けるオートクラシーが增大することになる譯である。若し是れを極端に言へば、オートクラシーを倒してデモクラシーの爲めに戰ふのであるならば、寧ろ獨逸に向ふ兵の半分を割いて、是れを英米に向けべきである。斯くする方が戰爭の目的を達することになると謂はなくてはならぬ。されば是れを以て直ちに戰爭の共通の目的であるとは言へぬ。事實は着々として其の反證を擧げつゝあるではないか。

一一

抑も戰爭は勝つことによつてのみ其の目的が達せられるものである。敗けては目的を達することは出來ぬものである。此は自明のことである。夫れ故戰爭には一擧兩得と云ふことはない。何うしても一方が勝てば一方が負けなければならぬ。通俗に商業は平和の戰爭であると云ふけれども、これは間違ひである。商業は一擧兩得どころか、一擧百得又は一擧千得である。商業上に於ては己れが利益を得るが爲めに必ずしも他人に損失を與へるものではない。唯だ取引所に於ける投機はさうは行かないのであるが、是れ投機取引のよろしからざる所以である。文明の商業は各兩方の當事者が各自利を得て退くのであるけれども、戰爭には當事國間に必ず勝敗があつて、負けるものがなければ勝つものがないのである。夫れ故交戰國の何れもが皆勝利を得ると云ふことは不可能事であり又矛盾であると謂はなければならぬ。而して勝てば當初の目的を十分に或は一部分達することが出來るけれども、負けては單に屈服があるのみである。されば各國とも平時に於て巨額の經費を投じ、軍備を充實して一朝有事の際に戰敗者たらないやう用意して置くのである、若し負けても目的を達することが出來るものならば、何れの國も莫大の經費を支出して、軍備を充實して置く必要などはない筈である。何と言つても戰爭は勝たなくては其の目的も主張も貫徹することは出來ぬ。然るに今回の戰爭に於て少なくとも目下の狀勢に於て戰敗國たる地位にある英國が、公々然として戰爭の目的を聲明するに至つては、甚だ以て異樣の感がある。併し負けては當初の目的は達せられぬ。ロイド・ヂョーヂが何遍演說しても、到底此の狀態を改むることは出來ぬ。是れに反し米國は未だ戰敗國でないから戰爭の目的を聲明する權利はある。されど米國は未だ戰はないので是れから戰はんとするものである。夫れ故戰敗者たる英佛と米國とは自ら其の立場が違ふ。是れを同一の立場に劃一しようとするのは無理である。夫れと同じ道理で、過去に於ける戰勝國たる日本と、未だ勝敗が山のものとも海のものとも決せざる米國とを同一の立場に立たしめねばならぬと云ふことは、愚な話ではないか。

一二

私は茲に敢て言ふ。米國が或る目的を立て、獨逸と戰はんとするならば、米國は獨逸を一手に引受けて戰ふのがよい。他國をまで強てお相伴させようとするに至りては、甚だ迷惑である。況んや夫れが爲めに間接に種々なる迷惑をかけられても、我國が是れを如何ともすることが出來ないと云ふのは、聯合國と云ふ名義を以て餘りに多大の犧牲を要求する所以であると謂はなければならぬ。元來米國には米國の立場があり又其戰爭の目的があらねばならぬ。米國が其目的を遂行するが爲めに、獨立主權國として有して居る權能によりて、戰爭を繼續するとも何うするとも夫れは米國の自由である。併し是れを以て他國を强ゆるとは不都合である。然るに露西亞は眞に講和を希望して居るにも拘はらず、單に聯合國たるの廉を以て、其の人民の一人も欲せざる、而して其軍隊に一の鬪志ないのを無理に引きづつて、戰爭を繼續せしめんとするに至りては、不正義不人道の甚だしきものと謂はなければならぬ。米國のウヰルソンは各國民の自主權を主張して居るが、若し眞に各國民の自主權を尊重するならば、露國國民の欲せざる戰爭を强ゆると云ふことは、自主權侵害の甚だしきものではないか。或は現露國の政權者は獨探であつて、國民の眞の意志を代表するものでないと曲辯するかも知れぬが、露國の眞の國民的意志は決して戰爭を欲して居ないことは、政府が獨探であると否とは全く無關係であること明瞭なる事實である。然るに自國に都合好き時は國民的意志であると言ひ、都合惡しき時は夫れが國民的意思でないと言ふが如きは、餘りに得手勝手な議論であると謂はなければならぬ。又他方に於て獨逸皇帝は國民の意志に反して戰爭を開始したと言ふけれども、是れも瞞着の甚だしきものである。此の事に就いては十二月八日のロンドン・エコノミスト雜誌に有力なる反駁文が揭載されて居る。即ち其の論旨は、向後はイザ知らず今日に至るまでの事實に徵すると、獨逸國民はカイゼルの今回の戰爭を開始したことを全然承認し、カイゼルを戴いて戰爭を遂行することを期して居る。夫れ故今日までの處は獨逸の主權者と國民とは全然同一の意志を以て進んで來て居る。然るにも拘

はらず英國の國民をして是等の事實と全く反對したることを信ぜしめようとするのは、甚だよろしくないと言つて居る。ウヰルソンの所謂各國民の自主權と國民的意志の尊重との點より言へば、獨逸に對して其の主權者を取り代へて來なければ、講和して遣らぬと云ふが如きは、自主權侵害の最も甚だしきものであると謂はなければならぬ。

一三

是れを要するに、第一に聯合國全體に就いて言へば、戰爭の目的と云ふことは、各國が皆夫々の立場があること故、劃一して論ずることは出來ぬ。第二に日本の戰爭の目的は、對獨宣戰の當初に於て形式實質ともに一定し、今彼れ是れと論議するにも當らぬことである。而して其目的は既に十二分に達せられて居のである。但し既に聯合國の一員たる以上は、自國のみの立場を頑迷に固守しなければならぬと云ふことは無い。他國の利益を尊重し、已むを得ざる場合には讓歩すべきであるが、他國の立場とも兩立し得る限りは日本國存在の當然の主張として、戰爭によりて獲得したる處は、飽まで是れが維持に努め、而して是れが東洋の平和を維持する所以であるやうに、全力を傾倒すべきであつて、其以上に渉つて戰爭の目的を延長することは斷じて不可なりと確信する。

六　自主的出兵よりも自主的平和

＝日本須く斷乎として講和を主張せよ＝

――大正七年七月三十日稿全九月『中外』掲載――

一

米國からの提案に關聯して自主的出兵と云ふことが主張せられ而して其が外交調査會の反對によつて撤回せられたとは、我々が新聞紙の報道に依つて僅かに傳承したことである。我々國民は其が果して事實であつたか否かをすら確むる機會を寸毫も與へられて居らぬ。況んや主張者の眞意、反對論者の論據の如何なるものなるかの如き之を推測す

るとすらも困難であゝ。唯だ我等は其の自主的てふ作語に少からぬ興味を感じたものである。誰人の作語に出づるか一向知ることの出來ぬ我々は、此作語の下に藏された眞の意味を看破する資格を有せぬものであるが、我邦が世界の表に立つて自主的に行動せよと云ふことは、言語の上丈けから云へば、如何にも共鳴せざるを得ぬことである。而して此の作語によつて一種の刺戟を與へられた我輩は、此機會に於て我邦が自主的なることの必要を更らに痛切に感ずると共に、其自主的行動は今に於ては出兵其事に非ずして却つて講和の提議、平和の力說にある可きことを深く感ぜざるを得ぬものである。我輩は國民の一人として當局者は勿論外交調査會の人々並に各政黨に對して、自主的平和の主張の必要に就て、此際十分愼重に考慮を旋らして貴ひ度いと切望するものであり、同胞に對しては日本今日の國是は斷乎として現戰爭の停止を敵味方一樣に勸告し、若し其提議に應ぜざるものあれば、日本は日本の有するあらゆる力を以つて、其非を責む可きことの必要を認めて貰ひ度いと思ふものである。

二

自主的行動を日本が取らざるの久しいことは我々國民は常に痛嘆に堪へざるものである。日英同盟てふ桎梏に束縛せられて、日本外務省の所在は霞ヶ關にありや、ダウニング・ストリートにありやの疑を惹起した事は實に度々であつた。此度の米國の提議なるものゝ眞相は分らないが、今迄日本の西伯利亞出兵に極力反對して居た米國が、今度は自分の都合次第勝手に出兵するに付て、義理一遍の通知を日本に與へたものなりとの世評が誤つて居ないものとすれば、我邦外交の自主的ならざるの甚しき實に浩嘆に堪へないものである。米國が我邦を侮ると若し道路傳ふる如くでありとするならば、我々は日露戰爭前の露國に對すると同樣の感想を米國に對して抱くことを禁ずるとが出來ない。ウヰルソンを以て人道の解放者だの平和の神使だのと『バイブル・ウーマン』でも言ひさうな事を唱へる人々は別として、苟くも米の飯を常食としつゝある今日の日本人は、米國の態度に對して極度の惡感を催すことを禁ずることが出來ないのである。併し

乍ら米國其ものを責める前我々は先づ翻つて自國の態度を省みなければならぬ。米國が斯くの如き態度を取る所以の最大原因は、我國が何事に就ても自主的ならず、常に所謂『御多分に洩れぬ』的態度を取りつゝあるが爲めであるとは、我々國民として殘念乍ら之を認めざるを得ぬのである。米國の政府が其事實を否認したと傳へられ單に當人がペリー艦隊の一水兵たりしと稱する所の無教育なる一老人をわざ〳〵日本まで引張り出して、日本中を見せ物的に引ずり廻して歡迎々々と騷ぐ處の我國民は、凡ての事に就て恰も布哇と同列にある一國ではあるまいかと思はるゝやうな態度を米國と米國人とに對して取つて居る。我輩は米國が多くの事に於て我邦の遠く及ばざる美點長所を有して居る事を認めるに躊躇するものでない。乍併米國とさへ云へば、凡ての事に就て、日本が崇拜す可き渇仰す可きであるかのやうに考ふることも亦斷じて出來ない。が其は姑く措くとして、米國の政治家は決して日本のウキルソン信徒の言ふやうな天使でも聖人でもない。殆んど凡べての國の凡べての政治家と同じく、政治家たる以上は虚言も吐くし策略も弄する極めて俗な人々であることは之を否認す可きではない。ウキルソンは學者なりと云ふ人があるが、彼は今日は斷じて如何なる意味に於ても學者ではない。矢張一個の俗なる政治家たること寺内正毅氏や犬養毅氏と異なる所はないのである。大學教授てふ無上の學者的地位に晏如たらずして大統領になつたこと其事、既に彼が眞正の學者でないことを十分に證明して居るのである。ウキルソンを我山川健次郎氏と同一視するは大なる誤である。

我國が自主的ならざることの第一は、國民が物を考へるに於て自主的ならざること是である。世人は日本の大學教授が西洋人の學説の受賣にのみ專らで自發的研究の乏しいことを責めるが、物を考へるに西洋人か支那人かの助けを藉らないではやるとの出來ないのは、決して我が大學教授のみの特色ではない、日本人凡べての特色である。殊に對世界の問題を考へるに至つて然りである。嘗つて政治家や外交官を評する某氏の言を聞いた、曰く、彼は感心な人である、何となれば彼は常にロンドン・タイムスの日刊を必ず

通覽するからと、我輩は此言を聞いて實に噴飯を禁ぜなかつたが、タイムスを讀むは實は甚だ感心す可き事たるを後に悟つた。何となれば多くの人はタイムスをすら讀まずして、又聞のタイムスにたよつて世界の事物を判斷して居るのだから、自分が讀んで其說に感服する人は未だ〳〵大に感心す可き人であるのである。ウヰルソンを平和の神だのエライ學者だのと云ふ人の中にも、彼の演說の外國電報の翻譯を讀んだ丈けでサツサと感心して仕舞ふ人もある。彼が大學教授時代に著した著作などは一頁すらも開いて見た事なくして、彼はエライ學者なりと評する學者先生すら我が日本國には存在して居るのである。斯くの有樣であるから政治家や外交家が獨り自主的ならざるを責める權利は、實は我々日本國民には無いと云つても過言ではあるまい。否言葉の上丈けでも自主的と云ふことを言ひ出した人々に感心敬服す可き義務が却つてあるかも知れないのである。

三

右の次第であるから、自主的たれと主張することは實は無意味無用であるかも知れない。然り積極的に何事かやるに付いて自主的たることは、今日の日本としては至難の事であらう。然し何時迄もタイムス教徒やウヰルソン信者にのみ我々の思想や我々の生活の指導を一任して置くことは甚だ迷惑な事である。機會ある毎に一歩づゝ自主的行動を取ることを勉め圖らねばならぬ。幸ひ言葉丈けでも自主的と云ふことを言ひ出した人がありとするならば、我々國民は先づ其人々に向つて、最小限度の自主的行動を取つて呉れんことを註文す可きであると信ずる。而して我輩は其最小限度の自主的行動の中、今の秋に方つて一番世界の爲めになり、又日本の爲めになる事は、我邦が自主的に、先づ此度の戰爭を停止してタトヘ一時なりとも平和の來る樣交戰聯合國幷に獨墺側に提議することは是れであると確信するものである。我輩は所謂自主的出兵なるものに全然反對するものたるは勿論、今日の場合露國に出兵することは如何なる口實、如何なる形式の下に於ても不必要否有害であると信ずるものである。チエッヒを助けて佛國に於ける聯合軍に加はらしむると云ふ事は、我邦の立場としては勿論、世界人道の上から見て寸毫も

其必要なしとするものである。若干のチエッヒが加はつたとて聯合軍の兵勢の上に其が何物を貢獻するか。我々は其價値は零であると信ずる。而して此くの如き姑息なる出兵は却つて世界の爲めにも我邦の爲めにも有害であると思ふ。戰は眞面目な事である。藝術はエルンストなりと云ふことの眞なるよりも、戰はエルンストなり、否ならざる可からずと云ふ事の方が遙かに眞である。タトへ一人の生命たりとも國民兵の生命は之を尊重せねばならぬ。戰と云ふことは如何なる眼を以つても厭ふ可き事である。人を殺し、人を傷け、財産を破壞し、都邑を荒し、農村を蹂躙することは、決して美事にあらず善事にあらず。唯、其れよりも更らに尊ばざる可からざる國の存在が之を必要とするにより、此の惡事此の凶事が是認せられるのである。國の存在の繫がらざる事の爲めにはタトへ卑賤なる國民一人の生命なりとも之を捨てさせ、敵方の極微なる兵士の一人の生命たりとも之を絶つと云ふことは、人道上決して許す可きことでないと我々は信じて居るものである。「國の爲め」と云ふ事があるから此のイヤな事も却つて我々が勇んで此に赴くことなるのである。「國の爲め」でないことが始めから明瞭なれば、良心を詐るに非ざる限り、喜んで軍に從ふと云ふことは出來なかる可き筈である。是が國民兵存在の根本義たりとは我々の堅く信ずる所である。チエッヒ援助と云ふ事は日本國の存立に如何の交渉を有するか、我々は其は斷じて沒交渉であると思ふ。然らばチエッヒ援助の爲——眞に其積りにて——出兵——守備兵派出とは同一でない所の——すると云ふことは、我忠良なる國民兵の士氣の上に寧ろ有害な影響を與ふることゝ信ずる。チエッヒをして墺國から獨立せしむるに助力する以上朝鮮をして日本より獨立せしめんとするものがあつても、之を拒む可き理由は無いことになる。果して其れで宜しいのか。況んや其爲めに若しもマキシマリスト派なり其他の派なりの露國人の生命を損ずる事ありとせば——其は絶無とは云へまい——是れ口實の如何に拘らず露國——困憊の極に達せる——と露國人とを敵とするものである。人道上斷じて不可である。チエッヒ援助が人道的行爲であると稱する米國は、他面に露人を苦しめることの起る可きを豫想せないのか。左樣な迂

濶な事はあるまい。是れ實に米國の僞善的人道の眞相を暴露する一の有力なる左券である。米國が其僞善の爲めに其責任を負ふは米國の勝手に任せて置けば宜しとしても、我邦――少くとも米國よりも遙かに少く僞善的なる――が其仲間入りすることは迷惑千萬な話である。出兵するなら、其が日本國の存立上斷じて避け難い場合でなければならぬ。國の存立が必要とする出兵なれば、豫め兵數を限定したり、行動の範圍を限定したりするのは、變な事である。日本の存立を維持するに必要なる限りは、如何に大規模の出兵たりとも之を厭ふ可きではない。否出來る丈け有効に出來る丈け短日月に目的を達す可き爲めには、始めより大規模の計畫を立つ可きではないか。兵を動すには、姑息、限定は大禁物である。否な自滅的態度である。

四

日本國存立の意義から見ても、又た世界人道の上から見ても、今の秋に當つては姑息なる出兵によつて日本の士氣を殺ぐと云ふことは甚だ害がある。況んや其れが米國式僞善の御相伴たるに於てをや。自主的ならずてふ缺點を有するも、僞善的――餘りに――ならずてふ長所――確かに長所なりと我々は信ずる――を有する我邦が、今や此長所を失ふ可く餘義なくせらるゝと云ふことは重大事である。一方には忠良なる軍隊の意氣を沮喪し、他方には國民を驅つて僞善の爲めに犧牲たらしめることは、斷じて有害の行爲である。

革命前の露國、ロマノフの露國は屢々日本國の存立を危ふした。我々は此くの如き露國と協約したとて提灯行列を催した東京人の腑甲斐なさを痛嘆しつゝあつたものである。某月某日我輩は上野の山から彼の提灯行列を見物して、日本人何くにある、江戸ッ子何くにあると叫ばざるを得なかつた當夜の不愉快を今に忘れるとが出來ないものである。擊てや懲せや露西亞國をと小學生徒に歌はせた人々は、少しも變つて居らぬ同じ露國と協約したからとて萬歳ウラーを唱へよと强請する。我々日本人は生憎一つしか腸の持合せがない。政治家の御都合次第で其腸を入れ換へるわけには行ない。我等の血管

を流るゝ溫き血は外交官の命令次第で、其溫度を上下するとは到底出來ないのである。

然るに今の露國は最早日本の存立を屢々脅したロマノフの露國ではない。革命其物の正否、マキシマリストの有力、無力は別問題である。兎に角今の露國は日本の存立を危ふする傾向を少しも持つて居らぬ露國である。否大戰に疲れ惱める可憐にして同情す可き露國である。窮鳥は獵夫之を擊たず、苟くも武士道などゝ誇つて居る我日本が此露國を更らに苦めることは斷じて爲す可きではない。內田康哉氏は一切の露國出兵を不可なりとして職を辭したと世評は傳へて居る。若し其が本當なら實に立派な進退と云ふ可しと思ふ。少くとも今に於ては一切の露國出兵——他日は別問題也——を絕對に否とすることは、我々——敢て複數を用ゆる——の同感に堪へざることである。

曩日の提灯行列連は今次の出兵に對して、更らに又其腸を入れ換へて之に謳歌するかも知れないが、平凡なる市民たる我々には其んな藝當は出來ない。誰が何んと言つても露國出兵は迷惑千萬と斷言せざるを得ない。

五

今日は日本が平和主義の急先鋒となつて、其有するあらゆる力を傾注して各國に講和を力說す可きハイ・タイムであると信ずる。

聯合國も敵方も最早國の存立が必要とする丈けの戰鬪行爲は十二分盡した。佛國は實に善く健鬪奮戰した軍功第一に居る可きである。是れ佛國の存立が最も多く脅かされたからである。獨逸も實に善く戰ひ善く辛抱した。獨逸の國民は此戰爭が獨逸の存立に重大に關係すと確信して居たからである。然るに英國に至つては、少しも國の存立に關係した譯ではない。勿論獨逸勝てば英國の world domination は著しく害せられるに相違ない。然し今日の世界に於て英國一ケ國が橫行跋扈して居ることは英國以外の凡ての國の迷惑千萬とする所である。一國のみ我儘勝手に世界の事を處理す可き時期は既に已に過ぎ去つて居る。世界の中心が唯一つである時代は過去の事である。幾つかの小中心が之に代る方が人類全體の遙かに幸とす可き所である。經濟上に限つて見ても、ロムバ・

ド・ストリートが世界の金融、財權の中心たるとは幾多の便利あると共に、又た不便不都合も尠からずある。戰後紐育が世界金融の中心たるか否かと云ふが如きは、歴史を知らざる「シリー・クエスチョン」である。井上正金頭取は我々の或會合に於て日本が倫敦に代り――少くも一部分的に東洋丈けなりとものの――金融の中心たる可しと主張せられたが、當日の會衆多くは全部の贊成を表明しなかつた。我輩は世界金融の中心などゝ云ふものゝ必要を疑ふものであつて、倫敦が中心であつたは、是れ畢竟英國が世界に横行して居る反影に外ならぬと信ずるものである。金融中心必要論者は英國の世界獨占が萬世不易の事實と前提するものであると思ふ。其れと同樣に經濟以外に於ても、英國が世界の中心たる事は、人類全體の幸福上決して必要事ではないと思ふ。英國の世界的プレスチッヂが幾分なりとも打破せられると云ふ事は、人類全體の幸福から見れば、甚だ歡迎す可き事である。金融は勿論、財權の上でも、外交の上でも、政治の上でも其他一切の事に於て、英國の羈絆から獨立したる各國の自主權が追々確立するとは、聽て世界人類全體の幸福を進むる所以である。片田舍の山の中の三等切符の裏面にまで英語を刷り込む事が必要又は便利なりとせらるゝ時代の過ぎ去ることは、少くとも國民的自尊心の爲めに甚だ喜ぶ可き事である。日本人同志の手紙のやり取りに英語――而もブロークンの――を書くやうな馬鹿々々しい時代の過ぎ去る事は愉快な事である。タイムスのみを新聞と心得る馬鹿の減る事は結構な次第である。文典上頭を曲げねばならぬやうな英語演説を、日本人同志の會合で得々とやつて、文明人氣取りをする人の減るのは幸福なことである。

思はず話が横道に入つたが、英國は決して國運を賭して戰ふ必要がある譯ではない。其兵勢の不振は當然の事であつて、英國兵士の弱い爲め計りではない。英國の――殊に上流社會の――對戰氣分の緊張しないと云ふ苦情は、殆んど毎號エコノミストやステーチストが痛論する所であるが、之は責める方が無理である。我等笛吹けども汝等踊らずと言つたとて、其は踊らない方が本當である。英國人に取つては恐らく戰爭も一のビジ

ネスであらう。ビジネスに熱狂は禁物である。エコノミスト記者は甚しい感違ひをして居るものと言はざるを得ぬ。

六

歐洲に於ける戰爭の現狀は敵味方共最早決定的勝負を見るの望はない。獨逸に多くの勝味あることは明白の事實であるが、然し勝利と云ふ事は言へない。又た向後此以上の成績をあげ得ようか否か甚だ疑しい。聯合國が小功を收めたと云ふが、之を勝戰とする迄には大變な事で先づ今の處見込はないと斷言しても間違はあるまい。要するに、一方の勝利によつて他方の國々の存立が脅されると云ふ危險は全く無いのである。然らば戰爭繼續の理由は無くなつたものである。僞善的英米人は獨逸を全滅する迄は戰はざる可からずと口先では言つて居るが、如何なる成算があつて然か言ふのか到底口先丈けの事である。而して獨逸を全滅する必要其ものは寸毫もないのみならず、其は世界文明の爲め怪しからぬ事である。元より獨逸が英國に代つて世界に横行するやうのことがあれば、其は毒を以て毒に代へるものであるから、斷然拒まなければならぬが、今の戰績では獨逸が世界を我物顔に横行すること英國の如くなると云ふ危險は無いものと言はねばならぬ。五分五分か四分六か兎に角敵味方共勝敗の決定せざること久しき以上モハヤ戰爭は無意味であつて、世界中の人間を苦しめ困らせて置くことは、如何にも馬鹿々々しいことである。即ち今が平和を提唱するに恰好の時節と思ふ。日本の成金輩は之に反對するに相違なからうが、我々は成金を利する爲めに、生活の苦しみを何時迄も續くることは斷乎として謝絶せざるを得ぬ。否成金の增長は人道上、風敎上、倫理上甚だ宜しくないことである。一日も早く今の成金時代に終を告げしめねば、人類の墮落は底止する所がないことゝなるであらう。此點からのみ云つても戰爭停止は急要事である。

七

英國は自國と世界とを同延長のものとなし、英國の利益の害せらるゝことは即ち世界人類一般の利益の害せらるゝことゝ同義に歸すかの如くに唱へるを常として居る。今次

の戰爭を英國の勝利に於て終結しないと云ふことは、慥かに英國のプレスチッヂを著しく損ずることには相違ない。飜つて英國は、これは世界一般の利益の害せらるゝことなるかの如くに言ふのである。乍去此戰爭が英國の勝利を以て終らねばならぬとは、世界の利益の上から云へば、決して必要事ではない。英國のプレスチッヂの失はるゝことは英國の損に歸するには相違ないが、其れは世界全體の損に歸することゝは決して同一義ではない。獨逸の軍國主義が世界の平和を脅すよりも、英國の商國主義、海賊主義の方が、今日まで世界の平和を脅して居たこと數十倍の上に出でゝ居るは、少しく歷史を知るものゝ而して公平な判斷を有するものゝ拒否し能はぬ所である。殊に我日本は今迄所謂獨逸の軍國主義なるものによりて格別の危險を蒙つた經驗は一度もない（三國干渉や膠洲灣占領は決して日本を危うからしめたとは云へない。三國干渉は獨逸が張本人であつたとしても、三國干渉であつて、獨逸のみの干渉ではない）。假りに一歩を讓つて脅かされたことがあるとしても其は一度か二度の事に過ぎない。然るに英國の爲めに眼に見えざる壓迫を被つた事は二度や三度ではない。英國に取つては或は獨禍は現實の事實であらうが、日本に取つては獨禍は未だ存在して居ない、却つて過去に於ては露禍、英禍、殊に近頃は米禍の東漸の方が歷然たる事實である。日本を離れて世界全體として見ても、今の處『禍』と名づく可きものは獨禍ではない、寧ろ英米禍である。獨逸を全滅することは決して世界平和の必要事ではない。英國のヘゲモニーの何分なりとも減殺せられる方が世界平和の保障としては、遙かに意義ある出來事たることは疑を容れぬ。即ち日本國存立の立場から見ても、世界全體の平和の上から見ても、獨逸を何處迄も滅ぼして仕舞ふとか、此以上苦しめるとか云ふ事は決して必要でない。必要のないのに多大の犧牲を拂つて而も成算の甚だ乏しい戰爭を繼續することは、畢竟英國の利益即世界の利益なりてふ誤りたる前提を置くからの事である。我々は英國の御先棒となつて唯だ犧牲を拂はせられる丈けで、よし英國が決定的勝利を得るとしても、其は英國の利益を支持する所以たるに過ぎないので、世界全體の利益は其爲に別段に進められることの

ないことを知れば、今日戰爭繼續の如何にも無意義な事たるを悟る可きである。我々は英國の繁榮を希ふことは英國人に次では最も熱心なるものである。又た英國に多大の優越せる點あることは十分に之を認める。乍去其繁榮其優越を維持する爲めに、世界全體に無用の苦しみを與へることを承認することは出來ぬ。平和の手段によりて此後とも英國が其大を增す事は之を希ひこそすれ、決して之を沮まんとするなどの念は有たぬものであるが、既に已に戰ひに疲れたる我聯合軍を、更らに困憊の極に陷れてまで、英國が其野心を逞ふすることには斷乎として反對するものである。

八

更らに又獨逸全滅の爲めと號して米國が大げさな軍國化を進めることは、世界の平和の上から甚だ希はしからざることゝ云はねばならぬ。是が爲めに危險を最も多く感ずるは我々日本人である。對獨の爲と稱して充實せられる米國の軍備は、其完成の曉は、果して世界平和の保障となるか、又は其反對に世界平和のメネース（脅迫）となるかと云へば、我々は後者の方がより多くの「確らしさ」を有するものと考へるのである。充實した曉の米國の軍勢は無爲にして終るものではあるまい。其最も活躍に便なる方面に活動し來るものと思ふ可である。活動に最も便あり最も多くの「確らしさ」のあるは、南米であり、東亞細亞である。南米の小弱國と我日本とは最も多くの懸念を禁じ能はぬものである。我々は唯だ意氣地なく米國の軍備充實を羨むものではない。然し米國が今大規模の軍備擴張を實行する必要のないのに之を敢行するに對しては十分なる考慮を要する。何となれば我輩の信ずる所にては、日本は獨逸は勿論其他世界中何れの國とも其が國の存立に必要なる以上は敢て戰爭を辭す可きではないが、獨り米國との戰爭は極度まで之を避くるに勉めなければならぬ地位に立つて居るからである。國の存立の爲めとして米國と戰へば、米國との貿易は杜絶し、其結果我國民の生活は極度の困難に陷る。獨逸と國交が絶えても國民生活上忍ぶ可からざる底の損失は見て居らぬが、米國と國交絶てば、我々の日常生活は甚しき困難に陷ることを免れぬ。在米、在哇の同胞の困難

は言までもないことである。即ち米國との關係は絶對的に不可忍に立到るに非ざる限り決して之を絶つ可きではない。餘程の辛抱を敢てしても唯戰爭を避け得んが爲めに我國は全力を盡さねばならぬ。然るに其相手たる米國が好戰國となる事は實に絶大の危險を意味するものである。最も冀はしかざる運命に日本を導くもので、其れこそ日本國存立上の重大事である。米國の軍國化の口實を奪ふだけの爲めには今次の戰爭停止は緊要の一事である。獨り日本のみでない、南米の諸小國、亞細亞の諸國何れも此點に於ては共通の利害關係を有つものである。今次戰爭の停止によりて此危險を何分にても防ぐことは、世界人類の大なる部分の利益が之を要求することゝ云ふ可きである。而して米國の國民に取りても、其軍國的迷夢より覺むることは今の秋に方りて甚だ必要である。言論の自由の極端に制限せられ、大學教授が一回の査問を經ずして其言論の爲めに解職せられ或は演說會場より直ちに獄に投ぜられ（コレハ近頃有名な經濟學者ニアリング・スコット教授の蒙つた運命である）、自由平和を國是とする米國、今や化して一大專制國、一大壓制國となつて居るのは、米國民の爲めに實に同情に堪へぬ事である。ウキルソンを人類の解放者だと崇拜する人々は、他面に於て米國人が今やオートクラシーの鐵鎖につながれつゝあることを知らないのである。現戰爭の停止は米國々民其人の爲めにも緊要の要求たる可きである。

九

歐洲の國民は英國の魔術が張つた網に囚はれて居て、空想の夢から目覺めることの出來ぬ憐れなる狀態にある。伊國人の如き其好適例と思ふ。軍國主義を滅ぼす爲めてふ空なる夢の爲めに自ら却つて最惡の形に於ける軍國主義の鬼となつて居る。此迷夢を覺さし、世界の人類を現戰爭の悲慘から救ひ出すことを勉む可き人は未だ歐米には出て來ぬ。實に氣の毒千萬な次第である。是れ豈日本が自主的に眞面目に熱誠を傾倒して自ら敢て當る可き好時機ではないか。ウキルソンが人道の釋放者たらんことは我々も甚だ希ふ所であるが、彼は一向其方面に手を着けず、却つて現戰爭をしてより多く世界を害せし

むるよの爲めに極力盡瘁して居る。されば我々はウヰルソンの改心を待つまでもなく、先づ自ら覺醒して人道の釋放者、人類の解放者、平和の使徒たるの任に當る可きと思ふ。誠心誠意何の野心を抱かず、何の特殊的利益を求めず、單に世界の平和の爲めに、人類の覺醒の爲めに、斷乎として平和の提案を敵味方双方に對して爲す可く、若し之に耳を假さゞるものあらば、日本は其有するあらゆる力を極度まで捧げても其反省を促す可きである。之が爲めに若し出兵が必要であるとなれば、其れこそ國の存立と世界の平和との爲めであるから、堂々として大規模の出兵を敢行す可きである。但し其は平和の提案に應ずる時までを限る可きである。○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○。獨逸、墺太利が應ぜぬならば、其時こそは如何に困難多くとも東歐なり西歐なりに出兵して、聯合軍に加勢して決戰を試む可きである。然しそれは一の假設に過ぎぬ、日本が其れ丈けの決心を以て事に取かゝる可しと云ふに過ぎぬ。

恐らく實際に左樣なる必要はあるまい。○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○。

條件にして妥當なる限り獨墺側は決して無下に峻拒することはないと信ずる。日本にして此事を敢てするならば、開國以來今日迄一度も自主的に行動しなかった損失を多少は償ひ得るは勿論、日本國存立の意義、日本の非僞善的國是は愈々明白となり、世界の表に日本なる一ヶ國の存在することの如何に世界人類に取つて有意義であるかゞ判然たるに至るであらうと思ふ。平和を口にするは誰人も出來る、平和を口實として軍國化を進めることは外の國がやつて居る、眞に平和の恢復の爲めに此れ丈けの決心を以て當ることは今の秋日本を措いて外に國はない。戰爭が何時終るであらうかと、日和見斗りを

して居るは、獨立國のまさに恥づ可き所である。日本自ら起つて戰爭に終を告げしむる工夫にこそ心を用ゆ可きである。

ベテンと策略とにかけては我政治家、我外交家は到底歐米人の足下にも及ばない。唯だ右の如く誠心誠意を以つて、一の策略なく、一の懸引なく、斷乎として自主的に世界平和、戰爭停止を主張する位のことは我政治家でも出來得ること、信ずる。乍去其爲めに、國民が一人の如くに一致して我當局者の後援とならなければ出來ぬ。即ち先づ國民中に此輿論を喚起することが第一の仕事であると信ずる。是れ我輩が此一文を公にする所以である。讀者讀書生午睡の囈語として一笑に附することなくんば幸なり。

附言　嘗て本誌(中外)に掲げた(拙論本書第一篇八)及『太陽』に寄せた『何の爲に戰ふ』(本書第二篇五)に對し長友吉野法學博士及室伏高信君から懇切な反駁を賜つたが、其後の米國の行動は予輩に代つてに十二分に兩兄に答を呈した次第であると信ずるから、無用の答文を繰返へす事を省く。而して本論は右二文を延長したものであるから、序の折に兩兄が此文に一瞥を與へられて、卑見の存する所を看取せらるゝとあらば光榮至極と存ずるものである。『ジャパン・アドヴアータイザー』及『極東時報』の批評(後段に掲ぐ)に對して答文を略する理由も粗同樣である。

殆んど凡べての國の凡べての政治家は嘘を平氣で吐くものであることは、右二拙文以後英國に於て、ロイド・ヂョーヂが重大な虚言を吐いたとて大騒ぎをした事實——タイムスも之を傳へて居る——が、我輩の爲めに有力に裏書をして呉れた。如何に熱心なロイド・ヂョーヂアンと雖ども、此一事は如何とも打消すことは出來ないのである。『予は大概な政治家は嫌いである、獨りロイド・ヂョーヂに至つては、之を好愛することを禁ずる能はず』と『貧乏物語』の附錄に於て告白して居らるゝ河上博士も、右の出來事には定めし痛く興を醒まされたことであらう。思ふに此次はウキルソンの番となるであらう。

七　對抗か順應か

＝資本的侵略主義に抗し、眞正のデモクラシーを發揚せよ＝

——大正七年十二月六日談話全八年一月『中央公論』掲載——

一

對抗と云ひ順應と云ふも要するに程度の問題である。日本が如何に世界の大勢に拮抗して行かうと思つても、夫れが世界の大勢である以上は、全然之を拒否する事は不可能

である。結局順應となる外に途は無からう。然し一切萬事を拋つて世界の大勢に順應する外は無いかと云ふに、夫れでは無論可けない。大體に就ては順應する外は無いにしても、日本は日本獨特の立場から、順應しつゝも亦之に對抗して行かなければならない。所で果して日本が世界の大勢に對抗して行けるか何うか、即ち可能不可能の問題が茲に起つて來る。又對抗して行くとしても、果して何の程度まで行くかといふ程度の問題も起つて來る。我輩は向後の日本は一方に於て資本的侵略主義に極力對抗すると共に他面佛蘭西と相並んで眞正のデモクラシー（舊式の其れを排斥して）を發揚することを以て、日本の使命であると信ずるものである。以下少しく略說を加へて見よう。

二

今度聯合軍が得た大勝利は聯合國側の軍事上の勝利ではない事は、我輩が『勝者は誰か』に於て論じて置いた通りである。今次の戰爭に勝つたものは實に獨逸の革命である。我國には英米論者の口眞似をして、今回の世界戰爭はオートクラシー對デモクラシーの戰であると言つたものが澤山あつた。從つて這の大勝利を觀てデモクラシーの萬歲を唱へて居る。獨逸を仆したものは確にデモクラシーではある。然し夫れは決して英米論者の所謂デモクラシーでもなければ、從つて亦我國識者の所謂デモクラシーでもない。英米論者の說くデモクラシーなるものは政治的のデモクラシーである。而して夫は資本主義のデモクラシーである。capitalistic political democracyである。而して之れがオートクラシーに勝つたのであるかと云ふに、決して左樣ではない。獨逸に勝つたのはデモクラシーはデモクラシーだが、夫れは social democracy である、社會民主々義である。我が國の論者は此ソーシアル・デモクラシーが勝てばよいとは決して思つて居たのではあるまい。此ソーシアル・デモクラシーの勝利の爲めに萬歲を祝して居るのではあるまい。

所で新に起つて獨逸を仆したソーシアル・デモクラシーにしても、或は又從來の英米のキアピタリスチック・デモクラシーにしても、我輩は之を pseudo-democracy（假面的民主々義）と呼ぶに躊躇しない。何故なればソーシアル・デモクラシーは即ちプロレタリ

ア階級のみのデモクラシーで全人民の其でないから、本當のデモクラシーとは云はれない。即ち彼等自らソーシアルと云ふ形容詞を附けて居る。其意はプロレタリアン（第四階級的）と云ふことである。而して其手段は階級戰爭である、即ち全デモスを二分して相爭はしめようとするものである。他方に英米のデモクラシーは今日與へられた政治組織の上にてのデモクラシーである。而して今日與へられた政治組織は資本主義の組織である。他日或は變つて來るかも知れないが、現在のまゝでは全人民を包含したデモクラシーではない。所有階級のデモクラシーである。理窟の上では全人民のデモクラシーと言つて居るけれども、夫れは畢竟抽象論で、實際の事實は局部的のものである。

世界平和の克復は洵に結構で又獨逸の軍國主義が仆れたのも洵に結構だけれども、夫れと共に我々は更に恐るべき强敵を迎へることになつたのを忘れてはならない。之れ我輩が世界文明の危機と叫ぶ所以である。我々は資本的侵略主義の極盛と、而して其反對毒たる社會民主々義に面せなければならないのである。資本的デモクラシーは當然の結果として經濟的侵略主義である。もつと判り易く言へば海賊主義之である。我々は今プロレタリアの跋扈と海賊の跋扈との間に挾み討ちにならんとして居るのである。之れが近き將來の世界を脅かす危險である。日本は此大勢に對して唯順應するのみで濟まされ得るか。一切萬事を拋つて順應すべきであるか。否、斷じて否。我輩は曰ふ、日本は、否、世界の全體は、斷じて之れに對抗せなければならぬと。

三

平和克復後の世界の形勢は如何なるかと言ふに、英米は今度の拾つた勝利で益々資本的軍國主義、經濟的侵略主義を逞しうするであらう。之れは單なる想像ではない事實である。既に其端緒は一昨年巴里に開かれた經濟會議に見出される。即ち戰後獨逸に對して大々的經濟戰を開始するといふのである。之れやがて海賊主義の進化したもので、之れによつて利するものは英國である、米國である。今や軍國的獨逸は殘れて世界の balance of power がなくなつた。獨逸のある間は此海賊主義に對抗して勢力の均衡が保たれ

て居たが、獨逸がなくなつたので、世界は今やアングロ・サクソン人種の跳梁に委ねられんとしてゐる。日本が如何に海軍を擴張しても、夫れは鱓の齒軋りに過ぎず、迚も拮抗し得るものではない。其資本的軍國主義、海賊主義は戰の上でなく、所謂經濟戰來らんとすと云ふ是れである。乍併經濟戰とは虛名である、敵なき戰とは無意味である、畢竟は軍國主義オートクラシーを退治するといふ美名の下に、資本的侵略主義が今回の勝利に由つて完全に確保されるに至つたのである。ウヰルソンの主張する海の自由は到底英國の贊成するものではない。之れ海賊主義が滅びぬ端的の證左で、海賊主義と海の自由とは到底相一致する事の出來ぬものである。

戰後獨逸が經濟界に大々的ダムピングをやるに相違ないから、今から大に其對應準備をしなければならぬと言つて、人の好い日本を始め聯合諸國を誘つたのは、之れ實に資本閥が世界を恣に横行せんとする準備に外ならない。戰後獨逸がダムピングすることの無いのは判り切つた事實である。然るに我國の識者學者、否專門の經濟學者の大多數が之れを受け賣りして、『戰爭の經濟が終つて經濟の戰爭が始まる。而して夫れは獨逸が戰時中に蓄積した物品をダムピングする事によつて其幕が切つて落される』と言つて居る。之れ大なる愚論で、久しい以前から我輩が駁擊を加へて已まなかつた處である。戰後のダムピングの可能を信ずるのは、獨逸を買被るの甚だしいもので、一方にあれ程戰爭を續けながら、他方戰後ダムピングを試むる爲めに物質を蓄積し得る譯が無い。然るに我國の論者は、獨逸を憎み嫌つて居た者でも、その戰後のダムピングの可能を信じて疑はなかつた。之れ彼等が常に言ふところと反對に心中恐獨病に罹つて居つたのと、他面獨逸國民の心事を誤解したのとに因る。獨逸は戰後のダムピングを用意しつゝ戰爭を戰つたものではない。曲直は別として、一旦戰爭を始めたからは擧國一致で戰爭に全力を傾注したのである。何の餘裕あつてか戰後の資本的侵略主義の準備を爲し得やうか。之れ我輩が彼等論者に極力反對した論據である。然し我國の學者殆ど其大半は我輩に反對であつた。而して今は何うであるか。獨逸には今やダムピングを行ひ得る餘力は

一寸だつて無い。之れ獨逸の眞相を了解する事が出來なかつたのにも據るが、他面又資本的侵略主義者が爲にする所あつて獨逸の怖るべきを描き出し、世界の人民を欺いた詭計にまんまと乘せられた愚論である。

四

獨逸のソーシアル・デモクラシーが今日のやうな勝利を得た事は我々の夢想だもしなかつた所である。此點に於て先見の明を誇り得る者は堺利彦君一人位であらう。今後の世界は此社會的デモクラシーと資本的デモクラシーとの對抗と云ふ大いなる危險に脅かされんとしつゝある。之に對して我日本は端的に如何に此間に處するかを考へねばならぬ。夫れには順應でなくして對應、否對抗的でなければならぬ。即ち資本的デモクラシーに對抗すると同時に、亦社會的デモクラシーに對抗して行かなければならぬ。

追記。何上博士は我輩が社會民主々義撲滅せざるべからずと主張すると云はる。此れは誣妄であること是文を以て證とせられたし。

而して世界列國の中之れに對抗して、世界の文明を健全なる基礎の上に樹たしめる大使命を帶びて居る國は、日本と佛蘭西のみである。

佛蘭西も昔は侵略主義の國であつたが、ナポレオンの一敗後は國是を變て、殆ど全く非侵略的の國となつた。故に世界の經濟競爭に於て退歩した姿のあるのは事實である。十九世紀は資本的侵略の時代である。此時代に非侵略的の佛國が人後に落ちたのは已むを得ない。然し夫れが今は大いによい事になつた。英國の資本的軍國主義に對して武斷的幷に經濟的軍國主義を以て勃興して來た獨逸は崩壞して社會民主國とならんとしつゝある。露西亞も亦社會民主國となつた。然し佛蘭西は假令戰爭に滅茶苦茶に敗れても、獨逸若くは露西亞のやうな革命は來ないと思ふ。獨逸に革命の起つたのは軍國主義、武斷的侵略主義の爲め斗りではない、資本的軍國主義に激勵せられたからである。否武斷的軍國主義は資本的侵略主義の武器たるに過ぎない。然るに佛蘭西には其何れも無い。だから戰爭に敗けても佛國民が社會民主化する形勢は起らないであらう。但し、此點は或は我輩の佛國に對する智識不十分で、判斷を誤つて居るかも知れない。若し然りとす

れば佛蘭西も駄目であるが、今の所では軍國主義の國家でないから、其反動としての社會民主運動の力は微弱である。即ち英米の如き資本的侵略主義の國となる運命は來さうもなく、而して然る以上は社會民主國となることはあるまい。社會民主運動は資本的侵略主義に對する反對毒(antidote)である。毒を以て毒を制するものである。此二つの文明以外に獨特の佛蘭西文明なるものが依然として存して居るのは、世界の爲めに洵に慶ぶべき事である。今迄は英獨の間に挾まれて進出の困難なりし佛蘭西が、嚮後大に活躍すべきは我輩の疑を容れぬ處である。

五

遠く佛蘭西と呼應して、世界の文明を其危殆の中から拯ふべき新しき力を有し、又之れに向つて努力すべき義務を有するのは我日本である。日本は如何なる意味に於ても過去に於ては侵略國ではなかつたし、又現に侵略國ではない。支那に於ける利權の獲得とか西比利亞に於ける利權の獲得とかいふことがあつたが、あれは經濟的侵略主義の發露として見るも多寡が知れて居る。國民の心理としても、國政の方針としても、日本は斷じて侵略國ではない。故に之に對する反動として社會民主々義の國となることは斷じて無いと我輩は確信する。

日本に社會主義は起るであらう。然し夫れを起すべき最も有力なる動機たる、資本的侵略主義は殆どない。故に極めて近い將來に於て有力に起るべき具體的案件が無い。資本的侵略主義にして行はれんか、如何に官憲が言論思想を壓迫し取締を嚴重にしても、其反對毒たる社會民主々義の大に勢力を得べきは必然であつて迚も防ぎようが無いのである。だから社會民主々義の有力に起るを禦ぐ一番効果ある方法は、言論思想の壓迫や取締にあらず、日本が資本的侵略主義を採用せぬ事之れである。此外に途はない。是れは社會民主々義者自らも認める所と信ずる。かの西比利亞出兵とかバイカル奪取とかを主張する愚論家は、自ら識らずして最も有力なる社會民主々義擴張の傳道を爲しつゝあるものであると斷言して憚らない。蓋し危險なる思想家とは彼等愚論家の謂である。

斯く言へばとて我輩は決して我國に富の分配の不公平が無いと云ふのでは無い。又我國に社會問題が無いと云ふのではない。然し社會民主々義は是等ばかりから起るのではない。歐米諸國が常に社會主義に手古摺つて居るのは、畢竟資本的侵略主義の代償として甘受せねばならぬ所以に外ならぬ。英國の如き大資本主義の國では、社會主義さへ起らなければいゝがといふ事にのみ屈託して居る、ロイド・ヂョーヂズムが盛んに行はれて居るのは英國の大いに進歩した證據だが、然し其大部分は資本的侵略主義の生産費と看做すべきである。資本的侵略主義を全く捨てれば、大袈裟にロイド・ヂョーヂズムを行ふことはあるまい。反對に資本的侵略主義を行つて居ては、如何に旺んにヂョーヂズムを施しても偏に足らざるを憂ふるの外は無い。黑岩周六氏の言葉に倣つて言へば、ロイド・ヂョーヂズムは或意味で蛞蝓蛇である。資本的侵略主義といふ蛇を呑んで苦しくて堪らず、ヂョーヂズムといふ蛞蝓を呑んだが、腹具合は依然として宜くならない。結局は社會民主々義と云ふ反對毒を呑む外はないだらう。我輩が曾て河上博士に、もう大抵ロイド・ヂョーヂに興を醒まされたであらうと言つたのも一面此意味を含んで居る。斯う云つたからとて我輩は社會政策が不必要であるといふのでは無い。唯資本的侵略主義をやりつゝ社會政策を行つたつて際限が無いといふ事を力說せんとするのみである。

獨逸の國家社會主義なるものも同じ筆法である。獨逸帝國が出來て極力經濟的侵略主義を行ひ初めたから、其代償として是非盛んに國家社會主義を行ふ必要が起つたのである。故に獨逸に於ける社會政策は最早行詰りに成つたとは十數年來我輩の唱へて居た所である。然るに今度の革命は此問題を一掃した。少くとも今日までの獨逸の社會政策なるものは社會民主國たる獨逸に於ては無意味となつたは疑ふ可からざる所である。

六

今度の勝利でデモクラシー萬歲と云ふ事になり、此大勢に日本も順應して行かなければならぬといふ議論は一應尤もであり、而して他面に於て社會政策（反對毒としてゞない）を大に行はなければならぬことも勿論であるが、然し我々は何よりも先に我々の立

脚地を熟々考へて觀なければならぬ。今度勝たデモクラシーが入つて來るのは困るが、資本的侵略主義の入つて來ることは、更に更に大に危險である。資本的侵略主義が入つて來れば、其の反對毒たる、其代價たる、其生產費たる社會民主々義の大に盛んになることは火を睹るよりも明白な事實である。されば我々は全然新たな立場から、我々の主張する社會政策、我々の主張するデモクラシーの出發點及び到着點を考へ、而して仔細に其內容を吟味しなければならぬのである。

新しい意味のデモクラシーとは即ち言葉の本義の要求する通り、全人民、眞正にデモス全體を包含した所の眞箇のデモクラシーである。此デモクラシーは日本の國本を合理的に解釋すれば確に相合致するものである。英米の資本主義的デモクラシーや獨露の勞働階級のみを認めたソーシャル・デモクラシーではなく、全國民を包含したデモクラシーである。而して夫れは如何なる意味に於ても侵略的であつてはならぬ。武斷的に侵略主義であつてはならぬ斗りでなく、經濟的にもまた侵略的であつてはならぬのである。

日本が如何に侵略主義を執つても夫れは鰐の齒軋りに過ぎない。如何に海軍を擴張しても、到底英米の海軍に拮抗すべくもない。如何に陸軍を充實しても、一度び英米の海軍に封鎖されゝば、獨逸と同一の運命に陷らざるを得ない。大陸續きの獨逸ですら封鎖されては饑餓を免れる事は不可能であつた。況んや我國の如き四面環海の一島國では、如何に軍器糧食を自給自足し得るにしろ、一朝封鎖されゝば手足の出しようがない。だから我國が武斷的侵略主義を取つても全く駄目である。官僚軍閥の徒が如何に苦心努力するとも、其れは出來つこのない相談である。

武斷的侵略主義の起る事は不可能にしても、尙ほ茲に夫れより遙に恐ろしい經濟的侵略主義資本的軍國主義の邪道が横はつて居る。此頃多く發表される戰後の經濟論や戰後の日本國是論を觀るに、軍事上の戰爭は今や漸く其終局を告げたが、嚮後の世界には平和の戰爭が來らんとして居るから我邦も之に應ずる準備をせねばならぬと主張して居る。即ち我邦は嚮後如何にも資本的に武裝した侵略國となる外に途が無いやうに說く者が多

い。我輩は之れを最も大いなる危險思想と思ふのである。日本に於ては社會主義が危險思想となる虞は斷じて無いと吾輩は信ずる。學理に基かぬ社會主義論などは少しも恐るゝに足りない。學理に基いた社會主義なら學理を以て說伏するとが出來る。思想は思想を以て、言論は言論を以てのみ打ち勝ち得べきである。他に之に打ち勝つ武器は無い。近頃田秀次郎氏は日本の國本を危くするデモクラシーは一つもないと言はれたさうであるが、我輩も永田氏の口吻を眞似て、日本の國本を危くする社會主義は一つもないと斷言して憚からない（但し日本が資本的侵略國となれば、社會主義は此侵略國に對しては危險思想となるは勿論である）。之に反して我國本を危くする者は實に資本的侵略主義の傳道である。此資本的侵略主義の傳道こそ如何にも尤もらしい議論で物事を深く考へる習慣の無い人達を捲き込むに極めて都合の好いお爲ごかしの議論であるだけ、それだけ之に伴ふ危險は大きい。況んや此傳道には財力や金力が伴ふ。獨逸などに於て石炭山の所有者が世界に事を起して石炭の賣れ行きを增進させんが爲めに、私かに金を散じて外交上の問題を繁くさせるに努めたと同じく、日本が經濟的侵略主義を執る事は假令不可能であつても、此主義を傳道してさへ居れば資本家は利益を受ける故に彼等は喜んで其の傳道に力でも資本でも人でも供給するだらう。之れ程怖るべき危險はない。

殊に近來成金が跋扈して高い月給を出して官吏の古手や思想の行き詰りになつた學者をどん〳〵買ひ入れる。然るに世間では彼等の立場を區別しないで、相變らずの學者、相變らずの識者と信ずるを好い事にして其肩書を振舞はし、經濟的軍國主義を鼓吹するものが起るかも知れない。否、現にその若干の例を我輩は知つて居る。實に危險恐るべしである。何々博士の戰後經濟論などゝまことしやかに振れ出すと、聞く聽衆は眞面目の學理に基ける議論と思ふが、何ぞ知らん其れは成金の番頭として資本階級の利益を擁護する資本的軍國主義の說法であらうとは。我輩は嚮後機會のある每に斯くの如き危險論の撲滅に力を盡くす心算である。

一事が萬事である。嚮後日本にも經濟的軍國主義、體の好い海賊主義の說法傳道が大に起るかも知れぬ。世界の大勢に對應する前に、我々は先づ斯の如き愚論に對抗して、之が絕滅を圖らなければならぬ。幸に未だ成金が出來たと云つても小規模なもので、之を英米の夫れに比べれば多寡が知れたものである。完全な資本的軍國主義の洗禮を受けるまでに至つて居ない。又日本の政治も悉く之が爲めに毒されて了つたと云ふのではないから、日本は先づ國內に起らんとする資本的軍國主義を驅逐しなければならない。而して夫れと共に世界に向つては、一方資本的侵略主義の橫行に對抗し、他方全人民を包含する大デモクラシーの本源地として遠く佛蘭西文明と呼應して、一部のプロレタリアのみを本位とする社會的デモクラシーに對抗しなければならない。之れ即ち世界文明に貢獻する上に於て、我日本が荷へる最も重大なる使命であると思ふ。

八

斯くの如き大使命を果す爲めには、我々は先づ近頃流行の思想の統一とか、國體擁護とかいふ極めて危險有害なる頑迷思想を排除しなければならぬ。國民が先づ賢くならなければ、折角の大使命も之を果す事は出來ない。國民を健全なる思想の上に置かなければ、到底何事も出來ない。國民を賢くし國民の思想を健全にするには、先づ言論思想の發揚を圖らなければならない。それには完全に言論思想の自由を保障しなければならない。政府當局者が露獨の過激思想の流入を禦ぐと稱して、言論思想に壓迫を加へたならば、却て恐るべき危險を促進する結果となる外は無い。言論は言論を以て、思想は思想を以て戰ふべし。資本的軍國主義を退治すると云ふのは、政治的手段に據つて之を爲すの謂ではない。飽くまで言論思想の力に據つて撲滅すべきである。

健全なる思想健全なる言論を保障する爲めには、言論者に精神上並びに物質上の自由安全を確保せねばならぬ。例へば大學教授の身分の保障、其待遇を好くする如きは、此點から考へて單なる物質的の問題でなく、日本の使命を實現する上に重大なる意義のある事である。有識者、學者が續々相率ゐて成金の番頭手代となるのは最も恐るべき事で

ある。資本的侵略主義の大小の傳道者を人爲的に作り出すのを防ぐには、大學教授を始め言論思想の指導者たるもの丶地位身分を保障するのが第一に必要である。

九

然し日本がこの光榮ある大使命を果すのには獨力では出來ない。我等の信ずる處に據ると、世界の文明を其危機から救ひ得るものは世界列國の中で日本の外には唯佛蘭西あるのみ。我國は一方國內に於て大に言論思想の自由安全を確保すると同時に、他方佛蘭西と呼應して共に人類文明の爲に盡くさなければならぬ。世界文明の健全なる發展を希望する上から云つて、今後佛蘭西の學問が我國に大に勃興するのは極めて必要である。獨逸の今日までの學問は著るしく經濟的帝國主義、侵略的世界政策の影響を受けて居た。獨逸の哲學がさうである。社會學がさうである。政治學がさうである。就中我輩の專門とする經濟學に至つては其影響が最も甚だしい。今は或意味で獨逸の經濟學の破產時代である。所謂經濟階段を巧妙に辿へて帝國に統一した國民經濟組織を、經濟生活發展の當然の歸結とした獨逸の經濟學は、畢竟海賊主義に對抗する獨逸の帝國的陸賊主義を一面に於て辯護する有力な學說であつた。夫れが今破產した。我々は或意味で賴るべき師を失つた譯である。今後は獨力に日本の特別の使命を考へた學問を建設しなければならぬ。唯順應する計りではいけない。今後大に勃興すべき佛蘭西の學問と密接な關係を有つて、日本の立場から對應して行かねばならぬ。是れ吾輩が世界に於ける日本の使命なりと信ずる所である。

第三篇　改造途上の世界經濟

——戰時及戰後の經濟問題——

一　英國中心の世界經濟と其改造
二　金の經濟と物の經濟
三　戰時經濟の一福音
四　戰後の經濟界に於て眞に恐る可きは何
五　意氣地なき戰後經濟論を排す
六　戰後世界經濟當面の大問題

一　英國中心の世界經濟と其改造

——大正六年五月稿同八月信州伊那教育會講演速記——

一　英國を中心とせる世界の貨幣經濟

此度の大戰爭を中心として其前後に於ける世界經濟の有樣を述ぶるが本論の趣意である。戰前の世界經濟は英國を中心として成立つて居た。英國は其偉大なる資本の力を以て世界の經濟を支配して居た。而して世界經濟の動源は英國の資本市場に在つた。故に話は先づ英國と其金融市場のことから始めねばならぬ。

英吉利の金融市場とは、倫敦に於けるロムバード・ストリートを謂ふのである、此處が銀行業及び商業取引の中心となつて居る。從つて英吉利の金融市場を代表して居り同時に又世界の總勘定を掌つて居るのである。金を拂ふにしても、ロムバード街へ持て行つて拂へば、何時でも一番安く、一番安全に、一番便利に、一番確かに拂ふことが出來、

又受取るにしても、此處で受取るのが一番便利で、一番安全で、一番早い。早い話が、日本で南米の或る國から品物を買つても、其の代金は直接に南米の某國へ送るのではなく、倫敦に送つて倫敦で拂ふ。又南米の某國も倫敦で受取る。其の方が何方に取つても便利であつて、且つ安全であるからである。勿論それは爲替の作用に依るのである。

品物の代金の受拂のみならず、總ての爲替は倫敦に宛てゝ取組むことになつて居る。例へば印度に金を送らうと云ふ場合に、直接に印度に向つて爲替を取組むより、英吉利に爲替を取組んで送つた方が安く行く場合が屢らもある。現に戰爭前までは、日本から米國に送金するのに、大抵紐育宛の爲替を組んで居つたのであるが、戰爭が始まつてから暫くの間は、倫敦宛の爲替を組んだ、さうして其の倫敦宛の爲替は、之を英國に送るのではなく、やはり米國に送るのである。米國の人は、其の爲替を貰つても、現金は倫敦でなければ取れない、けれども亞米利加の方には、他に倫敦に送るべき金があるから、それと差引をする。それを爲替の裁定と名ける。殊に日本と亞米利加との爲替相場はどうして立つかと云ふと、倫敦相場を標準にして立てるのであつて、日米間丈けの關係のみで相場が立つのではない。倫敦と亞米利加との間の爲替相場が幾ら、日本と倫敦との爲替相場が幾らと云ふことを見て、日本と亞米利加との相場が何程と定まるのである。

非常に經濟の發達して居る亞米利加でさへさうであるから、其の他の國に於ては、外國に對する爲替は皆倫敦宛にして取組むことになつて居る。例へて言へば伊那の町から同じ信州の長野市に物を送るに、直接に長野へ送らずに、先づ東京へ送つて、東京から長野へ送つて貰つた方が早くて安く行くと云ふやうな有樣になつて居るのである。

倫敦は經濟上實に世界交通の焦點に當つて居るので、他の國に行くには海もあれば山もあり、種々の障碍があるのであるが、倫敦に向つては世界各國から立派な道が付いて居つて、汽車も行けば自働車も行く、天下の大道は悉く倫敦に集つて居る樣なものである。倫敦に行けば何處へ行くのにも極めて便利で、又安全である。これ倫敦のロムバード街を中心として世界の經濟生活が營まれて行く所以である。馬鹿々々しいではない

か、そんな遠廻りをするよりも、直接に交通した方が宜からうと云ふ考が起るであらうが、決してさうでない。倫敦を經て行く方が遙かに便利であるのである、日本が濠洲から羊の毛を買ふにも、其の注文は倫敦に向つて發する、又代金も倫敦で拂ふ。實際の品物は濠洲から神戸なり横濱なりへ運んで來るが、取引の關係は倫敦に於て行はれる。所が物に依ると現品の取引も倫敦でする方が便利のこともある。例へば日本の銅を歐羅巴に賣るには、先づ倫敦の商店に賣込む。さうして積出先も大抵倫敦にし、先方からの電報に依て積出すやうにして置く、詰り倫敦の商人に賣つたことになつて居るのである。それを買ふ方は露西亞で日本の足尾の銅を買はうと云ふ場合にも、日本の古河へ直接に注文して來ないで、倫敦の銅を取扱ふ商店に向つて注文する。倫敦の商店では、日本に向つて、此の間買つた銅は露西亞のペトログラードに送れと言つて電報を打つて寄越す。或は亞利米加から注文があれば、亞利米加へ送れと言つて電報を發する。日本に在つても品物は先方のものであるから、先方の命令次第何處へでも送らなければならぬ。積出す日までは先方が選擇の自由を有つて居る。（之を「オプション」と名くる）。横濱に於て倫敦の商店に賣つたと云ふものゝ、其の銅は亞利米加へ行くかも知れない、獨逸に向けられるかも知れない。其の決定は誰れがするかと云ふと、日本人がするのではなく、倫敦に於ける英吉利の商人がするのである。英吉利の商人と云ふが、それは實は倫敦に居る獨逸商人である。銅の賣買に就ては獨逸商人が殆ど全權を握つて居る。であるから開戰當時獨逸の商人が英國を引揚げてしまつた時には、一時銅の取引が出來なかつたと云ふ。英吉利の商人が、急に其の眞似をしやうと思つたが出來ない。今日では出來るやうになつたが、當時は出來なかつた。それが爲め一時銅の價が下つた。兎に角さう云ふやうに品物の取引も倫敦で行はれるものが多い。それから又世界中の船の出入、船賃と云ふやうなものも倫敦で極まるのであつて、他の國では分らぬ。保險料もさうである。世界中の保險料は倫敦のロイドで決定する。ロイドで認められない船には何處でも保險を附けない。日本の船でも何でも、ロイドで等級を附し、一番安全な船は保險料も安く、怪し

い船は高い。全く惡いのには保險を附けない。斯くの如くになつて居る、但し何れも大體のことを言ふので一々に就て取除の場合はいくらもあることは言ふまでもない。

さう云ふ風に商品の取引、又其の代金の受拂と云ふことは倫敦が世界の中心となつて居るのであるが、其の外倫敦には世界中の金を借りたい人、貸したい人が集つて居るから、倫敦へ行けば、何時でも一番便利に、又どんなに澤山でも自分の欲するだけの借金をすることが出來る。他の所ではそれが出來ない。紐育でさへも、何時でも必ず欲するだけの借金が出來るとは言へない。倫敦へ行けば、相當な條件が具はつて居りさへすれば何時でも、どんな大金でも借りることが出來る。同時に又金を貸さうと云ふ者も、倫敦へ行けば、一番安全に、どんなに澤山の金でも貸付けることが出來る。それと云ふものは倫敦では何時でも金が得られる、何千萬圓でも何億萬圓でも得られる。又其の反對に倫敦へ行けば金が何時でも賣れる、さうして倫敦で賣る相場が一番好い。だから纏まつた金を賣らう買はうとするには、倫敦に行かなければならぬ。金は銀とか銅とか鐵とか云ふものと違つて貨幣になるものであるから、金が得られると云ふことは、詰り貨幣が得られると云ふことである。

そこで歐羅巴諸國も、歐羅巴以外の國も、皆倫敦を中心として經濟を立て、成べく倫敦で通りの好いやう、倫敦でやつて居るのと一致するやうにと、其經濟上、商業上の仕組を立てゝ置く。自分の國の都合から言へば、斯うした方が宜いと思つても、倫敦へ行つて通りが惡いと云ふことであれば、自國の便利は第二として、倫敦へ行つて通りの好いやうにする。倫敦へ行つて商賣をし、倫敦へ行つて金の貸借をし、金の受拂をするのに、どうすれば一番通りが好いかと云ふと、倫敦で受取つて呉れる金が自國の金であると云ふことが一番宜い。倫敦で受取る金は金貨である。英國は金貨本位の國であるから、倫敦に行つて商賣をしやう、經濟上の關係を整理しやうと云ふ國は、自國の都合は第二として、金貨本位制にならなければならぬ。世界の各國が段々金貨本位を採用し、金貨本位國となつたのは、金貨本位が自國の爲に都合が好いからではない、否金貨本位にす

ることを必要としない國に於いても、英國との關係を便利にする上から、金貨本位國となつて居る國が幾らもある。例へば日本は金貨本位國である。日本が金貨本位の制度を採用したのは、表面の理由としては、倫敦へ行つて商賣をしたり借金をするのに都合が好いからと云ふやうなとは誰れも言ひはしない。大藏大臣が議會に於て說明するにも、そんなことを言ひはしない。他に理由を求めて、日本も段々富の程度が高まつたからとか何とか彼とか色々の理由を言立てたのであるが、それは無理にコヂ付けた理由で、實は日本も段々世界の經濟の仲間に入り、英米其の他の諸國と取引が行はれるやうになつたので、乃ち倫敦を中心として國の經濟を立てなければならぬと云ふことになつたからである。若し日本の必要から金貨本位になつたものならば、日本國內に金貨が流通して居るべき筈であるが、實際に於ては少しも金貨が流通して居らない。恐らく諸君も金貨を手にせらるゝ機會は餘り度々はなからうと思ふ。私などは金貨を見たことは殆んど無い。態々日本銀行へ行つて兌換して持て來れば格別であるが、さうでない限りは金貨を見る機會は全く無い。又見なくとも差支ない。と云ふものは吾々は實際の生活に於て金貨などには必要がない、必要がないどころではなく、却つて厄介である。吾々は平生兌換券と補助貨だけで何の不自由もなく用を達して居る、金貨を持つ必要はない、從つて金貨が國內に流通して居らないのである。日本でさへさうである、印度の如きは金貨本位にする必要はない、支那にしても同樣、比律賓などに於ては尙更其の必要がない。印度の如きは、自國には金が無い、自國で金を使つては居らないで、外國に對して金貨本位、隨分變なことをやつて居る。此れ皆英國との附合上採用したのである。所が平時には其の變なことでやつて居つたが、今度の戰爭で其の變なことが出來なくなつて、先頃の新聞にもあつたやうに、印度證券賣出の制限と云ふことになり、之が爲に印度と貿易をして居つた商人、殊に棉花を輸入して居つた商人や紡績會社では非常に苦んだ。我邦で使用する棉花は何處から來るかと云ふと、主に印度と亞米利加から來たのである。所が印度證券賣出制限の爲に、印度へ金が送れなくなつた。金が送れないから代が拂へ

ない、代が拂へないから棉花を買つて來ることが出來ない。それは金がないのではなく、代金を拂ふ方法が無くなつたからである。それなら金貨を持て行けば宜いであらうが、英吉利の方で金を持て來てはならぬと言ふ。印度人に金の味を覺えさせては困るから、金を持て來てはならぬと言ふ。それが爲に印度から綿を買つて來ることが出來ないで、一時非常に苦しんだ。

なぜ英國との附合上金貨本位にしなければならぬかと云ふと、例へば銀貨を以て本位として居ると、金と銀とは常に同じ比價を有つて居るものではない、今日は金一匁を以て銀三十六匁を買ひ得ると云ふ相場であつても、明日は三十六匁半になるかも分らぬ、或は三十五匁になるかも分らぬ。金と銀との間の比價は斷えず變動がある。從つて爲替相場が絶へず變動する。今英吉利へ金を送らうと云ふのに、日本の一圓は二志〇片十六分の一と云ふことであれば、其の割合で金を送れば宜いのである。所が若し日本が銀貨本位國であつたとすると、銀の相場は始終變動するから、今日二志〇片十六分の一の割合で銀を拂込んだものが、英吉利で拂渡す時には銀が高くなつて二志一片十六分の一になつたとすると、英吉利ではそれだけ餘計に金を拂はなければならぬ。買つた品物でも、拂ふ金の高が時に依て違ふ。それでは商賣がやり憎くなる。物の賣買の心配の外に、爲替相場の變動の危險が伴ふ爲に、どうも商賣が圓滑に行はれない。之に反して英吉利も金貨本位、日本も金貨本位であれば、爲替の需要供給の關係で、多少の差はあるけれども、金と銀との間に於ける程の變動は起らぬ。極く僅かの相違である。故に其の方が貿易の上に便利であるから、海外貿易に就ては各國皆英吉利と同じく金貨本位の制度を採るようになつたのである。

斯の如くに戰爭の始まる前までは、世界の各國が、外國との取引をしやうと云ふには、何れも英吉利と同樣に金貨本位の國になり、倫敦を中心として、總てロムバード街の御厄介になつて居つた。今の世界は全く金の世の中で、金がなければ何事も出來ぬ。戰爭をするのにも、第一には金が必要で、金が無ければ戰は出來ない。總のものは金の價で

處理しなければならぬ。

所が金の價で處理すると云ふことは、實際現金を以て授受するのではない。殊に英吉利の發達したる金融市場に於ては、現金の遣り取りと云ふものは極く少い。何十萬磅、何百萬磅と云ふやうな金を實際に動かすと云ふことは極めて稀れであつて、唯々勘定だけで決濟し、現金を遣り取りするのは其の勘定尻だけである。即ち日本なら日本で外國に品物を賣つて、其の受取るべき代金と、日本が外國から品物を買取つて、其の支拂ふべき代金とは、現金で受取つたり、現金で支拂つたりするのではなく、爲替で決濟してしまふ。それを稱して信用と謂ふ。信用で總ての取引を行ひ、さうして餘つた金額だけを現金で渡す。だから現金で遣り取りすることは、餘り立派の商賣ではない。個人でも信用の無いものは現金で取引するが、信用のある者は現金の取引は極く僅かである。國と國との間の經濟上の關係と云ふものは、名義上は金錢を以て勘定して居るけれども、其の實は物と物との遣り取りである。物を遣つて物を取り、其の差額だけを金錢で拂つたり受取つたりして居る。而して其の總勘定をする所は何處かと云ふと、倫敦のロムバード街である。日本で品物を賣る國は世界中に澤山ある、又買ふ所の國も澤山ある。けれども其等の國と一々代金の受拂をするのではなく、倫敦で決濟するとになつて居る。併し日本から輸出した品物の價と、日本へ輸入した品物の價とが、さうキチンと出合ふものでないから、其の差額だけを現金で遣つたり取つたりする。輸出した品物の代價が少くて輸入した代價が多かつた時には、其の不足しただけの金を日本から倫敦に持て行く。其の反對に近頃のやうに賣つた代價の方が多くて、輸入が少い時には、差引超過しただけの金を受取る。其の受取つた金は勿論日本のものであるから、持て來やうとすれば持て來ることも出來るが、其儘倫敦に置くこともある。それが所謂在外正貨である。

二　國際貿易の原理

諸君が近頃の新聞を見ると、日本の在外正貨が非常に殖えた、何億になつたと云ふやうなことが書いてある。それは詰り日本が差引して受取つた金である。而して其何億圓

の日本の在外正貨の大部分は無論倫敦にあるが、少しは巴里にもある、紐育にもある。近頃は段々紐育の方に餘計置くやうにして居ると云ふことである。それは戰爭の爲に倫敦に置くことは不安になつて來たから、比較的安全な紐育に持て行つたのである。それでもまだ大部分は倫敦に置いてある。又其の一部分は日本へ持て來たのもある。其の結果日本銀行の金庫にある在内金貨も大部殖えた。それは何によるかと云ふと、日本が買つた物の價よりも賣つた物の價の方が多かつたからである。それを名けて輸出超過と謂ふ。品物の輸出が輸入より多いのが輸出超過、其の反對に輸入が輸出より多ければ輸入超過となる。

輸出が殖えたと云ふには、二つの意味がある。其の一は賣つた品物の分量が實際に殖えたと云ふことである。例へば生絲に就て言ふならば、昨年十萬梱賣れたものが、今年は十五萬梱賣れたと云ふやうなものである。第二は賣上金高の殖えたと云ふことである。賣上金高の殖えたと云ふのは、金錢で言現はす所の代價が殖えたと云ふことである。

例へば三年前の生絲の代價と今日の代價と比べると、今日は非常に上つて居る、それ故實際賣つた分量は同じく十萬梱であつても賣上金高は多くなる。品物を餘計に賣つて居るのではないが、代價が高くなつた爲に、賣上金高は殖えたことになるのである。

併ながら賣つた物の値が上ると共に、買つた物の値も上ると云ふのであると、それは唯だ呼高が殖えただけである、帳面づらが殖えただけで、國の富が殖えたのではない。併し呼値だけの殖方でも、買ふ物の方の呼値は少しも高くならないか、或は高くなつても左程高くならないのに、賣る方の物の價が大變高くなつて居れば、やはり本當の利益になる。何となれば勘定する上に於て、賣上高が多くなるから、結局それだけの金を貰ふから、即ち金貨が殖えるのである。

そこで戰爭の前までは、歐羅巴の諸國、亞米利加、日本と云ふやうな、世界の文明諸國の大多數に就て見ると、賣る物の方が多くて、買ふ物の方が少いのが當り前である。即ち輸出超過の方が當り前である。若しさうでなければ、それは甚だ憂ふべき狀態であ

ると云ふことになつて居つた。それ故に政府を初め其の道々の人は、輸入超過の傾向が現はれて來ると、國民に對して注意を與へる。反對に輸出が多くなつて來ると、順調である、結構のことであると言つて喜んで居た。併し如何なる場合と雖も、輸出超過であるさへすれば、必ず宜いとのみは言へない。

斯く歐羅巴の諸國や、亞米利加合衆國、日本と云ふやうな國は、輸出超過を以て常態として居るが、其の正反對に輸入超過を以て常態として居る國が二つある。毎年々々賣る物よりも買ふ方の多い國が二つあつた。それは即ち英吉利と獨逸とである。

輸出超過を以て常態とし、賣る方が多くて買ふ方が少いのを喜んで居る國は、世界經濟の上から言へば借金國である。何か知ら借金をして居る。其の借金は政府の公債もあらうし、民間の借入金もあらう。又借金と云ふ名の付いて居らぬ借金もある。それは何かと云ふと、外國の資本が國内の事業に向つて投ぜられて居るので、國から見るとそれも一種の借金である。借金をして居れば、年々利子を拂はなければならぬ、又期限が來れば元金も返さなければならぬ。故に借金國に於ては、買ふ物より賣る物の方が多くなければいけぬ。其反對に英吉利と獨逸とは貸金國である。外國に金を貸して居るから、年々利息が入つて來る、又元金の償還もあるから買ふ物が多くても國内の富は減らない。

第二に賣る方の多い國は、國の外に於て人の爲に働いて、其の代價を得ることが甚だ少いか、若くは全く無い國である。反對に英吉利や獨逸の如き國は、國内に於てのみならず、國外に於ても大變稼ぐ。其の稼ぐ主なるものは船の運賃及び保險料である。英吉利及獨逸の船は、自國に發着するものばかりでなく、外國間に航海して、外國の貨物を運搬し、其の運賃を取り、又保險業を營んで、保險料を取る。是等の收入は直接に金で入つて來なくとも、何時か知ら何かの形に於て入つて來る。其の外に貸金の元利金、外國の事業に投資して居れば、其の利益の配當金と云ふやうなものが入つて來る。それも正貨で入つて來るのでなく、多くは色々の形の品物で入つて來るのである。所が他の國は英國や獨逸の船に依て運んで貰ふから、運賃を拂はなければならぬ、又保險料も拂は

なければならぬ。尙借金に對する元利金も拂はなければならぬ。それらのものは色々の品物を輸出して、それで拂ふ。若し品物だけでは足らない場合には、其の不足額は倫敦に於て金貨を拂はなければならぬ。それが即ち借金國は輸出超過を以て常態とし、貸金國は輸入超過を以て常態とする所以である。

であるから日本で苦心して生絲を造つて輸出する、或は樟腦を輸出する、銅を輸出する、美術工藝品を輸出すると云ふやうに、盛に輸出を圖つて居るが、其輸出した物は、日本が外國から買つた物の代價として拂ふ外に、借金の利息にも、船の運賃にも、保險料にもなつて居る。日本の人は、骨折つて生絲を拵へ、それを織物にして自分で着る代りに、自分は安い木綿を着て、高い生絲を輸出し、借金の利子を拂ひ、運賃を拂ひ、買つた品物の代として拂つて居る。勿論何を賣つた代が何に當ると云ふやうなことにはなつて居らない、日本から輸出した物の總額が日本が拂ふべき總額に當つて居るのである。所が英吉利や獨逸は外國から取るものが多いから、遣る品物は少くて濟む。例へば英吉利が十億磅に當る品物を外國に出しさへすれば、それに對して十六億磅に當る品物が入つて來て丁度勘定が出合ふとすれば、差引六億磅だけの品物が餘計に英吉利に入つたことになるから、それだけ英吉利の富が殖えた譯である。其の中には原料品として、精製の上再び外國に賣行くものもあらう、或は煙草であるとか、砂糖であるとか云ふやうな消耗品もあらう、又中には全く無駄な贅澤品もあらうが、兎に角其の大部分は英吉利人の富となつて居るのである。反對に日本や亞米利加の如く輸出が超過して居る國、或は超過しなければならなかつた國は、外國から買ふ物が二億圓、外國へ賣る物が二億六千萬圓、差引六千萬圓だけ多くのものを出さなければ勘定が出合はないと云ふことで、其の六千萬圓と云ふものは、餘計に外國へ遣る譯である。自分で着るべき衣物も着ないで、外國の人の用に供して居るのである。

其の點から言ふと、國內の生產品が無暗に海外に出ると云ふことは、餘り褒めた話ではない。尤も國內に於て十分に使用し、其の餘剩を出すと云ふならば宜いが、國內に於

ては使ひたいが使はずに、皆外國に出してしまふと云ふことは洵に馬鹿々々しい事である。例へば折角母親が牡丹餅を拵へたが、自分も食はず子供にも食べさせずして、皆隣りの家へ持て行つて、其で輸出が超過したと言つて喜んで居るやうなものであるから、甚だ馬鹿々々しい。出來ることなら日本で作つた品物は、日本で皆使つた方が宜いやうに考へられる。けれども是までの日本では、成べく多くの品物が出るのが宜いとしてあつた。其は何故かと云ふと、出るのが宜い譯ではない。若し出ないでも勘定が立てば、成べく外國に出ない方が宜い。日本で出來た品物は、出來るだけ多く日本人に使はせたい、日本で出來た米は全部日本で食べ、日本で出來た生絲は皆織物にして日本人に着せたい。現に德川時代にはそれでやつて居つた。然し斯くすれば其の代りにそれよりも必要な役に立つ外國の品物を買つて來ることが出來ない。お母さんが骨を折つて拵へた牡丹餅を子供にも食はせずして隣りの家へ遣つてしまつたと云ふのは、牡丹餅を隣りへ遣れば、其の代りに三度の御飯が滿足に食べられる、子供も學校へ行ける、書物も買ふことが出來る、遣らなければ三度の飯も食べられぬ、學校へも行かれないから、牡丹餅は食べたいが我慢して隣りの家へ遣つてしまふやうなもので、日本は生絲を西洋へ遣りたくはない、日本の米を外國に出したくはない、けれどもそれも外國に出すと云ふとは、それよりも必要な品、役に立つ品が外國から買へるから其の代價として出すのである。吾々一個人から云つても、貰つた月給は成べく使ひたくない、出來ることなら其の儘郵便局へ持て行つて預けて置きたい、けれどもさうしたのでは食べて行くことが出來ないから、少しも使はずに溜めて置く譯には行かぬ。唯成べく必要なものを買つて、無駄な費を省くことを心掛けるまでのことである。國が輸出をしたり輸入をしたりするのも、それと同樣で、輸出するものよりも、自國に取つて多く價値のある物を輸入しやうと云ふのである。國内で使つてしまへば、吾々の得る利益は少しかないが、それを外國へ賣つて、其の代りに他の物を買へば十五の物が得られるから輸出するのである。であるから輸出ばかりして、輸入を少しもしないと云ふ國があつたら、其程馬鹿氣たことはない。

輸出するのは輸入したいからであつて、輸入するのは輸出したいからではない。であるから日本で生絲を拵へて、それが外國へ出て行くことが宜いのではない。其の代りとして生絲よりもつと吾々の役に立つ物が外國から日本に入つて來るから、それで生絲の賣れることが宜いのである。唯々日本の生絲が外國へ出て行くだけであつたならば、非常な損である。其の事を學問の上では簡單に『國際貿易は輸入の利益の爲に行はるゝものなり』と云つて居る。即ち輸出は一の犧牲と看做す可きものである。

此點は極めて明瞭のことであるにも拘はらず、どうも日本の人に能く分つて居ない、殊に外國貿易だの、外國爲替の事務に當つて居る人程却つて分つて居らない。反對に判斷して居る。輸入が無くなつて、輸出ばかりになつたら大變結構だと――さうまでも言はないが、さう云ふ考で論を立てゝ居る人がある。輸入は出來るだけ之を阻止し、或は絶無を期し、輸出は多々益々增加することを望むと云ふやうに言つて居る。又同じ貿易商でも、輸出商であると云ふと、大變人から歡迎せられ、輸入商だと云ふと、左程歡迎されないやうであるが、本來はさう云ふものではない。各種の機械、器具、鐵材、染料、其の他日本で出來ない物、出來るとしても完全でない、或は價が非常に高いと云ふやうなものを、外國から割合に安く買つて來ると云ふことになれば、それは洵に結構であるが、現今の如く日本の物はどし〳〵買つて行くが、日本に必要なものは何も禁止、彼も禁止で輸出を止めて居るのは、日本に取つては甚だ迷惑の話である。

戰爭の始まつて以來、歐洲の諸國は、必要な品物を盛んに買込み、金は拂つて呉れるが（但し露國は拂つて呉れぬ將來も拂へるか如何か甚だ怪しい）、此方で必要な物は一向賣つて呉れぬ。染料も來なくなれば、鐵類も來なくなる、棉花も來ない、鉛筆も、紙も、乃至は濠洲から來た羊毛までも日本には賣つて呉れない。日本人が粒々辛苦して拵へたものは、どし〳〵買つて行つて使つて居るが、此方には何も寄越さない、唯々金で拂ふだけである。であるから此の狀態で三年も五年も繼續すれば、成程日本の輸出をして居る人は金持になる、日本の在外正貨、或は國內の正貨は殖えるだらうけれども、品物は

殖えない、却つて減る一方である。成程日本の正貨準備も非常に殖え、在外正貨も著しく增加し、日本全體としては金は大變に出來たが、然らば其の金と云ふものは何か、金と云ふものは食べ物でも、飲み物でも、着る物でもない。それだから如何に金銀を貪つても、金銀は飢ゑた時に握飯一個の役にも立たない、渴いた時に水一杯の用をもなさない、萬金を積んでも凍えた時に布子一枚の代用をもしない。金を指環にしたり、腕環にしたり、其の他種々の裝飾に用ゐては居るが、それは金の用途の極く一部分であつて、全部ではない。日本が金持になつて結構だと言ふのは如何なる意味かと云ふと、詰り是が又他の品物と換へることが出來るからである。今日本の所有して居る正貨が十億近くあると云ふことであるが、其の十億に近い金が何も貴い譯ではない。それを金の延棒にして竝べて置いても、それで人が偉くなる譯でもなければ腹が膨れる譯でもない。唯だ之を以て必要なる品物、役に立つ物品に何時でも換へることが出來るから貴いのである。だから結局金の殖えるのが宜いのではない、物の殖えるのが宜いのである。

三　金の經濟と物の經濟。輸出入貿易と在外正貨

吾々の經濟生活は、物を殖やし、物を豐にするにあるが、その物を殖やし、物を豐にするの道行として、先づ金を殖やさねばならぬと云ふのが、今日の經濟生活の特色である。あの人は近頃金持になつた、十萬圓も金を拵へたさうだなどゝ噂をすることがある。所が其の十萬圓と云ふのは、何も十萬圓の現金が積んである譯ではなく、或は田畑であるとか、建物であるとか、品物であるとか、權利であるとか、色々の形になつて居る、それを金の價に見積ると十萬圓であると云ふのを、手取早く十萬圓拵へたさうだと言ふのである。それは金と云ふものは、如何なる品物とも換へることが出來るもので、一億圓あれば一億圓だけの品物が得られ、十億圓あれば十億圓だけの品物が得られる、それが貴いのであつて、金其ものが貴いのではない。今度日本に十億の正貨が出來て有難いと云ふのは、十億の正貨が有難いのではない、十億に當る品物と何時でも換へられる金が殖えたから有難いのである。結局は品物の殖えるのでなければいけない。であるから

外國貿易は、今は戰爭中で大變模樣が變つて居ると云ふけれども、實際に於て輸入は常に輸出より多くなければ損をして居るのである。即ち戰爭前の英吉利や獨逸のやうな有樣でなければいけないのである。日本や戰前の亞米利加のやうに輸出超過を喜んで居つたやうな狀態は、決して滿足な發達をして居るとは言へない。

併ながら外國から金の入つて來る見込もないのに、一足飛に英吉利や獨逸のやうに輸入ばかり超過することは尙更危險である。日本の今日の經濟に於ては、まだ輸入が餘計あると云ふことは宜しくない。なぜ宜しくないかと云ふと、日本に輸入が餘計殖えると云ふことは、詰り借金が殖えると云ふことになる。拂ふべき代價物無くして、拂ふべき高が多いのであるから、詰り借になる。お母さんが拵へた牡丹餅を、隣りに持て行かずに皆自分の家で食べてしまひ、それから米や着物は餘所から買つて來る、即ち輸入超過である。之に對して拂ふべき金が無ければ、それだけのものは借になつて居るから、何時かは返さなければならぬ。故に是は輸入超過がいけないのでなくして借金になるからいけないのである。英吉利や獨逸の輸入超過は、外國から入つて來る可き筋道の金があつて輸入が超過するのであるから宜いのである。自分は何をしなくとも、世界の各方面に金を貸したことになつて居る。或は貸金の利子もあらうし、元金もあらう、其の他運賃とか、保險料とか、色々取るべき金がある。それが現金でなく、種々の品物となつて、亞米利加からも、支那からも、日本からも濠洲からも輸入せられるのであるから、輸入が超過しても借金とはならないのである。

であるから輸入超過には極く宜いのと、極く惡いのと二種ある譯である。中途半端の輸入超過と云ふものはない。日本の如きは輸入超過は今でもいけない。英吉利や獨逸は輸入の超過は宜いのである。日本で輸入超過になると、超過しただけは借になるから、何時か返さなければならぬ。所が英吉利や獨逸は、返す必要がない。取り放しだから、是は無論輸入の超過した方が宜い。其の反對に輸出の超過するのが宜いと云ふのは、輸出がどん〳〵超過すれば、借金のあつた國は借金が減るし、それが尙進む

と、今度は貸方になる。さうなれば洵に結構である。今日の日本の狀態は恰度それである。生絲を製し、銅を掘り、樟腦を取つて盛に外國に賣出す。之に對して外國から買つて來ることは出來ないから、金がウンと殖えた。此の金は貸付金に換へやうと思へば、何時でも換へられる。今の所日本に必要な現品には換へることが出來ない。だから九億も十億も金が出來たと言つても何にもならない。砂漠の眞中では、どんなに澤山の金を持て居つても役に立たない、却つて持て居るだけ邪魔になる位のものである。

併し今日日本の持て居る金は、品物にはならないが、貸付金にして置くとは出來る。そして戰爭の濟んだ後には無論品物に換へることも出來やうし、貸して置けば利息も取れる。又斯う云ふ勢で今後尙進んで行つたならば、今までの借金は返してしまつて、貸金國となり、戰爭前の英吉利や獨逸と同じになれるかも知れぬが、まだ輸入が超過してはならぬ。今の所では品物が益々輸出され、品物の價が益々高くなつて、成金の續々出て來る方が宜い。日本で成金と云ふと、大變卑しい者のやうに思ふが、外國との商賣に依る成金は、詰り世界の表に於てそれだけ日本の富を殖やして居るのである。金が出來た爲に、今まで借金國であつた日本が、反對に貸金國にならうとして居る。現に日本は大分借金を減らした。佛貨公債も償還し、英吉利にも金を貸付け、露西亞の大藏省證券をも引受けた。それは政府がやつた仕事であるけれども、日本國と云ふ上から見れば、政府のした事であらうが、民間でした事であらうが同じである。だから吾々が露西亞の大藏省證券の募りに應ずれば、露國に對する日本の貸付金が殖えることになる。近頃大變に殖えたと云ふ在外正貨も、品物にはならないが、貸金には換へられる。ナニ換へられるぢやない、換へなくとも既に貸金になつて居る。之を貸金にしやうと思へば、其の儘にして置けば宜い。と云ふのは日本の在外正貨と言つても、それだけの金塊が倫敦に積んである譯ではない。在外正貨と云ふから、一寸考へると倫敦なり、紐育なり、巴里なりに、それだけの現金があるやうに考られる。一寸ではない篤と考へてもさうでなくてはならぬ。所が日本の在外正貨と云ふものは、それだけの正貨が積んである譯では

なく、正貨に代るべきものがある、正貨代用のものがあるのである。それに強て名を付けると在外債權とも謂ふべきである。それを日露戰爭中に在外正貨と名けたのである。其の當時は實際無理がなかつたのであつて、日本の金貨は非常に減つて來て、日本の金貨本位は危くなつて來た。そこで據ろなく英吉利から金を借りた、其の借りたのは現金を借りたのではなく、唯だ權利を借りたのである。權利を借りて、それを正貨と看做して、日本銀行の兌換準備とした。だから是は無論兌換銀行券條例違反である。違反であるが、今でもそれをやつて居る。日本銀行の兌換銀行券と云ふものは、一億二千萬圓までは保證準備で宜い、即ち現金を積んで置かなくとも、商業手形を積んで置きさへすれば宜い、それ以上は兌換券一圓に對して一圓、二圓に對して二圓、即ち同額の金貨を日本銀行の本店なり支店なりの金庫の中に現存しなければならぬことになつて居る。所が實際はさうでない。此の頃は大分割合が殖えたが、それでも三分の二には達しない、半分少し餘あるだけで、半分より少し少いだけのものは日本銀行の金庫の中には入つて居らぬ。けれども正貨が無いと云ふことになると、正貨準備と云ふものが無くなるから、外國から金を借りて準備とした。所がそれは日本にあるのでないから、在外正貨と言つた。正貨と言つても、それだけの現金が積んである譯ではなく、色々の形の債權になつて居るのである。と云ふものは何億圓かに當る金を、唯だ積んで置くことは馬鹿らしい、又今日は各國とも大騷ぎをして、金を集めやう集めやうとして居る所であるから、迚も實際にありはしない。そこで日本が取らうと思へば取れる權利があると云ふことにしてある。其の大部分は英國の中央銀行即ち英蘭銀行に預金になつて居る。又或る部分はコールローンになつて居る。此のコールローンは、平時の倫敦ならば、呼べば無論來るに極まつて居る、けれども今はそれが餘り巧く行つて居らぬやうであるから、是は餘程考へものである。兎に角コールローンにもなつて居る。併しそれが幾らあるかと云ふことは、日本銀行も政府も發表しないから分らぬ。秘密にする必要もないのであるから、公表したら宜さうなものであるのに、公表せぬ。ツイ此の間までは在外正貨が幾ら、

在内正貨が幾らと云ふことさへも公表しなかつた。山本大藏大臣、續いて武富大藏大臣の時代になつて、大分明瞭に發表するやうになつたが、それでも在外正貨の内容に就ては決して公表をしない。それは正貨でないものを正貨と言つて居るのであるから、餘り詳しいことは云へないのであらうが、其内容は出來るだけ明瞭にして置いて貰ひ度いものである。

兎に角日本の在外正貨何億圓と云ふものは、今云ふやうに英蘭銀行への預金、其外英吉利の大藏省證券も買つて居らうし、佛蘭西の公債も持て居らうし、貸付てもある。それ等の金額も分らぬが、要するに現金は大部分英國の懐ろにあるのであつて、日本の持て居るのは證書のみである。其の中には直ぐに金貨と引換へられるのもあるが、期限が付いて居つて、直ぐに正貨に引換へることの出來ないものもある。それを政府や日本銀行の當局者は在外正貨と言つて居る。それは縱し日本の手に正貨が無くとも、日本で必要の時に正貨が得られるのならばまだ恕すべきであるが、今日の狀態では、之を正貨にして日本の用に使ふことは出來ぬ。若し日本で其全部を正貨にして回收しやうとすると、英國政府は頑として之を拒むに相違ない。強て回收しやうとすれば、或は國交斷絶に至るかも知れぬ。又それを日本に持て來れば、英吉利が倒れてしまふ。それは英吉利には澤山の金貨があるに相違ない、けれども其の金は一面に於ては英吉利の兌換準備になつて居る。一の金が二重に兌換準備の用をして居る。であるから若し一朝英吉利と戰爭をすることになれば、何億圓かの日本の在外正貨は全部押へられてしまふ。平和に復すれば解決が付くであらうが、戰爭中は全く役に立たない。取れない貸金になつてしまふ。だから在外正貨の處分と云ふことは非常に六ケしいのである。

在外正貨と云ふものにはさう云ふ危險がある。そこで少しでも危險の少い所に貸して置かうと云ふので、近頃大分紐育の方へ持て來たやうであるが、是も日米關係が惡くなつて、國交斷絶になつてしまへば、やはり同樣の運命に陷るから、海外に在る債權は、内國に在る正貨のやうに安全ではない。安全でないからと言つて、一も外國に債權を有

つて居なければ、今日の世界に立つて行くことは出來ぬ。故に是は程度の問題である。どれ位の程度ならば危險を冒しても宜いかと云ふことである。それに就ても今日日本の所有して居る正貨の中、澤山の部分を海外に置き、國内には寧ろ少額の正貨しか無いと云ふことは、程度問題としても其の當を得ないのである。

日本の富が段々殖えて、是までの借金は全部返濟し、尙進んで日本が外國に對して貸金を持つやうになると、今まで吾々が生絲なり其の他の品物の形で拂つて居つたのが、拂はないで宜いやうになり、反對に外國から何等かの形に於て日本に品物が入つて來るやうになる。即ち生絲を我國から輸出する代りに、それより吾々の要するレールなり、機械なりが餘計に入つて來るから、其の結果生産を增加せしめることが出來る。吾々が努力して生産の增加を來した結果は、金が殖えて來るけれども、併し吾々の働くのは、金を殖やす爲に働くのではない、物を殖やす爲に働くのである。吾々は金の殖えることを望む者ではない、所謂拜金宗ではない。唯々金の御利益は、之をお賽錢にすれば如何なる品物でも得られる、他の物では容易に得られないが、金ならば、衣物が欲しければ衣物になり、食物が欲しければ食物になる、或は貸金にすることも出來る。而して世界に於ける金の中央市場は倫敦である。倫敦へ行けば何時でも金が得られる。他の所では得られることもあれば、得られないこともあるのである。是が世界の貨幣經濟の大利益である。

四　商品輸出國より資本輸出國に移り行く英國

以上、戰爭前までの世界の經濟は倫敦の金融市場を中心として動いて居る所以を說明したが、さて其の金融市場を支配して居る根本の力は何であるかと云ふと、それは資本である。倫敦の金融市場とは詰り資本市場と云ふことである。

資本は、貨幣の高を以て言現はされるものであるけれども、貨幣の一定の高が資本となるのではない、資本となるには一の特色が要る。然らば資本とは何かと云ふと、金錢上の利益即ち利息利潤を得る爲に投下せられたる財産、それが資本である。今日資本を

以て世界を支配して居る英吉利と雖も、決して昔から斯の如くに資本を以て生命としたる國ではなかつた、殊に資本の力を以て世界を左右するやうになつたのは割合に新しいことである。どうして資本を以て生命とし、資本を以て世界を左右するやうになり得たかと云ふと、富を得たからである。資本と云ふものは皆富である。故に資本を殖やすには富が殖えなければならぬ。併し富が殖えても、必しも資本が殖えたとは言へない。何となれば富には資本となるものと、資本とならざるものとがある。資本とは利益を產出す爲に使はれる富であつて、利益を得る爲に用ゐられない富は資本ではない。故に日本に何億の富があると言つても、其中には資本となつて居るものと否らざるものとある。例へば十萬圓を投じて立派な公園を拵へたとすると、其の十萬圓は資本ではない、何となれば公園からは何の金錢上の利益をも得ることが出來ないからである。所が十萬圓を以て鐵道を敷設したとすると、鐵道からは運賃の收入がある、故に是は資本である。又同じ物であつても、資本となる場合と、資本とならない場合とがある。例へば土地に就ても、資本となる土地と、資本とならざる土地とがある。公園に使つたり、空地にして置く所は資本ではない。所が或る土地に營業所を設け、工場を建て、鐵道を敷設すれば、其の土地は資本である。英吉利が資本を大變殖やし、資本の力に依て天下を支配して居ると云ふことは、無論富の殖えたと云ふことを意味するのであるが、併し富が殖えたと云ふだけでは資本が殖えたと云ふことにはならぬ。殖えた所の富を生產に使用する、或は富は殖えなくとも、從前生產的に用ひられなかつた富が生產的に用ひられるやうになれば、資本が殖えたと云ふことになる。例へば近頃日本の富は大變殖えたが、富が殖えなくても、從前使ひ方の惡かつたのを改めて、より多く利益を生み出すやうになれば、それだけ日本の資本は殖えたことになる。英吉利の資本が殖えたと云ふことは、無論富も殖えたのであるが、資本として其の富を使用する方法が殖えたと云ふこともある。

資本の使ひ方には、一度限りしか使へない使ひ方もあるし、何遍も使ひ得る使ひ方もある。一度限りしか使へない使ひ方とは、固定資本と稱するもので、例へば鐵道のレー

ルの如きはそれである。鐵道のレールは、一度敷設すれば再び外の途に使ふことが出來ぬ。それは甲の處に在つたのを、乙の處へ持て行くことは出來る。今度の戰爭に於て、獨逸は白耳義を占領してから、軍事上餘り必要でない所の鐵道のレールは、どん〳〵外して自國に持て行き、ヴエルダンの攻擊の時に、必要の所へ敷設して軍隊輸送の用に供したと云ふやうなことはあるが、レールは依然としてレールである。或はレールを鎔かして他の機械にすると云ふことも、出來ないではないが、多くの場合それは損である。何處までも初の儘で使はなければならぬ、之を固定資本と謂ふ。其の反對に始終形を變へることの出來るのを流通資本と云ふ。流通資本とは流通、變轉するものである。固定資本も流通資本も共に生產的の方法に使用されるのであるが、變動の多い時に固定資本が多いことは困る。反對に流通資本の多いのは大變利益である。

此の區別は誰れも知つて居ることであるが、是れは唯だ學問上の慰にした區別ではないのであつて、實際上大變に違ひがある。殊に今度の戰爭に於いて、同じ資本であつても、流通資本と固定資本とでは大變相違のあることが分つて來た。農業の盛んな國では、大部分は固定資本になつて居る。即ち土地であるとか、土地に加へた改良費とか云ふものは固定資本であるから、戰爭が始まつたからと言つて、急に其資本を取上げて、戰爭に使ふことは出來ない。又製造工業に於ても固定資本が多くを占めて居れば、之を他の用途に使ふことが出來ぬ、無理に使へばそれだけ能率が減る。例へば紡績の工場や紡績の機械と云ふやうなものには巨額の資本が投下せられてある。戰爭の爲に工女が無くなり、綿の輸入が止まつて機械を運轉することが出來ないから、其の資本は遊ばせて置かなければならぬ。所が今戰爭の爲に、一錢一厘の微と雖も之を利用したいと云ふ場合に、其の遊んで居る所の何百萬圓、何千萬圓と云ふ資本も使ふことが出來ない。之を以て大砲を製造することも出來なければ、彈藥の製造所とすることも出來ない。之に反して商業上の資本は大部分流通資本であつて、固定資本は極く僅かしかない。故に其の形を變へやうとすれば、直ぐに變る。殊に最も變り易いのは有價證券である。而も商人

の資本の多くの部分は各種の證券になつて居る。そこでサア戰が始まつた、金が要る、今政府の手には無い、借入れやうとしても急場の間に合はぬ、租稅には納稅期があるから急に徵收する譯には行かぬ、困つたと云ふ場合に、何が一番役に立つかと云ふと商人の資本である。商人に向つて資金の調達を賴む。今現金はありませぬ、現金は無くても證券はあるだらう、亞米利加の證券はあるだらう、それを貸して呉れと言つて、證券を借上げ、亞米利加に送つてやる。譯はない、小包郵便で送つてやれば、何百萬圓何千萬圓と云ふ資金が忽ち得られる。其金を以て軍需品を買入れ、兵器彈藥を製造して、戰爭することが出來る。であるから平時に於ては固定資本も流通資本も大して變らぬ、各々其の働きをして優劣はないが、一朝有事の際に於ては、流通資本の方は直ちに働きを現はし、利益を最も多く生み出すことが出來るのである。

所で英吉利が金融の中央市場であると云ふことは、英吉利には資本が潤澤にあつて、而も其の資本は斷えず流れ出で、又流れ込んで、其の流れが決して止まない。若し是が土地になつたり、機械になつたり、建物になつたりして、動かない資本になつて居れば、如何に英吉利が形勝の地位に在ると言つても、世界の中央金融市場となつて居ることは出來ぬ。金融市場と云ふのは、詰り資本の市場である、其資本と云ふのは主として流通資本であつて、何時何處へでも形を變へて移すことの出來るものでなくてはならぬ。然るに土地は移すことが出來ない。英吉利には良い土地が澤山ある、而も百姓は皆戰地に行つて、耕す者は居らない、所が亞米利加には百姓が澤山居つて、土地さへあれば幾らでも耕すと云ふやうな狀態であつたとしても、英吉利の土地を亞米利加に輸出することは出來ない。向ふの人間が此方の土地に來るなら宜いが、此方の土地を向ふへ持て行くことは絕對に出來ない。家屋の如きは、取毀ちて持て行けば移せないことはないが、非常な損失になる。又機械の如きも、或種の機械は動かすことも出來るが、或種の機械は動かすと大變能率が下る、又動かすのには大變な入費が掛ると云ふやうなこともあるので、是等は土地に次での固定資本である。

之に反して商人の持て居る流通資本は、之を移轉しても少しも値打を減ずることなく、又運賃などは幾らも掛らぬ。其の代り動き易い物であるから、少し油斷をして居ると、直ぐに飛んで行つてしまふ。資本が澤山あるからと言つて、安心して下手な使ひ方をすると、忽ち羽が生えて飛んで行つてしまふ。非常に敏捷な、悧口な者であると共に、又頗る薄情で、主人が少し無能であると見ると、直ぐに逃出す、義理も人情も構つて居らぬものである。そこへ行くと土地の如きは義理堅いもので、己れの持主は無能であると思つても、決して逃出さないで忠實に勤めて居る。そこで英吉利は富も大變殖えたけれども、殊に其の富を今云ふ動き易い形の資本として使ふことが非常に殖えた所から、世界の金融の中央市場となるに至つたのである。英吉利は世界に向つて資本を輸出して居る。資本の輸出は何を輸出するより容易い。金と云ふものは他の物に比べると嵩が少くて、動かし易いものである。又敏速に動くものである。けれども一億圓とか二億圓とか云ふやうな大金になると、相當の場所を取る。又之を動かすのには運賃も高く取られ、保險料も高い、殊に今日の如き戰爭の際には、危險の度が一層加はつて居る、資本に比べると餘程動かし難い、況んや其の他の物に於ては、動かせば動かす度に入費が掛る、故に運賃を拂ひ・保險料を拂つても尙儲かる場合でなければ輸出しては損であるから、輕々しく輸出することが出來ぬ。資本に比べては劣るのである。

英吉利と雖も十九世紀の半過ぎまでは資本の輸出國ではなくて、商品の輸出國であつた。又十八世紀までは世界第一等の商賣國でもなかつた。佛蘭西の爲に始終頭を抑へられ、富の程度も佛蘭西には及ばなかつた。佛蘭西は其の頃盛に品物を輸出して居つた。併し佛蘭西の輸出して居つた品物は、絶對的の必要品ではなく、節しやうとすれば節することの出來る品物が多かつた。奢侈品、贅澤品と云ふものゝみでもなかつたが、兎に角人間の生活に是非無くてはならぬものばかりではなかつた。それ故に永續することが出來なかつた。併し奢侈品に於ては今日でも佛蘭西が世界の市場を左右して居ると言つても宜い。婦人の衣裳、婦人の帽子などの流行は巴里が本になつて居る。其の他香水

だとか、白粉だとか、石鹸だとか云ふやうなものは、巴里製でなくても巴里製だと言つて居る位であるから、さう云ふ品物は佛蘭西が大部分を輸出して居る。其の反對に英吉利は、是非無くてはならぬ物を製造して輸出して居る。即ち十九世紀の前半に於ては主として木綿製品を輸出した。棉花は英國内には產しないが、之を紡いで絲とし織物として輸出して居る。之が最重要の輸出品で、伊勢は津で持つと云ふことがあるが、英國はマンチエスターで持つと云ふ有樣であつた。マンチエスターは木綿工業の中心である。又羊毛是も昔は羊毛の儘で輸出して居つたが、後には絲として賣り出し、最後には織物として賣出して居る。而して十九世紀の半頃から第二の重要なる輸出商品として鐵や鐵製品が激增した。衣物とか鐵とか云ふものは、人間の生活にどうしても無くてはならぬものであるから、斯う云ふ商賣は廢れることはない。

そこで英吉利は、十九世紀になつてから、世界に向つて品物を賣る所の最大國となつた。英吉利の賣出す品物は、總て實用品である、而も其の品は實用的に出來て居るから盛んに賣れる、賣れるから利益が殖えた。其の殖えた利益を唯だ富として積んで置かないで、生產的に使つて資本とし、工場を擴張するなり、商品を殖やすなりして、益々商賣を盛んにするから儲かる、儲かるから富が增す、其の增した富を又資本として運轉するから、愈々儲かつて所謂成金になつた。若し不意の儲けが成金と云ふのならば、餘り感服せぬが、英吉利の成金は歩一歩と着實に進んで行つて成金に成つたのであるから、容易に元の歩に返るやうなことはない。日本の此頃の成金のやうに、戰爭の爲め僥倖に儲かつたのは、戰爭が濟むと又元の默阿彌、折角金に成つたのが忽ち飛車に食はれてしまふ。英吉利の商賣は、極めて着實にやつたのであるが、それでも富の增加は非常なもので、一八一五年から一八六〇年代までには面白い程殖えた。さうして今日では世界第一の商業國である、工業國である、資本國であると言はれるやうになつた。

それなら英吉利は昔からの商業國、工業國であつたかと云ふと、さうではなかつた。十六世紀から十七世紀に掛けては寧ろ農業國であつて、主なる輸出品は小麥、それに次

では羊毛、絲にも織物にもしない所の毛を輸出したのである。さうして其の毛は白耳義だの佛蘭西に於て絲にし、織物にして、又英吉利に逆輸入したものである。又小麥は主に獨逸に輸出し、獨逸人が英吉利の小麥を食つて居つた。而も十五世紀頃の英吉利の外國貿易は皆獨逸人の手に在つた。獨逸のハンザ商人が、英吉利の倫敦に大きな治外法權の居留地を有つて居つて、其處で商業をやつて居つた。其の跡は今でも遺つて居る、スチールヤードと言つて、可なり廣い所に城壁を圍らし、英吉利人一歩も入るべからず、英吉利の行政、英吉利の法律一切を拒絶し、獨逸のハンザ商人が外國貿易の實權を握つて居つた。であるから今日英吉利が世界金融の中心だと言つて居るけれども、之に從事して居る所の人は、當時獨逸若くは伊太利から來た猶太人の子孫が多い。ロスチャイルドを初めとして、倫敦の金融市場に勢力を占めて居る銀行業者は猶太人が多數である。日露戰爭の時に、日本が頭を下げて金を借りたのも猶太人である。さう云ふ風で十五六世紀頃の英吉利人は、商賣も何もしない。小麥を作り、羊を飼つて、之を倫敦に居る所のハンザ商人に賣渡した。丁度近頃まで日本では外國貿易と言ひながら、其の實横濱、神戸に居る外國の商人と賣買して居つたと同樣に、直接外國と取引することはしなかつた。所が十八世紀の末から十九世紀に至つては、小麥を輸出するどころではない、反對に輸入するやうになり、却つて工業品を賣出し、世界に對する輸出國となり、其貿易は英國の商人自ら之を掌るようになつたのである。

所で英吉利の商業の方針としては、世界が開放せられて、自由でありさへすれば宜い。世界の人が英吉利の商品を買ふのに何等の制限、何等の束縛をも加へなければ宜しい、決して他の國を併合したり、植民地を澤山にすると云ふやうなことはしなくとも差支ない。品物を買つて呉れるのは皆お客樣であるから、誰れでもお客樣になつて呉れゝば宜い。無論お客樣は動かないやうに、常得意になつて呉れる方が宜いけれども、得意を縛り付けて、厭やでも應でも買はせると云ふやうなことはしない。甲なり乙なりが買つて呉れなければ、丙なり丁なりに買つて貰へば宜いと云ふ風であつた。即ち捌け口を見付

けさへすれば宜いと云ふのであるから、從つて商人の政府に望む所も、販路擴張の爲に盡力して貰ふだけのことであつた。外國の政府が英吉利に原料を賣つてはならぬとか、英吉利の品物を買つてはならぬとか言はないやうにして呉れゝば宜い。或は維新前の日本のやうに鎖國主義を採つて、獨立の經濟を立てゝ居る所に向つては、其門戸を開いて貰ふ、政治上の野心などは有たない、唯だ商業の自由に出來るやうにして貰ひたいと云ふだけのことであつた。これが即ち英國の開放主義、自由主義と稱するもので、門戸開放と云ふ語も此の時から盛んに行はれ始めたのである。此時代の最重要なる輸出商品はランカシーア洲で作る木綿絲及織物であつた、マンチエスター市が其中心市場である。從つて此の自由貿易主義の中心地も亦マンチエスターであつた。經濟學上でマンチエスター學派と云へば、自由放任を主義とする學派のことである。或人は戯れに此學派を木綿學派と名けたが、其は大いに眞相を得て居る。

斯くて英國は、世界の經濟的平和のチヌムピヨンとなつて、愈々門戸開放主義を以て商業を進めやうと云ふことゝなり、他の國をして門戸を開放せしむるには、先づ自國から門戸を撤しなければならぬと云ふので、自由貿易主義を採用した。當時英吉利を風靡した格言は、『賣らんと欲すれば先づ買はざる可からず』と云ふのであつた。商業の利益は、賣るばかりが利益ではなく、買ふ事も亦利益になる。故に買ふ事も成べく多く、賣る事も成べく多くし、而して賣つたものも儲け、買つたものも儲ける。又先方に買ふだけの力が無い國であると、先づ此方から買ふ。買へば從つて先方に購買力が出來て、此方の品物を買ふやうになるから、結局自分の國の利益になる。それが即ち自由貿易の學說の根據である。此の自由貿易主義は、一八四六年以來今日まで變らなかつた。

然るに斯く自分が卒先して自由貿易政策を採り、他の國も之に倣はんことを希望したが、何處でも眞似をしないのみならず、英吉利から分れた所の亞米利加では、却つて反對の保護主義を採用し、英吉利の領地である加奈陀や濠洲に於てさへ自由貿易主義を採用しない。唯だ此間に於て自由貿易政策を採らうとしたのは佛蘭西のナポレオン三世で

ある。ナポレオン三世は大ナポレオンの遺志を繼いで歐羅巴の統一をしやうと考へた。併し此の統一は那破翁のやうに、唯だ武力のみでは覺束ないから、先づ經濟上の統一をしやう、經濟上の統一をするには、自由貿易で進んで行くが宜からうと考へて居る所へ、普魯西は獨逸關稅同盟の成立に就いて佛蘭西に助力を求めて來た。其の結果獨逸の關稅同盟は易々と出來上つた。故に獨逸關稅同盟は主義としてナポレオン三世の提唱した自由貿易主義を標榜した、是れが爲めに墺國は此同盟に加はらなかつたのである。獨逸帝國の成立當初も此方針を守つてビスマークは着々自由貿易主義を實現せんとしつゝあつたのである。然るに千八百七十九年に至つて、之を一擲して保護政策を採るやうになつたのである。其は主として獨逸製鐵業の利益の爲めに起つた變化であるが、又た他面帝國の財政上の必要にも促がされたのである。即ち英國の木綿學派の主張は、獨逸の製鐵業の爲めに打破せられたのである。而して此變化は獨り商業政策の上にのみ止まらない、世界經濟の根本問題に觸れて來るのである。而して英國自も亦た其自由貿易主義に大なる變化を被むるようになつたのである。其は何であるかと云ふと、一面には英國の富が段々殖え從つて資本が有り餘るようになつて、從來の商品輸出國たる外に、更らに英國は大なる資本輸出國となつた爲めに、單に商品の輸出さへすれば宜しいと云ふ自由貿易主義を一貫することが出來なくなつた故である。他面には其輸出商品も單にマンチエスターを中心とする木綿糸及織物のみでなく、製鐵業の製品を澤山輸出するようになり、從つてマンチエスターと相並んでバーミンガムが重要なる中心となり、其バーミンガムはマンチエスターの自由貿易主義に反對し始め、彼の有名な帝國主義の大使徒チャムバーレンを代表者として英國經濟政策の根本的變化を絕叫するようになつたのである。次の二節に於て此變化を少し說明して見よう。

五　偉大なる資本の增殖

英吉利が自由貿易主義に依て、自國の商業の發展を圖つた時に出來た諺に、『貿易は國旗に從ふ』と云ふのがある。と云ふのは海軍の勢力の及ぶ所に其の國の商業が行はれ

るのであるから、英國の海軍は單に國防と云ふことばかりでなしに、英國の商品の販路擴張の爲にも進んで行かなければならぬ。外交と云ふものも、何の爲めに外國との交際を圓滿にして行くのかと云ふと、畢竟貿易を援くるが爲めである。世界が平和に治まり文明が發展すれば色々の物の需要が殖える、需要が殖えれば賣る品物も買ふ品物も多くなる。殊に英吉利の商品は、佛蘭西の商品のやうに使はずに居れば居れると云ふものではなく、文明の生活には是非必要の物ばかりであるから、英吉利の商賣の利益は、世界の平和と一致すると云ふのである。從つて外交の方針も勢ひ世界的平和主義、世界同胞主義と云ふことにならざるを得ない。

そこで英吉利が海外の貿易を發展して行くのには、自由貿易主義、門戸開放主義が最も都合が好いので、此の主義を弘める爲には先づ隗より始めなければならぬと云ふので、國内に於ける政治上のことに就ても着々自由主義を採るやうになつた。殊に政府が人民の生活に干渉することは自由の精神に反する、それも巧く行つた時には宜いが、下手に行つた日には色々の面倒な問題が起つて、國内の政治上の困難の爲に、外國に對する貿易に支障を生じてはならぬ。殊に國が富んで居ると何等の問題も起らぬが、所謂貧すれば鈍するで、國が貧しくなると財政が困難になるから、政府と人民との間に爭も起り、增稅案を否決するとか、豫算案を削るとか云ふことになる。富が殖えつゝある狀態にあると、財政上の問題などは直ぐに解決し、又同じ爭ふにしても、其の爭が下劣でなくなる。英吉利は富んで來た狀態にあるから、財政上困つたことがないとも言へないが、大體に於て順調であつて、無理なことをする必要もなかつた。それが爲に國内の政治に於ても經濟に於ても自由主義、放任主義、不干涉主義が行はれて來たのである。

所で英吉利と言へば、多くの世の中の人は、自由主義の本家本山だと云ふやうに考へて居るけれども、昔からの自由主義の國ではなかつた。十九世紀の中葉自由貿易主義を採用するまでの英吉利は寧ろ保護主義であつて、殊に十七世紀の頃まで否十八世紀に入つても色々煩瑣なる法律を設けて、農業にも商業にも工業にも干涉を加へて居つた。然

るに英吉利の生産品殊に木綿製品が段々外國に賣て、富が增して來た結果、自由主義が行はれるやうになり、政治も二つの政黨が對立して、一方が朝に立てば一方は野に下り、さうして在野黨は政府を監督し、又問題が起れば政府を鞭達し、若し時の政府が輿望を失へば、是までの在野黨が代つて政權を執る。大體に於て國内の事は人民の自由活動に任せ、政府の爲す事は至つて少くなつて居るから、保守黨が内閣を取うが、自由黨が多數にならうが、國の政治は少しも阻害せらるゝことなく、圓滑に行はれた。是は英吉利であるからかう行へたのであつて、英吉利の如き狀態でない所の國が、幾ら英吉利の政黨政治の眞似をしやうとしても、巧く行く筈はない。例へば日本の如くに何でも彼でも政府が引受けてやつて居る國では政府が代る度毎に色々なことが變るので、吾々の生活にまで影響を及ぼして來る。多少は不都合であつても、一貫の方針でやつて呉れゝば宜いものでも、政府が更ると、前の方針を棄てゝ新しい方針を採る、其の度に國民は損害を受ける。所が政府のすることの少い國では、さう云ふ事がないから、何れの政黨が政府に立つも國民に迷惑を感じない。是が英吉利の自由主義の利益とした所で、又今日の富を致した所以である。

所が英吉利が商品を世界に賣出して富を得、其の富を又資本にして生産し、其の品物を賣出して儲けるから、富を資本として使ひ切れなくなつた。富は使ふから資本になるので、使はなければ資本にならない。けれども亦使ふには使ひ途があるから使ふのであつて、用途がなければ使ふことが出來ない。所が英吉利は工業が盛であり、商業が盛であり、海運業が盛であり、有らゆる事業が盛であつて、資本を要することも多いが、其の要するよりも入つて來る方が尙多い爲に、資本が餘つて使ひ切れない。それなら餘つて使へない位なら資本を作ることを止めたら宜からうに、止めることも出來ない。多年の習慣で、色々の事業をやつて居るから、增さうと努めずとも富は殖える。けれども其の殖えた富を資本として利用する途が段々少くなつた。

そこで第一に起つた問題は資本の價が下落したことである。經濟上の理法に從つて、

物が殖えれば安くなる。資本も少い時には高いが、多くなると安くなる。資本が安くなると云ふことは、詰り金利が安くなると云ふことである。利子と云ふのは資本使用の代價である。資本の價と言つても、資本其れ自身に價のあるものではなく利息が即ち價である。であるから文明國程利子が安く、未開の國程利子が高い。國が開けて來れば來る程金利は下つて來る、是は世界各國を通じて誤りなき所の理法である。其の反對に土地と云ふものは、文明が進めば進む程、國が富めば富む程、人口が殖えれば殖える程高くなる。何となれば資本は幾らでも殖やし得るものであるが、土地は殖やすことの出來ないのが特色である。海を埋立てるとか、不毛の地を開墾するとか云ふことに依つて幾らかは殖やすことが出來るけれども、地球の面積には限りがあるから、それ以上には殖えない。又國の領土と云ふものも、戰爭に依つて新に獲得するとか、併合等に依つて擴張すると云ふやうなことはあるが、其の外には殖えて來ない。然るに土地を使ふ人口は段々に殖えて來る。人口が殖えれば穀物を餘計要する、從つて耕作面積を殖やさなければならぬ。けれども土地の面積を殖やすことは出來ないから、一定の土地に資本を多く掛けて土地を改良する、或は耕地整理をやるとか、肥料を多く施すとか、或は灌漑の便を開くとか云ふことで、一段歩の收穫を多くする、其の結果土地の價が高くなる。土地の價が高くなると云ふのは、詰り地代が高くなると云ふことである。だから文明の度が進んだ國程地代は高い。尤も稀に例外が無いでもない。例へば今まで繁華であつた地方の町が、鐵道が出來て停車場が其の町から離れた所に出來た爲に、其の町の地價が著るしく下つたと云ふやうなことはあるが、大體から言つて、土地の價は文明の進むと共に上つて行く傾向を有つて居るものであると斷言して差支ない。

そこで英吉利に於ては近年土地の價が高くなつて、資本の價は大變安くなつて來た。即ち金利が下落して來た。現に戰爭の始まる前の英蘭銀行の公定利率は二分と云ふ所を動かなかつた。戰爭の始まつた後は、五分とか六分とか、僅かの間ではあるが一割にまでも引上げた。それは開戰の當時金が出て行く一方であつたから、それを引止める爲

に、政府の命令で一時一割に迄引上げた。けれども英蘭銀行の公定相場が一番低い。それより安い利子は、他に全く例が無いと云ふでもないが、先づ一番安い。故に英蘭銀行の利率が一割になると、民間の銀行の利率は一割二分、或は一割二分五厘と云ふ位になる。所で戰爭前に於ける公定利率が二分と云ふ非常な低率になつて來た結果、內外に於て二つの作用が起つて來たのである。

資本の安くなつた爲に、國內にはどう云ふことが起つたかと云ふと、資本以外に資本と一緒になつて生產に從事する者の所得が殖えたと云ふことになるのである。生產には、土地、資本、勞働、企業、此の四つのものがなければならぬ。土地を所有する者を地主と謂ひ、土地の價を地代と云ふ。資本を有つて居る者は之を資本主又は資本家と謂ひ、其の得る所のものを利子と云ふ。勞働は勞働者が之を爲すのであつて、其の得る所のものを勞銀又は賃銀と名づける。企業は企業者或は企業主と稱する者がするのであつて、其の得る所のものを利潤と名づけ？。利潤と利子とは似たやうなものであるが、其性質は全く違つて居る。例へば茲に一萬圓の總收益があつたとする。總收益は學者によつては國民所得とも云ふ。此の總收益はどう分たれるかと云ふと、地主は地代として貰ひ、資本主は利子、勞働者は勞銀として貰ひ、一番最後に殘つたものが企業者の利潤となるのである。所で此の中の利子が安くなつた結果は、英吉利に於ては國民の大多數を占める所の勞働者の所得、即ち賃銀が大變に殖えて來た。是は場合に依ては賃銀は餘り殖えないで、利潤ばかり殖えることもあり、或は餘り地價が騰貴すれば地代が一番上ることもある。英吉利は十九世紀の後半には地代も上り、利潤も殖えたけれども、利子の下つた恩澤は一番餘計に誰れが受けたかと云ふと勞働者である。勞働者の得る賃銀が、全體としては勿論、一人當りの平均額も殖えたのである。この賃銀と云ふものは、大體に就て云ふと、殖えれば殖える程勞働の能率が高まるものである。勞働者と云ふものは、多くは一ぱいの生活をして居るものだから、少しでも所得が殖えれば其の生活の改良が行はれる。自分の身體も强健になれば、健全なる子孫を生むことにもなり、勞働の能率が

高まる。卽ち英吉利に於ては、資本の安くなつた結果直接生產の上に於て能率が高まり、其の結果は又利潤として得るものも殖えて來た。例へば一萬圓の總收入の中から地代を百圓、利子を五百圓拂つたとすると九千四百圓殘る。其の內賃銀として八千圓拂ふと、利潤千四百圓となる。所が利子が下落して二百圓で濟むことゝなり、其だけのものを勞銀の方に增すことになると、利潤は變らないが勞働者の所得は八千三百圓となる。然るに其結果勞働の能率が高まつて一萬五百圓だけの收益を得ることが出來たとすれば、結局利潤は千九百圓となり、勞働者も利すれば、企業者も利する、更に大さく言へば國全體が利すると云ふことになる。であるから企業者は增し得る程度までは勞銀を增してやるが宜い。增してやる餘裕があるに拘はらず、增してやらないからストライキなどが起るのである。英吉利には勞働者の利益を保護する爲に勞働組合が發達して來た。勞働組合と云ふ團體を組織して、勞働者の地位の改良を圖つて居る。利子が安くなつて賃銀を上げて呉れと言へば、上げて呉れ得るだけの餘裕がある。畢竟英吉利で勞働者の賃銀が高くなつたのは、富が殖えて資本の利子として拂ふものが少くなつたからである。

資本が多くなつて利子の下ると云ふことは、企業家や國家が利するばかりでなく、資本には直接に權利を有つて居ない所の勞働者まで利することになる。それ故に勞働者は勢ひ資本の殖えることを望むやうになるから、自然に資本と勞働との調和が出來て來るのである。唯資本家と勞働者の調和を圖らうなどゝ言つても出來るものではない。殊に日本のやうに唯道德的の說法をして勞働と資本との調和を圖らうなどゝ言つても、到底行はれるものではない。道德的の敎も實行の出來るやうにして說法すればそれに服し、効能もあるのである。實行の出來ないやうな狀態では、幾ら小言を言つても、そんな小言は頭の上を飛越して些とも効がない。成程資本主と勞働者とでは、利害の一致しない所が幾らもあるけれども、大體に於て資本の增加は勞働者の利益となることは動かす可らざる事實である。獨り勞働者の利益に止まらず資本の利子の安くなると云ふことは、事業の上から言つても、又は利益を得ることを目的とせざる公共事業、若くは宗敎、學

問、慈善事業、社會政策の事業等にまでも影響を及ぼすのである。資金の無い爲に、若くは利子の高かつた爲に起らなかつた事業も、利子が安くなり、容易に資金が得られるやうになると起つて來る。例へば金を借りて學校を立てやうと云ふ場合には、利子が五分も六分もの時には、到底維持の見込が付かなかつたが、二分で借りられゝば、授業料の收入で支辨して行かれると云ふので學校が出來る。或は學術上の會合にしても其の通りである。或は資本が殖え、富の力が强くなるのは國が拜金宗になつていけないと言つて、之を攻擊する人は英吉利にもある。例へばラスキンとかカーライルなどは大に資本の殖ゑることを呪つた。如何にも資本には惡い半面が確にある、けれども拜金宗になることのみが資本の特色ではない。否資本は其の他の方面に於て非常に靈顯驗著なる神樣である。資本を得た爲に、其の利益に浴する人もあれば、資本が多くなつて利子が安くなつた爲に利益を受ける人は一層多い。何となれば資本は使ふから資本であつて、使はなければ資本でない。故に資本を貰つただけでは、後の利息を拂はなければならぬ。一時資本を貰つたと云ふことよりも、利子の安いと云ふことの方が遙に有難い。人類文明の理想は、一は資本の利子を安くすることにある。若し與ふぺくんば無利息にもなりたい、併し全然無利息と云ふ譯には行かないから、殆ど無利息同樣に資本を使へることが文明進歩の理想である。而して英吉利の如きは餘程それに近い。反對に日本の如きは、資本に對する需要は甚だ多いが、供給がそれに伴はないから資本は高い、即ち利息が高い。利息が高いから餘程儲かる事業でなければ資本を借りて始めることが出來ない。又折角事業を始めても、利子が高い爲に、利子を拂ひ、地代を拂ひ、賃銀を拂つてしまふと、企業者の利潤、即ち儲けが無くなる。儲けがないから勢ひ無理もやる、不正のことも出て來る。商業道德の低いと云ふことの原因は、一は資本の足らないと云ふ所にもあらうと思ふ。故に唯商業道德を高めろ、工業道德を高めろと言つても、是亦無理な注文である。高い利息を拂つて居る者が、安い資本を使つて居る者と競爭することになるから、ツイ罐詰に石を入れることにもならうし、齒車の缺けた時計を輸出することにもな

る。それは如何にも不都合千萬の話に違ひないから、商業道德の說法も必要であるが、資本の供給を潤澤にすれば、自然それらの弊は改まるものである。英吉利の商業道德の高いのは、確に資本の供給が潤澤であるからである。

此資本の高い安いと云ふとは、經濟上の關係ばかりでなく、一般の國民道德の上にも大なる影響を及す。資本の高い國に於ては、利子として引去られる國民所得の割合が多い。さうして其代りに誰が頭を叩かれるかと云と、地主は取だけ取らなければ承知しない、企業者は相當の利潤がなければ天から仕事をしない、さうすると殘る所は一番弱い勞働者である。國の財政でもさうである、財政の裕な時には宜いが、財政が逼迫して來ると各省の豫定經費を集て大藏省で査定する時に、どう云所が叩かれるかと云ふと、別に査定の方針がある譯ぢやないから、一番勢力の無い所から査定する。先づ文部省等は何時も眞先きに叩かれる。例へば日清戰爭の後で出來た教育基金等は、何より一番先きに使はれてしまつた。何でも抵抗力の少い所が叩かれる。そこで生產の上に於て一番抵抗力の少いのは勞働者である。彼等は數に於ては多いが、一人々々の力は洵に微弱である。資本主に對しても、企業主に對しても、對等に當つて行くことが出來ないから、資本の高い國に於ては勞働者の得る賃銀が少い。賃銀が少いから其の生計が苦しい。生計が苦しいから勞働能率が低い、即ち生產力が其だけ鈍い。生產力が鈍いばかりでなく、子供を生んでも、それを育てることが十分でなく、親の體質が弱いから、從つて死亡率が多い。一家の中でも、稼ぐ人は食べるだけは食べなければならぬから、やはり一番抵抗の弱い人が犧牲となる。其は女である、女の營養を惡くする。婦人の體力が衰へて居るから、自然生れる子供も弱い、生れてから直に死ぬ者が多い。最近の歐羅巴の人口增加の割合と比べて見ると、日本の出生の率は割合に殖て居るが、死亡率も中々高い。歐羅巴に於ては、出生率も減つて居るが、死亡率が大に減つて來たので、差引人口增加の割合は、少しは減つて來たが大體に於て變らない。之に反して我國は、死亡率が非常に高く、而も其の死亡率の內容を吟味して見ると、子供の死亡率も高いが、特に靑年期、

壯年期、即ち十五歳から五十歳までの死亡率が最も高い。其の内又男と女とに分けて何方が高いかと云ふと、女の方が大變高い。其の高い原因を調べて見ると、女子には出産と云ふことがあるから、この婦人特有の原因から死ぬ者が多いかと云ふと、是は外國と比べて左程多いのではない。だから女子は出産の爲に多く死ぬのでなく、他の病氣で死ぬ。其の病氣の内容に就て、内閣統計局の二階堂君が調べた結果に依ると、結核性の病氣で死ぬ者の割合が最も多い。是は男に於ても同樣であるが、二十五歳までの青年期に於て、結核性疾患の爲に死亡する割合は、英吉利や獨逸に比べると非常に多い。同じ日本の中でも、都會と地方とでは何方が多いかと云ふと、都會が多く、職業別で言ふと纖維工業に從事する者に多い。即ち營々として國の爲に富の增殖をなしつゝある日本の纖維工業、即ち紡績業、製絲業、織物業等に從事する所の婦人の數の多いと云ふことは大に寒心すべきことである、死ぬ者が多い位だから、死に至らずして病牀に苦しんで居る者も少くなからう。此の年若き、第二の國民を造る所の婦人の死亡率が斯くも多いと云ふことは、日本の將來に取つて大に寒心すべきことである。露西亞と比べれば、日本の方が宜いか知れぬが、他の聯合國と比べると、我國が一番惡い。曾に工場に働く婦人ばかりでなく、下層社會に於ける婦人の營養が甚だ惡い。結核性疾患は、傳染病ではあるが、誰れにでも感染すると云ふものではなく、之に犯され易い體質がある、それは營養不良と云ふことが主なる原因になる。日本の婦人は僅かな物を食つて、男子に壓迫されて働いて居る。其の柔順は如何にも敬服の至りであるが、敬服して居る間に段々國民の體質が惡くなつて來る。此頃の新聞に、郵便配達に女を使つたらどうかと云ふやうなことが見えたが、郵便配達に女を使はなければならぬ程日本は困つて居りはせぬ。女は賃錢が安いからと云ふが、安い賃錢の者を使はねばならぬと云ふのは、他にも原因があるうが、資本が高いと云ふことも大なる原因である。英吉利は國内に資本が澤山ある爲に賃銀が高くなつて、勞働者の健康狀態、道德狀態が良くなつた。英吉利の貸付利子は、戰爭前までは二分とか二分五厘、高くも三分であつた。斯樣に利子が安いと云ふことは

國内に資本が有り餘つて居るからばかりでなく、最早や企業の餘地もなくなつたからである。尤も英吉利も十九世紀の半ば頃までは、資本が足らない爲に起したい事業も起せなかつた位であるが、今日では起すべき事業も無い爲に、一層資本が餘つて來た。そこで最早此の上國内では資本を使ふ餘地がないから、勢ひ外國に向つて輸出するやうになつた。これ即ち英吉利の國情が最近に至つて一變した所以である。

六　資本輸出國としての英國々情の變化

十九世紀の半ばに於て完成した自由貿易主義に依つて、英吉利は世界最大の商品輸出國たるを國是として、政治も行はれ、外交も行はれ、海軍も其の方針を以て計畫せられて居つた。其であるから『英吉利人は商賣人國民である』(Nation of shopkeepers) とさへ呼ばれた位である。所が今日ではさうでない、商賣もして居るが、商賣一方ではなくなつた。商品も輸出するが、商品の外に今まで國内で使つて居つた所の資本を盛に外國に輸出する樣になつた。現に大藏大臣ロイド・ヂョーヂが議會に於て報告した所に依ると、一九一五年に於ける英吉利の外國に對する投資額は約四十億磅(我が約四百億圓)に上つて居ると云ふことである。日本は戰爭以來大變儲かつた、正貨が九億圓に激增したなどゝ言つて喜んで居るが、英吉利では外國に對する貸金が四百億圓もある、又其の利子として年々二億磅即ち二十億圓程の品物なり金なりは、何をしないでも入つて來る。一品も海外へ賣出さないでも、それだけの品物なり金なりは年々英吉利へ入つて來ることになつて居るのである。

更に英吉利全體の一箇年の國民所得、即ち英吉利人全體が國内に於て一箇年にどれ位の富を作出して居るかと云ふと、概算ではあるが二十四億磅(約二百四十億圓)と云ふことになつて居る。故に海外投資の收益は其の十二分の一に當つて居るのである。所で商品は一度賣つて其の代價を取れば、それ切りであるが、資本はさうではない。資本は一度輸出すると、それが逆輸入して來るまで、即ち償還を受くるまでは、利息となつて年年入つて來る。それは砂糖になり、茶になり、肉になり、小麥になり、樣々の品物にな

つて來る。日本の借金の全體は、近頃では大分減つたが、戰爭前までは約二十億圓程であつた、之が返濟に就てはどうしたら宜いかと言つて大騷ぎをして居たのだが、英吉利にはそれだけの金が、何もしないで唯だ借用證文を懷中に入れて居るだけで毎年々々入つて來る。是は資本を輸出して居る賜である。

そこで英吉利は、資本が益々増加して仕樣がないから、どうかして其の捌口を求めやう、骨を折つて商品を揃へて輸出するより、資本を一たび輸出すれば、後は年々利子として入つて來る、これ位樂なことはないと云ふので、どし〳〵資本の輸出を始め、國内で使へば使へる分までも輸出するやうになつた。國内に於て使へば三分か三分五厘にしか廻らないものが、之を外國に輸出すれば五分にも六分にも一割にもなるから、爭つて海外に放資しやうとする。それは如何にも結構のことである、結構ではあるが、餘り結構過ぎて結構ならざることが起る。と云ふものは國内の産業に昔のやうに緊張した氣分が漲はなくなつてしまつた。それが即ち英吉利が獨逸より弱くなつて來た所以である。

獨逸は一八七〇年に帝國となつて以來、非常の勢を以て發展し、總ての事に於て英吉利に對抗して來たが、其最も發達したのは第一に製鐵業である、是は英吉利に於ては木綿工業に次ぐ最重要の工業であつて、他國が競爭を企てゝも及ぶものでないと、威張つて居つたが、戰爭の始まる前頃には、獨逸の製鐵工業は英吉利の製鐵業の壘を摩するに至つた。化學工業などに至ると、壘を摩するどころではなく、獨逸は既に英吉利の及ぶことの出來ない程度にまで進んで居つた。例へば化學染料の如きは、元は英吉利で發明して、之を獨逸に傳へたのである。然るに獨逸人は更に進んで學問的に研究し、逆まに英吉利に供給して居つたから、戰爭が始まるや否や、染料缺乏の爲に英吉利は非常に困つたのである。獨逸が斯樣に發展して來たのは、無論一面には非常に奮勵努力したのであるが、一面には英吉利の進歩が、以前の如くでないと云ふこともある。其の結果獨逸の國力は駸々として進み、從來非常に懸隔のあつたものが、餘り著しい相違がないやうになつた。是は獨逸が進んで來たばかりでなく、英吉利の進歩が以前の如くでなくな

つた爲である。

と言つて、英吉利人其者が劣つて來たと云ふ譯ではない。英吉利人は昔と少しも變つて居らぬ。又產業の發達を沮害するやうな政治上の原因もない。否英吉利は次第に文明に向つて進みつゝある。體質に於ても、心理上に於ても、以前と比べて墮落した所がある譯ではないが、唯だ經濟上の努力が衰へたのである。それは何う云ふ事かと云ふと、以前は商賣を第一として、何でも良い品を安く拵へて、自分の國の品物を成べく多く賣らうと云ふことに全力を注いで居つた爲に、國の富が非常に殖え、資本が豐富になり、利子が安くなつた。利子が安くなつても、それを國內で使つて事業をやつて行けば、益々產業が發達するのであるが、資本を外國に輸出すると云ふ巧い拔け道が出來た。外國へ資本を輸出すると利息が入つて來るから、結構のやうであるが、今度は利息の關係で、國內で要る所の資本迄も外國に出て行くから、自然產業の進步が衰へるやうになつた。それは品物を拵へて外國に賣らないでも、利子としてそれだけのものが入つて來るのだから同じではないかと言ふかも知れないが、決して同じではない。個人にしてもさうである。骨を折つて働かなくとも、自分には貸金があるから、其の利子で遊んで食つて居ると云ふ人は、一番不幸の人である。又國から言へば一番厄介な人である。「成程今日の社會の定めから言へば、利息を取るだけで少しも働かず、贅澤の仕放題をし、自働車を飛ばし、酒食に耽つた所で、刑法に觸れる譯でもなければ、社會上何等の制裁がある譯でもない。併ながら經濟上の眼から見れば、是れ位不埒なことはない。而も彼れ自身が千辛萬苦して作り上げた財產で、其利息を以て道樂をするのならばまだしもであるが、親の身代を相續して、自分は少しも働かず、社會にも何等の貢獻する所がなく、唯だ利息があるからと云ふだけで、多數の生產者が粒々辛苦して作つた所のものを消費すると云ふことは、社會の大なる公敵である。若し斯う云ふ者が國內に殖えたならば、最早その國は進步の見込がないと言つて宜い。

所が英吉利は段々さう云ふ風になつて來たから、差當つての生活が樂になると共に、

色々の遊戯が行はれるやうになつて來た。テニスが流行る、ボートレースが流行る、やれ競馬だ、マラソン競爭だ、オリンピックゲームだと云ふやうなことで、非常な金を使つて樣々の運動をやつて居る。それは働かなくなつたから、腹ごなしの爲めである。働いて居れば、殊更に運動などはしなくとも身體が丈夫になる。マラソン競爭などをやる代りに肥桶でも擔ぐなり、車を牽くなりして働いて居れば、運動にもなり、同時に社會の爲にもなる。其であるにも拘はらず、近來日本にも大分斯う云ふ遊び事が流行つて來た。何も遊戯が惡い、運動がいけないと云ふ譯ではない、時には遊戯をやるも宜いが、日本のやうな借金國、是れから益々奮勵しなければならぬ國民が、有り餘つて居る英吉利などの眞似をして、學校までも休んで、ワーワーと言つて彌次ッたり騷いだりして居るのは、實に馬鹿々々しい話である。英吉利にスポートが流行ると云ふことは、好い所が少しも無いとは言はないが、惡い所が甚だ多い。所謂高等遊民の多いと云ふことは、決して國の利益でない。又英吉利の政治が巧く行つて居る、政黨政治が巧く行はれて居ると云ふが、英吉利の議員は大抵金持で、遊んで居る代りに政治をやる、議會に出るのは腹ごなしの積りで出て居る。政治を職業のやうにすることも怪しからぬ次第であるが、政治を道樂にされることも甚だ困る。一方に職業を有つて實際に働いて居る人が、議會に出て國の政治を議するから眞面目の議論が出る、道樂にやつて居る者が多いと、騷ぎや彌次が主になる、其の他種々の弊害も生ずるのである。

英吉利は資本の輸出國となつて、大變結構であつたが、餘り結構過ぎて魔が差して來た。勿論英吉利人自身には、魔が差したことは分らなかつたが、其の魔の影は獨逸と云ふ鏡に映つた。獨逸の進歩と云ふものは即ち英吉利のダレたと云ふことを半面に現はしたものである。英吉利人は獨逸が色々なことをして、自分の勢力範圍を脅かし、自分の邪魔ばかりして怪しからぬ、カイゼルが惡い、獨逸が不埒だと言つて居る。それは獨逸の惡い點もある、けれども半分は英吉利に惡い所がある。それが獨逸の發達と云ふ鏡に映つて來た。それも戰爭前までは氣が付かなかつたが、さて戰爭をして見ると、一揉に

採潰せるだらうと思つた獨逸が、三年掛つても容易に採潰せさうにもない。是は獨逸が強いと云ふばかりでなく、英吉利が弱いのである。そこで英吉利人も自分の弱いと云ふことを染々覺つた、さうして何故弱くなつたかと云ふ原因を色々研究して見ると、小さな點は除いて、大きな所だけに就て見るに、大體に於て獨逸よりも英吉利の方が優つて居る、道德に於て、政治に於て、其他色々の點に於て優れて居るが、唯だ一つ經濟上の原因に於て劣つて居る。其の事は最近有識者は自覺して來たやうであるが、一般の人はまだ自覺して居らない。總の英吉利人が之を自覺するやうになれば占めたものである。

そこで之を自覺した人々は、大に之を憂慮して、頻りに大騷ぎをし、國民勤儉野戰(National economic campaign)などゝ言つて大に一般の民心を警めて居る。それが爲め先頃總理大臣アスクイスのお孃さんの結婚の式に、三鞭を拔いて客に饗應したのは贅澤だとか、バルフォーアにグラスゴー市の名譽市民の免狀を贈つた、其の免狀を金の函に入れて贈つたのは勤儉の主旨に反して居るとか言つて問題になつたことさへある。如何に戰時とは言へ、僅か一箇の金の函、幾壜かの三鞭を、英國としてそれ程大問題にするにも及ばないことであるが、さう云ふことを眞面目に唱へて、國民の自覺を喚起しやうとして居るのである。

話は再び元に戻るが、英吉利が資本輸出の國是を採つたのは左程古いことではなく、先づ三四十年以來のことである。さてさうなると英吉利の外交、英吉利の海軍、其他一切の政治が、今までは商品の輸出を主として居つたものが、資本の輸出を本位として働くやうに變つて來た。即ち『貿易は國旗に從ふ』でなく、『資本は國旗に從ふ』と云ふ事になつて來た。商品の輸出を主としてやつて居つた時代には、英吉利の品物を買つて呉れさへすれば宜いので、お得意を作つて、お客樣の購買心を唆るやうに仕向け、それに對して外國が妨害を加へれば、それは戰爭をしても仕方がないが、さうでない限りは先方の自由にして置く。例へば支那に對して阿片を賣付ける、支那から言へば甚だ迷惑の話であるが、英吉利から言へば何でも賣付けて利益を得やうと云ふのであるから、之を